

## 第一章 勞働價值説と平均利潤率の

### 問題

(マルクスの價值學説に對する一批評)

姑らくトウガン・バラノウスキイに従へば、勞働價值説と稱すべきものには少くも三種あると謂ふ。その第一は、經濟行爲上の倫理的規範として勞働價值を立て、財がその生産に要する勞働量に應じて相互交換せらるゝことを以て正義の要求に適へるものとなす「理想的勞働價值説」。第二は生産上に投下せらるゝ勞働量を以て、財の相互交換比率を決定する——決して唯一にはあらざるも——最重要の要素となす「相對的勞働價值説」、而して第三は勞働を直ちに價値の絕對的實質と認むる「絕對的勞働價值説」が是である。第一の意味に於ける勞働價值説の主張者としては、遠くは中古の聖トオマスを擧げることが出来る。基督教の經濟上の

理想は「各人にその労働に應じて」の一語に簡約せられ、而して中世の所謂「公正なる價格」*Justum pretium*の説は、此理想と最密接なる關係に立つものであつた。併し此理想の奉ぜらるゝことは、必しも中世にのみ限られたのではない。生産物をしてその正當なる價格に於て賣買されしむることに依て、一人の他人の爲めに強奪せらるゝの状態を廢止しようとする案は、幾多の社會主義者に依て屢々提議せられて來たものである。而して此場合の正當なる交換比率は、即ち投下労働量、必要労働量に比例する交換比率であつた。此種の提案の最顯著なものは、恐らくブルドオンの説であらう。彼れは所謂「價値の制定」に依て、物々必ずその労働費用に應じて相交換せらるゝの状態を實現し、斯くして、各労働者をしてその全労働産物を收得せしめんことを企劃したのである。併し此の價値の制定は、彼れに取つて將來の理想たるに過ぎないもので、現在に於ては、財と財とが決して投下労働量に應じて相交換せられてはゐない事は、彼れの明かに認めてゐるところであつた。故に彼れは右述の意味に於けるその労働價値説を「革命的未來學説」と稱して居たのである。マルクスも亦、此意味に於ける労働價値説を主張するものであるかの如く

速了せられた事が全くないではなからう。併しマルクス自身の所説を精査する迄もなく、「哲學の貧困」に對するエンゲルスの序文中の言明に依ても、此種の「經濟に對する道義の應用」がマルクシズムと相容れ難きものである事は、最早爭ふ餘地がない。而して今此意味に於ける労働價値説を除けば、他の二つは何れも如何なる交換比率が正義の要求に適ふかを示すものではなくて、現に事實上に於て、財と財とが一定の比率で交換せられて居るのは、果して如何なる原因に由るものなるかを説明しようとするものである。而してトゥガンは比較的最も重要な原因としては、財の生産に要する労働量を、併乍ら是と相併んで、同じく財の交換價値に影響を與へる別の一要素として、財が生産されてから販賣せらるゝ迄に經過する時間を擧げて居るリカルドの説に對して、相對的労働價値説の名稱を適用し、マルクス及びロオドベルトスの價値論を呼ぶに絕對的労働價値説を以てして居るのである。但しロオドベルトスの價値學説に至つては、一貫を欠くの嫌があるもので、彼れが労働貨幣の説を唱へ、労働を以て價値の尺度たるに最も適するもの、労働を價値の尺度とする事が最も正理に適へるものなる事を主張すると同時に、勞

働が價値の尺度たる事は既に實現せられた事實ではなくて、將來に實現さるべき、努力の標的たる理想であるとの意味を反覆説述して居る點に於ては、彼れは最もブルドオンに近い立場を占め、またその財の市價は必しも常に其労働費用に一致するものではないけれども、交換の自由に放任せらるゝ場合には、結局是に歸着しようとするものだと言ふ説は、市價と自然價格との關係に關するリカルドの説と趣を同うして居るが、更に又分配理論に入つて、貸子の地代と利潤とへの分割を説明する場合のロオドベルトスは、價値が労働量に由て決せらるゝとの命題を、姑らく證明せられたものとして、其基礎にして居る。(本書第五六頁以下参照)。故にトウガンも評して、ロオドベルトスは凡べて三種の労働價値説を同時に主張するの不徹底を犯して居ると謂ふのである(Pugan-Baranowski, *Marxismus* S. 133-6)。併し何れにしても、價値を労働に由て説明しようとした近世の代表的な學説としては、マルクスの外には、リカルド、ロオドベルトスの學説を挙げなくてはならぬ。而してマルクスの體系に於ける價値と平均利潤率となる、前世記末以來の舊論題を新たに再び問題とするに際して、リカルド及びロオドベルトスの學説を參酌して、一

般的に労働價値説なるものゝ理論的構造を吟味するのは、此宿題を解決する上に、儼かに無用の業ではないと思ふ。

## 二

問題は斯うである。「マルクスの資本論第一巻に説かれるやうに、而してリカルドオが其價値論の章の前半に説き、ロオドベルトスがその分配理論に於て承認するやうに、財の價値が、その生産に必要な労働量のみを由て決定せらるゝものならば、生産に投下せらるゝ資本は同額であつても、その資本が代表する(若しくは働かす)ところの労働量が同一でない場合には、新たに産出せらるゝ収益は同一でなかるべき筈である。即ち同額の資本の擧げ得る利潤額、從て利潤率は、資本中の労働雇用に充てらるゝ部分の大小に由て、一々違がつて來なければならぬ筈である。然るにマルクスは、一方に於てリカルド及びロオドベルトスと同じく、利潤率なるものが、實際上に於ては決して資本の組成如何(即ちその如何なる部分が労働雇用の爲めに投ぜられ、如何なる部分が其以外の用に充てらるゝか)に由て一々

相違するものでなくて、利潤率は諸種の資本を通じて均一に歸するの事實、少くも傾向を認めて居るのである。其處でマルクスは矛盾に陥つて居るものではないかと云ふ疑が起るのである。併しマルクス自らの謂ふところに従へば、此の「矛盾」は外觀上の事に過ぎないので、労働價值説と平均利潤率とが真相に於ては決して相撞着するものではない理由は、資本論の後の卷に於て之を説明すると云ふ事が約束せられた。一八八五年に公にされた資本論第二卷には、此問題の解決は與へられて居なかつたが、此書の序文に於てエンゲルスは、主としてロオドベルトスを以てマルクスの秘密なる源泉にして、且つそのより優れたる先驅者となす一派の論者に向て「嘗に價值法則に抵觸せざるのみならず、否な却て此法則を基礎にして、均一なる平均利潤率が成立し得、又成立せざるべからざる所以」を説明せよとの問題を提出したので、此時以來資本論第三卷の公にされた一八九四年に至る十年間に於て、平均利潤率の「謎」の解決は、幾多の社會主義者經濟學者の著書論文の題目となつた。併し出題者エンゲルスの記するところに由れば、資本論第三卷序文是等の著書論文の中に於て最も優秀なる理解力を示したものは、コンラド・シユミット

の著、マルクスの價值法則に基づく平均利潤率「一八八九年」であつたが、而かも之れとても提出せられた謎を正解するものではなかつた。即ち此謎は、マルクス以外には何人の頭腦を以てしても解決することの出来ぬ、極端なる難問題だつたと云ふ事になる。然らばマルクス其人が與へた解答と云ふのは如何なるものであつたか。

マルクスは始めにA商品とB商品とが一定の比率、例へば  $x:y$  で相互交換されるのは、此の異なる二商品の間に、共通の或物が同一量丈け含まれて居るからだと云ふ考へから出發して、その共通の或物は労働で、之れが即ち價值實質であるとの推究に進み、一商品の價值はそれを生産する爲め「社會的に必要な労働時間」に由て定められ、同じ「社會的に必要な労働時間の生産物は相互に價值を等しうし、等價のものは等價のもの」と交換される」との結論に達したのである。而してこの理論を一商品たる労働力に適用すれば、その餘剩價值論が立てられる。即ち労働力の價值は労働者及び其家族の生活維持に必要な物品の價值に由て定まるのである。然るに労働者とその生活必需物の再生産に必要な程度以上の労働に服すれば、茲

表 一 第

| 資<br>本      | 餘<br>剩<br>價<br>值<br>率 | 餘<br>剩<br>價<br>值 | 利<br>潤<br>率 | 消<br>耗<br>不<br>變<br>資<br>本 | 商<br>品<br>價<br>值 | 費<br>用<br>價<br>格 |
|-------------|-----------------------|------------------|-------------|----------------------------|------------------|------------------|
| I 80c+20v   | 100%                  | 20               | 20%         | 50                         | 90               | 70               |
| II 70c+30v  | 100%                  | 30               | 30%         | 51                         | 111              | 81               |
| III 60c+40v | 100%                  | 40               | 40%         | 51                         | 131              | 91               |
| IV 85c+15v  | 100%                  | 15               | 15%         | 40                         | 70               | 55               |
| V 95c+ 5v   | 100%                  | 5                | 5%          | 10                         | 20               | 15               |

表 二 第

| 資<br>本      | 餘<br>剩<br>價<br>值 | 消<br>耗<br>不<br>變<br>資<br>本 | 商<br>品<br>價<br>值 | 費<br>用<br>價<br>格 | 商<br>品<br>價<br>格 | 利<br>潤<br>率 | 價<br>値<br>ト<br>價<br>格<br>ト<br>ノ<br>差 |
|-------------|------------------|----------------------------|------------------|------------------|------------------|-------------|--------------------------------------|
| I 80c+20v   | 20               | 50                         | 90               | 70               | 92               | 22%         | + 2                                  |
| II 70c+30v  | 30               | 51                         | 111              | 81               | 103              | 22%         | - 8                                  |
| III 60c+40v | 40               | 51                         | 131              | 91               | 113              | 22%         | -18                                  |
| IV 85c+15v  | 15               | 40                         | 70               | 55               | 77               | 22%         | + 7                                  |
| V 95c+ 5v   | 5                | 10                         | 20               | 15               | 37               | 22%         | +17                                  |
| 390c+110v   | 110              |                            | 422              |                  | 422              |             | 0                                    |

機的組成を異にする結果、それに應じて各産業は、各々その特有の利潤率を有たなければならぬ筈である事は、左記の第一表に示される通りである。

に消費せられた衣食住用品、及び消耗せられた生産用具の補償以上に、全く新たな価値が発生する。之が餘剩価値であつて、資本家の支出全資本に對する利潤となるものである。然るに此の新価値は、一に活労働のみから生ずるもので、既に生産用具に體現せられて居る死労働は、たゞその生産上に消耗せられただけが、其儘生産物の価値に移されるに過ぎぬと云ふところから、マルクスは資本の労働力に變形せらるゝ(即ち賃銀として労働力購買の用に充てらるゝ)部分を可變資本部分と名づけて、自餘の不變資本部分と相對せしめて居る。而して新たに生じた餘剩価値額の可變資本部分のみに對する比例が、彼れの所謂餘剩価値率、その資本全額に對する比例が利潤率である。然るにその全資本額中に於て可變部分と不變部分との占める割合は、技術上の關係から一定量の労働に對して建物機械道具原料を要する程度の一ならざる爲め、産業の種類に由て一々相違があるべき筈である。この技術上の理由に基づき決定せらるゝ資本の不變部分の価値と可變部分の価値との組合せを稱して、資本の有機的組成と謂ふ。そこで今凡ての産業を通じて餘剩価値率が同一(例へば百分百)であるとすれば、産業の種類に由て、その資本の有

即ち表の如くI乃至Vの五個の資本があつて其全額は各々百であるが、其中で不変資本(c)と可變資本(v)との占める割合は一々異なり、而して餘剩價值率は一樣に百分百であるとすれば、利潤率は第四項に示される如く資本の有機的組成に應じて一々異なり、而して生産せられた商品の價值(可變資本+不變資本)費用而して資本論第三卷の此點に到る迄にマルクスが説くところは、大體に於てその第一卷の讀者の當然豫期するところで、少しも了解に苦しむところはない。

然るに(マルクスに従へば)自由競争は、斯の如く各商品が其價值で賣られて、各資本百に歸屬する利潤額に異同のあることを許さない。資本は利潤率の低い生産方面から引出されて、高い方面に移され、彼此の供給の減少及び増加に由て平均が實現せられる迄、此の資本の移動出入は止まぬであらう。而して此平均が實現せられた場合には、凡て五種の産業に於て産出せられた餘剩價值總額が、五個の資本全額に對して、均等に配分されると謂ふ。さうすると前者は一一〇、後者は五〇〇であるから、二二%なる平均利潤率が成立し、各資本が此平均率に應じた利潤を得

んがためには、各商品は其の價值で賣れず、各々その費用價格に平均利潤二二%を加算した「生産價格」を以て賣られなければならぬ。此の個々商品の生産價格は、必然一部はその價值以上に昇り、一部はその價值以下に下らなければならぬ事は、上記第二表の示す通りである。

即ち此場合商品は、 $2+1+1=4$  だけ價值以上に賣れ、 $8+2=10$  だけ價值以下に賣れる。即ち商品の一部がその價值以上で賣られると同じ割合で、他の部分は價值以下で賣られる。而して此の如き價格で賣る事に依てのみIよりVに至る資本が、其有機的組成を異にするにも拘らず、能く利潤率が自I至Vに取つて均等、即ち二二%なることを得るのである(資本論三卷上一三五頁)。斯く商品が價值から離れた價格で賣られる事は、決して偶發的、一時的の現象でなくて、資本の有機的組成に異同があるところで、利潤率平均の一事を認める以上は、必然的、永續的に起らなければならぬ現象である。否、な却て一商品の生産價格は、例外的にのみ其價值と一致するもので、最も發達せる工業上の生産(即ち不變部分が重きを占める資本を以てする生産)に於ては、價值は生産價格以下にあるのが通則であると謂ふ(下



を承認する。之）彼れが人力に依て任意に増加し得べく、又その生産上に自由競争が行はれて居る貨物に就ては、その交換価値、即ち一貨物の幾許量か他の貨物と交換せらるべきやを決定する規則は、全然後に至り殆ど一に、と改む。その各々に費やされたる比較的労働量に由るものなり」と述べたのは、利潤率平均の作用を前提としての立言である。リカルドも亦アダムスミス及びスミス以前の經濟論者の多數のものと同じく、市場價格又は現實價格 (market or actual price) と、本來價格、自然價格 (primary and natural price) とを區別した。彼に従へば、市場價格は市場に於ける時々の需要供給に由て變動するもので、一時的には自然價格の上下に離れ得るものであるが、絶えず自然價格に歸着しようとしてゐて、決して久しきに亘つては自然價格から離れる事は出来ぬ。而してリカルドの交換価値と稱するものは、此の自然價格に外ならぬものである。然らば貨物の市場價格は、何故にその自然價格、即ち交換価値に歸着しようとするかと云へば、それは資本が、特に高率の利潤を生ずる生産業に集中し、或は特に利潤率の低い生産業から引出されて、供給の増減に由つて利潤率の平均が再び復せられる迄、その流出入を止めぬからである。即

ち此作用に由て、一貨物の市場價格が自然價格以上に上れば、その供給が増加して之を下降せしめ、反對に市場價格が自然價格以下に降れば、供給の減退が、それを再び舊に復せしめなければ已まぬと云ふのである。即ち彼れに従へば、利潤率が平均を得た時は、貨物の市場價格と自然價格、即ち交換価値とが一致する時である。(マルクスの場合には、利潤率が均一に歸する時は、即ち商品の價值から離れた生産價格の成立する時である)。「されば貨物の市場價格の、何時までも引續きその自然價格以上、若しくは以下に留まることを妨げるものは、凡ての資本家が懐ける、その基金(資本)を比較的不利なる用途から、有利なる用途に轉用せんとする欲求である。貨物の交換価値を調節して、その生産に必要な賃銀、及び資本をその原能率状態に復せしむる爲めに要する、他の一切の費用を支辨したる後、残る價值若しくは餘剰をして、各業に於て、投下せられた資本に比例するが如くならしむるものは此競争である。」(經濟學及び課税原理、第四章「自然價格及び市場價格に就て」)

此の價值と市場價格との關係に關するリカルドの説は、同額の資本は同量の労働を代表す(即ち同數の労働者を雇傭す)との假定の下に於てならば、無論承認す



ることが出来る。斯る假定の下に於ては、貨物の市場価格は假令一時その価値の上下に逸脱することがあつても、利潤率平均の作用に由て、必ず早晚之に歸着すべき約束を持つて居る。即ち現實の交換比率は需要供給の關係で定まるものではあるが、利潤率の平均は、価値から離れた市場価格を成立せしめるやうな需要供給關係の永續することを許さないのである。ロオドベルトスが交換の自由に放任せられて居るところでは、若し市價が「自然的」交換價值(労働費用に由て定まるところ)以上に在れば、均衡が恢復せられて、同量労働の産物と産物とが交換せらるゝやうになる迄、競争者が來り加はるであらうし、市價が「自然」價以下に降れば、その反對の事が行はれるから、市價は究竟「公正」若しくは「自然」なる「交換價值」即ち労働費用額に絶えず歸着しようとする傾を持つて居ると主張するのも、(前篇第一章)同様に同額の資本は必ず同量の労働を動かすとの前提の下に於てならば、固より承認することが出来る。併し一度此前提を除けば、事態は全く一變するのである。假に二人の同じく一萬磅の資本を投じて生産を行ふものがあつて、一方はその資本の大部分を機械に投じ、一方は大部分を賃銀として支出したとして、生産物が夫れ夫

れその投下労働量に應じて賣れるものとすれば、同じ一萬磅の資本に對して、一方の受ける収益は甚だ小さく、他方の収益は之に比して甚だ大なるべき筈である。其處で資本が此の不利の産業を去つて有利の産業に移り、供給の増減、從て一方の價格の騰貴、他方の價格の下落に依て、利潤率が平均を得るに至つて、始めて資本の流入が止むものとすれば、その平均を得た場合の價格、即ち自然價格は、決して投下労働量に比例したものではない。マルサス、トルレンス等が指摘して、リカルドオに批評を加へたのも亦此點であつた。勿論リカルドオも始めから此點に心着かなかつた譯ではないが、今是等の批評に接して、漸く深く此一面に注意を向けるに至つた。彼れの經濟原論が始めて出た時から、その第三版が公にされるまで(或は其以後に至るまで)に、彼の學説が闕した修正は、凡べて彼れが同額の資本は必しも同量の労働を代表するものではないと云ふ一點に漸く重きを措くに至つた結果である)と云つて好い。換言すれば、リカルドオが同時代の人と共に、比較的輕視して居つた固定資本なるものに漸く重を措くに至つた結果である。經濟原論第三版に於てその價值論に加へられた修正、又新たに加へられた機械論の一章は、何

れも是に由て説明することの出来るものである。(拙稿「リカルドオの機械論」三田學會雜誌第十五卷第十二號)既に資本中に於て固定資本と流動資本との占める割合如何に由て、同額の資本は必しも同量の労働を雇傭せずと云ふ一點に重きを措くに至れば、労働價值説は當然修正せられなければならぬ。乃ちリカルドオはマカロツクに書を與へて、價值を左右する原因は一つでなく二つである。即ち其貨物を生産するに必要な労働の相對量、及び造られた貨物が市場に賣出される迄に經過する時間が是であつて、而して固定資本に關する一切の問題は此の第二の規則の範圍内に落ちるものだと明言するに至つた所以である。(一八二〇年五月二日、六月十三日附書簡其他)

## 四

其處でマルクスに歸ると、彼れは固よりリカルドオと同じ方法で、労働價值説を證明する譯には行かぬ。彼れは資本の有機的組成が、凡ての産業を通じて同一であると云ふが如き事は、夢想もして居らぬ。又十八世紀末及び十九世紀初年の經

濟學者に就てならば、姑らく斯る假定を寛假し得るとしても、機械の應用の既に充分盛に行はれて居たマルクスの時代に於て、斯る假定の上に理論を建設することは何人も思ひ及ばぬところであらう。

マルクスは其初期の作たる「賃銀労働と資本」及び稍々遅れて「價值價格及び利潤」の中では、リカルドオ同様明に市場價格が價值を旋廻中心として動搖すると説き、資本論第三卷の中でも亦商品の市場價格と市場價值との關係に就ては「價值は價格が其周圍を旋廻する引力中心點であつて、此點に於て價格の騰落が平均せらるるものゝやうに説いてゐるが、既に一度生産價格が成立すれば、此事は最早云はれなくなる(此點に就ては本書第三篇第三章参照)。マルクスに於ける生産價格と價值との關係は、リカルドオに於ける市場價格と價值との關係ではない。マルクスに於ける商品の生産價格は、決して偶々其價值から離れて、絶えず之に歸着しようとする傾向を示してゐるものではなくて、必然の理由があつて、價值の上下に離れたものである事は、既に前段の説明に由て慥かめられて居ると思ふ。前記第二表に就て見れば、その第六項に示されて居る五種の商品個々の價格は、決して第四項

に現れて居る個々の價值に一致しようとして、其周圍に旋回して居るものではない。資本の有機的組成に異同のあるところで、利潤率が平均すれば、個々商品の價格は、必ず然らざるべからざる理由に由て、其價值から離反する。決して偶然一時的にさうなつて、絶えず其本源の状態に復歸しようとして居るとリカルドオの市場價格の價值に於けるが如きものではないのである。故にマルクスの場合には、リカルドオが謂ふのと同じ意味で、價值が價格を支配するとは云へないのである。マルクスの場合の價值は、決して價格動搖の歸向中心たるものではない。(近頃山川均氏に依て翻譯されたブヂンの「マルクス學說體系」には「價值は價格の測定せられる標準を立てるものであつて、價格は自然に此標準に一致する傾向を持つて居る。……市場の『値切りごぎり』の結果として生じる價格は、自づと其の標準價值の方向に牽き着けられる」(九五頁)と記して居るのは誤解であらう。その事は同じ著者が二一〇頁前後に於て自認して居る。)假令また究竟に於て價值に一致しようとする傾きを持つて居ても、現實に於て價值から離れた價格が成立して居る以上、マルクスの論理を以てしては、彼れの價值法則は立てられない。彼れの證明

方法を以てすれば、個々商品の現實の交換が、一々價值に由て定められた比率に於て行はれなければ、價值法則は維持する事が出来ないのである。

抑もマルクスは一商品の或分量と別の商品の或分量とが、相互交換せられると云ふ現實の事實から出發し、推究して、等量の勞働の生産物は等量の勞働の生産物と相交換されるとの命題に到達するのである。資本論第一卷(第一篇第一章)に就て見るに、假に一クオタアの小麦と二ツエントネルの鐵とが相互交換される事實があるとするれば、彼れは此兩商品が此割合で相交換されるのは、此二者の間に同一量の勞働が含まれて居るからだと言結するのである。彼れは右の事實を

小麦1クオタア＝鐵2ツエントネル

なる方程式で現はし、さて此方程式は抑も何を意味するかとの問を設ける。而して自らその間に答へて曰ふ「それはこの一クオタアの小麦と二ツエントネルの鐵と云ふ二つの違つたもの、中に、等量の共通なる或物が存在することを語る。即ち此二者は、二者の何れにもあらざる或る第三のものに等しい。二者の各々は、それが交換價值なる限り、この第三のものに約元されなくてはならぬ」と。然らばそ

の共通の或ものは何かと云へば、マルクスはそれが商品の幾何學的、物理學的、化學的又はその他の自然的性質ではあり得べき筈がないと云ふ。そこでそのあり得可からざる性質を抽象して仕舞ふと、此の思考上の蒸溜法の結果として、たゞ一つ兩者に共通な性質のみが残る。それは二商品が共に労働の生産物たるの一事である。即ち是等のものは、今その生産に人間の労働が費やされ、人間の労働がそれに蓄積せられて居ると云ふ事のみを示して居る。而して此兩者に共通なる社會的實質の結晶として、是等の物は價值—商品價值である。然らば商品の價值は何に由て測定されるかと謂へば、それは商品中に含有せらるゝ價值形成物質、即ち労働の分量に由て測られる。併し此場合の労働量とは、個々の場合に生産上現實に費された労働量ではなくて、一物の生産の爲め社會的に必要なる労働量、委しく謂へば、普通の生産條件の下で、その社會に普通の熟練の程度、及び普通の労働強度を以てして、一物を生産するに要する労働時間である。而して等々の労働量を含むところの、即ち同じ労働時間に於て生産され得るところの諸商品は皆同じ價值を有し、一商品の價值の他の各商品の價值に對する關係は、その一商品の生産に必要

なる労働時間の他の商品の生産に必要な労働時間に等しく、商品は其價值に應じて交換せられ、又は等價物は等價物と交換せらるゝのである。即ちマルクスに従へば、一般にx量の小麦とy量の鐵とが相交換せられるのは、此の兩者に同一の(社會的に必要なる)労働量が含まれて居るからだ、と謂ふのである。

此の論究法はマルクス獨特のものであつて、従來労働價值論者と稱せられた何人の證明法とも全然趣を異にして居る。さて是に對しては如何なる批評が下されるかと謂ふに、最初に起る疑問は、相互に交換せらるゝ貨物間に「共通なる同量の或物は果して労働のみであるか、及び労働の生産物ではなくて、而かも相交換せらるゝものゝ交換比率は何に由て説明すべきかと云ふ事である。共通なる或物として考へられ得べきものゝ一は利用である。マルクスは使用價值の抽象と云ふ事を頻りに力説して居るが、例へば食欲を満たし、或は寒暑を防ぐと云ふ特定の用途は一々の商品に由て異なるものではあるが、マルクスが個々の商品を、建築労働、紡績労働、指物労働等、個々特定の労働の産物と見ずして、一般的抽象的、人間労働の産物と見るやうに、食欲を満たすもの、又は衣欲を満たすものとは考へず、一般的

に人間欲望を満たす力を有するものと云ふ事に、相互の共通點を求めると云ふ事は、労働を以て共通要素とするのと、同じ程度に於て許さるべき事ではなからうか。次に又賣買交換はせられても、労働の生産物でないものに對してマルクスは何う云ふかと云ふに、彼れは此種の財を其價值法則から除外して居る。即ち例へば彼れは土地には價格はあるが價值はない。何となれば之れは労働の生産物でないから、と云ふのである。(第一卷平民版六三―四頁) 固より斯の如き特定の局限せられた意味に價值なる言葉を用ゐるのは、人の隨意であるが、先づ労働生産物以外のものを除外して置いて、さて残るところのもの、即ち商品に就て、是れに共通の特徴は何かと云ふ問を發し、それに對して、労働生産物たるの一事がそれだと答へるのは、或る一特徴を有するものゝみを集めて、さて是等のものに共通の特徴は何かと云ふ問を發し、件の一特徴が即ち是れだと答へる事に歸着しはせぬか。此種の論究に依つて、吾々の認識は少しも歩を進めることは出來ないのである。併し是等の疑ひは今姑らく不問に附する。私が最も重要視するのは、上述の如き論理的過程に依つて證明せられた價值法則は、必ず現實の商品交換比率を支配して、商品

は必ずその價值で賣買されなければならぬものだ、と云ふ一點である。上記マルクスの價值法則證明法が正しいものならば、それは生産價格に於ける商品の現實交換比率にも適用されなければならぬ。而して生産價格が價值から離れて居れば、當初の價值法則その者は破壊される事になるのである。(マルクスは現實の市場價格が、常に價值のみならず、生産價格からさへも離れる事のあり得べきを認め居るが(三卷上二七九頁)論を簡單にする爲め、姑らく商品は實際にその生産價格で賣買されるものと假定する。)

今假に $x$ クオタアの小麦と $y$ ツェントネルの鐵とは同量の労働に依て生産せられたものとする。然るにマルクスの生産價格の説に従へば、例外的場合を除くの外、現實の商品交換比率は、その含有労働量とは一致しないで、或はそれ以上或はそれ以下にあると云ふ。姑らく鐵の生産價格は其價值以上にあつて、 $x$ 量の小麦は $y$ 量の鐵とは交換されないので、 $y$ 量の鐵と交換されるものとする、是をマルクスに倣つて方程式に現はせば

$$x \text{ 小麦} = y \text{ 鐵} \text{ (若しくは)} x \text{ 小麦} = A \text{ 貨幣} = y \text{ 鐵}$$

となる。今此現實の交換比率に對して前に述べたマルクスの蒸溜的推究法を適用すれば何うなるか。私はマルクスに倣つて疑問を起す。「この方程式は抑も何を意味するか。」マルクスに従へば吾々は之に對して「それはこのx量の小麦とy量の鐵と云ふ二つの異がつたものの中に、等量の共通なる或物が存在することを語る。即ちこの二者は二者の何れにもあらざる或る第三のものに等しい。二者の各々はそれが交換價值なる限り、この第三のものに約元されなくてはならぬ」と答へなければならぬのである。然らばその共通の或るものは何か。同じくマルクスの推究を繰返して行けば吾々はこのx量の小麦とy量の鐵とが交換されるのは、此兩者に同量の社會的必要勞働量が含まれて居るからだ」と云ふ結論に到達せざるを得ないのである。吾々はx量の小麦とy量の鐵とが等價値であるとの前提から出發して、x量の小麦はy量の鐵と等價値だと云ふ結論に到達した。x量の小麦に含まれて居る勞働量は、y量の鐵に含まれて居る勞働量とも等しく、それより小なるy量の鐵に含まれて居る勞働量とも等しいと謂ふのである。これは明かに非論理である。

マルクスは此批評を避ける事は出来ぬ。彼れが始めに  
 x量の小麦 = 2y量の鐵

なる方程式を立て、此方程式は抑も何を意味するかとの問を發した際には彼れは未だ其價値法則を持つて居らぬ。従つては彼れはたゞ目前に與へられた現實の交換比率を取て、それを推究の出發點とした(さうするより外に途はない)のである。彼れは鐵と小麦とが價値法則に従つて相交換されて居るか、或は生産價格の法則に従つて交換されて居るかを全く知らない。従つて彼れの推究法にして許さるべくんば、それは現實に行はるゝ交換比率の如何なるものに對しても適用され得るものでなければならぬ。而してそれを價値と離れた生産價格に適用するの結果は、價値法則其者を自滅せしめるのである。彼れの價値法則は、相交換さるゝ二商品には、共通の或物が同量丈け含まれて居るとの斷定から出發するもので、決して上記一クオタアの小麦と二ツエントネルの鐵の個々に就て、その生産に要する勞働量を調査し、その結果として歸納的に、此二者が相交換されるのは互に勞働費用を等しくするからであると論結したのではない。若し相交換さるゝ二商品の

個々に就て、その労働費用を調査したならば、マルクスは決してその同一ならざる事を発見したであらう。それは資本第三卷上第十章の後半、市場価格と市場価値とを論ずる條下に於て、マルクス自身の明かに認めて居るところである。

以上がマルクスに對する私の批評の主要點である。而して右の理由に基づいて、彼れの價值法則は平均利潤率と兩立し難きものであると斷定する。ブヂンは前掲の書の「マルクス價值學說の大矛盾」なる一章の中に此問題を捉へて、マルクスの決して矛盾なく誤謬なきことを反覆辯明して居るが、その能辯にも拘らず、議論は薄弱である。商品の現實の價格が、必しも價值と一致せぬものならば、相交換せらるゝ商品間に共通の等量物としてのみ考へられた價值の法則は、抑も何うして立てられるか。此問に對する答へは與へられて居ないである。

## 五

右述の如く、生産價格は最初に立てられた價值法則殊にその論證方法と相兩立し難きものであるが、猶ほ價值法則は、生産價格とは一致せぬ迄も、之を支配すると

云ふ意味に於て正しいと主張する議論が立てられ得る。その一つは、成程個々の商品は、或は其價值以上、或はその價值以下に賣れるけれども、或商品が價值以上に賣れる丈け、他の商品は其價值以下に賣れるのであるから、前掲第二表參看一切の産業全體を總括すれば、生産價格の總額は價值總額に一致する。此意味に於て價值法則は効力を失はぬとの説である(資本論三卷上一二八、一四〇頁)。これと稍々似た説はロオドベルトスにも見出される。彼れは前述の如く、労働價值説に基づいて分配理論を立てたのであるが、併し又同時に、其分配理論の中で甚だ重要な役目を演ずるものは、普通利潤(ueblicher Gewinn)又は均等利潤(gleichmaessige Gewinne)であつた。併し固より此兩者は兩立する事が出来ないで、彼れはその労働價值説の方に制限を加へて、個々の生産物は必しもその労働費用額に應じて交換せらるるものではないが、大體に於て(im allgemeinen)労働價值説は眞理だと云はうとしたのである。(Zur Erkenntnis unserer staatswirtschaftlichen Zustände, S.130—Das Kapital S. 11-12)

併し、此の労働費用は全體に於て交換を支配する、或は價值總額は價格總額に一致するとの説は、抑も何を意味するか。元來吾々が價值法則に求めて居るのは、個

々商品の交換比率の説明であつて、マルクス自身も亦、一定の比率に於て交換せらるゝ二商品の間に、共通物を求めるところから出發して居るのであるから、價格の合計總額が、價值の合計總額に一致すると云ふ答へは、最初の間に外づれて居るのである。一クオタアの小麦が何故二ツエントネルの鐵と交換されるかと云ふのが問題であつて、此の二つの物の價值及び價格の合計が一致するか、又はせぬかと云ふ事を尋ねる爲めならば、彼の方程式を立てる必要がないのである。既にボエム・バズルクの指摘して居る通り、貨幣の仲介を除いて考へれば、結局貨物が貨物と交換されるのであるから、一の貨物は貨物たると同時に、交換の相手たる貨物の價格である。従て貨物全體の合計は、それに支拂はれる價格の合計と當然同一物である。即ち一社會の生産物全體の價格は、生産物全體その者だと云ふ事に歸着する。Aなる貨物とBなる貨物が一對三の割合で交換されるとすれば、一Aは三Bの價格、三Bは一Aの價格である。従てSB+1Aなる合計に對する價格は、またSB+1Aに外ならぬ。さうして見ると、商品全體の價格は商品全體の價值に一致すると云ふ事は、如何にもその通りには違ひないけれども、それは畢竟同じ物は同じ

物だと云ふ *tautology* に歸着するので、何等の答へにもなるものではない。同じ論法を以てすれば、商品總額の重量は、商品總額の重量と一致するから、商品の交換比率はその重量に由て決せらると云ふ法則も立てられるのだと、ボエムは酷評して居る。(Sim-Bawerk K. M. and Close of His System pp. 74-5)

價值は依然として生産價格を支配すると云ふ説の、更に別の一つと見るべきものは、商品全體の價值總額は、價值法則に由て定められ、此の價值總額が餘剩價值總額を決定し、餘剩價值總額が資本總額に割當てられて平均利潤率が成立し、平均利潤率が、特定産業の資本に適用せられて利潤額が定まり、利潤額が一要素となつて生産價格を決定する。即ち價值は結局生産價格を決定すると云ふ説である。(三卷上、一五九頁)

今順次此説の當否を檢して見ると、先づ一商品の生産價格は何を以て成るか、と云ふに、既述の如く、それは費用價格と投下資本に對する平均利潤との合計である。然らば其費用價格はと云ふに、之れは支出せられた貸銀額と、生産用具消耗高との加算から成立つものである。然るに生産物が其價值で賣買せられずして、生産價



格で賣買されるのに、生産用具のみ獨り依然として價值通りに賣買されると云ふ事は考へられぬ。此場合にはマルクスも認めて居る通り、三卷上、一三八以下、一四四、一八六頁(生産用具も亦其生産價格を以て賣買されるのが當然である。然らば此の生産用具の生産價格は何を以て成るか)と云ふに、これも亦費用價格、即ち賃銀と消耗生産用具の價格とに、支出資本に對する平均利潤を加算したものに外ならぬ。然らば更に此消耗生産用具の價格はと云へば、これ亦賃銀と消耗生産用具及び利潤を以て構成されるのである。今Pを以て利潤、kを以て費用價格、lを以て賃銀額、kを以て生産用具の價格を示せば、先づ商品の生産價格は $k+l$ である。而して此kは、更に $l+(k+l)$ に分解せられ、更にkは $l+(k+l)$ となり、 $l+(k+l)$ となる。斯くして生産用具の價格を分解し分解して、最後迄(即ち人間が無價の自然に直接當面する迄)廻ると、商品の生産價格なるものは、畢竟生産各段階に於ける賃銀の合計 $(l_1+l_2+\dots)$ と同じく各段階に於ける利潤 $(p_1+p_2+\dots)$ との和に外ならぬと云ふ事になる。然らば此賃銀額は何に由て定まるかと云ふと、各段階に於ける投下労働量と賃銀率とに由て定まるが、商品の價值は労働量のみに由て定ま

るものであつて賃銀率の高低は決して價值を左右するものでないと云ふのは、マルクスの主張するところであるから、如何なる事情の下に於ても、賃銀の騰落は決して商品の價值を……動かす事能はず)以上の分解の結果として、茲にマルクスの價值論と相容れない一要素が、生産價格の決定に参加して居ると云ふ事になるのである。そこで轉じて、利潤の方を見ると、商品の價值總額が餘剩價值總額を決定すると云ふが、餘剩價值總額は、單獨に價值總額のみで決定せられるものではなくて、價值總額から、支拂はれた賃銀總額を控除した殘額を以て成るのである。そこで又賃銀總額は何に由て定まるかと云ふと、之を定めるものは、労働量と賃銀率とである。然らば賃銀率は何に由て定まるか。それは價值法則に従ふものではないだらうか。マルクスは始めには、労働力の價值は労働者生活必需品の價值に由て定まると説明したが、商品價值が變じて生産價格となる曉に於ては、労働力の價值も亦生活必需品の價值から離れて、その生産價格に従ふのが當然であつて、マルクスも此事を承認して居る。……賃銀の消費に、生産價格をその價值と異にする商品が入る場合には、 $20\%$ 「可變資本、即ち支拂はる、賃銀」は價值から離れ得るであら

う。三卷上、一八六頁)さうすると剰余価値總額を決定する要素の中の少くも一つは、價值法則の支配を受けぬ異分子であると云はねばなるまい。それではその可變資本の生産價格は何で定まるかと云ふ問が起り得るが、之は前述の理に由て、費用價格の分解又分解に由て、結局剰余価値と賃銀額との和に外ならぬと云ふに歸着するのである。更に次の段に進むと、假に剰余価値額が決定せられたとしても、平均利潤率は一個の比率であるから、それは剰余価値總額のみによつて定まるものでなく、剰余価値總額と總資本額との比で定まる。其處で總資本額と云ふ一要素が考慮に入つて来る。次に個々價格中に入る利潤額は何で定まるかと云ふと、特定産業に於ける投下資本額に、平均利潤率を乗じた結果として定まるのであるが、その投下資本額は雇傭労働量と賃銀率とに由て動かされる。其處で又再び賃銀率なるものが現はれて来る。これは利潤額が定まる迄の手續であるが、始めに述べた通り、商品價格は利潤額のみによつて定まるのではなく、平均利潤と支出賃銀總額とに由て定まるのであるから、利潤も亦價格決定の一要因に過ぎぬと云ふことになる。(此一節ボエムに據る)

甚だ煩雜な説明になつたが、要するに生産價格なるものを分解して行けば、結局利潤と賃銀とに約元せられ、その賃銀の生産價格を更に分解すれば、同じく利潤と賃銀とに約元せられ、利潤の方を取て、其決定要因を分解すれば、矢張り同じく賃銀率なるものが其中に現はれて来るのである。價值は何で決まるか。生産費で決まる。生産費は何で決まるか。生産費の生産費で極まる、と云ふのでは、大地はアトラスに依て擔ひ支へられて居ると云ふ説明と同じ論法に歸着しはせぬか。大地はアトラスに依て支へられて居るものならば、之を擔ふアトラスは何の上に立つて居るか。更にアトラスが立つ第二の土地は何に依つて支へられて居るか。第二のアトラスは更に又何の上に立つか。嘗て奧太利派の一學者は斯う云つて生産費説を評したが、今右に述べたところに由ると、マルクスの生産價格の説も亦稍々是に類した批評を避けることが出来ないやうに思はれる。

而かもこれは凡べて前に述べた商品の現實の價格が、それに含まるゝ社會的必  
要労働量と一致せぬものならば、相交換せらるゝ商品間に共通の等量物として考  
へられた價值の法則は、如何にして立てられるかと云ふ、最も根本的な疑問を姑ら

く措いて其上での議論である。

附記 態々指摘する程の事ではないかも知れぬが、マルクスが平均利潤なるものを、或は投下資本全額に平均利潤率を乗じた積として、或は費用價格に平均利潤率を乗じたものとして説いて居るのは(三卷上、一三二、一四四頁其他)讀者を迷はせる。その何れか一方に決定することに由て、説明用の數字又は符號は、多少の訂正を要するであらう。(改造第四卷第二號發表)附記第二。交換比率を支配するものとしての労働價值説に對する批評は動もすれば、即ち家に依つて、労働搾取の事實を否認するものと誤解せらるる恐れがあるから、拙著「經濟學説と社會思想」から特に左の一節を引用する。曰く、「……労働價值説が成立たないからと云つて、労働搾取の事實をも無視しようとするのは甚だしい即断である。社會の中の労働せざる一部分が労働に服して居る他の部分の負擔となつて居る事實は、別に抽象的理論の證明を俟つまでもなく、吾々が普通の觀察によつて最も明白に知り得るところである。ベルンシュタインは曰ふ『……實際の事實が、商品の生産及び分配上に參加して居るのは僅かに社會の一部分に過ぎないで、他の一部分は、生産と何等直接の關係のない勤務に對して所得を受けて居るか、或は全く労働せず所得を得て居るかして居る事を示して居る。斯くして生産に従

事して居るよりは確かに多くの人が、生産従事者の労働に依て生きて居る。而して之に加ふるに、所得統計は生産に參加して居ない階級が領得する分前の全生産額に對する割合は、此階級の生産階級に對する割合よりも大きい事を示して居る。この後の階級の餘剩労働(自己の生存を支へる以上に行つて居る労働)は、……一個の經驗的事實であつて、演繹的證明を必要とせざるものである。マルクスの價值論の當否は餘剩労働の證明には何うでも好い事である』(Evolutionary Socialism p. 35)。トウゲン・バラノウスキも亦同趣旨の事を云つて居る。『資本主義社會並に歴史上それに先だつ社會組織内に於て、労働搾取の事實の存在することを證明する爲めには、何等の價值學説に頼る必要がない。斯る學説の助けなくしてサン・シモンの徒及びベカウルは、苟も生産要具の私有せられるところでは労働搾取の避くべからざる事を證明した。法律上の見地からすれば、其間に多大の相違があるに拘らず、經濟上の性質に於ては、資本家の貸銀労働者に對する關係は、正に奴隸の持主の、奴隸に對する關係と同一なることを彼等は證明した。而して此事は價值の性質如何に拘りなく正しいのである。三鞭酒の高價は労働量に依ては定まらないで、その需要に對して稀少なることに依て定まる。而してそれは又更に、葡萄を栽培すべき土地の稀少なることと直接に相關

係して居る。而かも猶ほその葡萄の栽培に適した土地の所有者に依て收得せらるゝ地代は不勞所得であつて、従つて正に他の如何なる地代とも同じく勞働搾取の結果なのである』と(Modern Socialism p. 56)。私はこの兩家の説に左祖することを辭せざるものである』と。(同書第六六―九頁)

## 第二章 再び勞働價值説と平均利潤率

### の問題を論ず

——山川均氏の批評に答ふ——

左の一篇は一種の批評に對する一種の答への試みである。批評の原文を知る者には多少の興味があるかも知れぬが、さうでない者にとつてその恐らく無用の文たるべきことは著者自らよく承知してゐるのである。

一

「改造」二月號に寄稿した「勞働價值説と平均利潤率の問題」と題する文章(本書前章)で、私はマルクスの價值論と價格論との間には矛盾があるかないかと云ふ舊問題を論じ、矛盾があると云ふ方の側に一票を投じて、且つ其理由を述べて見たが、米人ブチン著「マルクス學說體系」及び同じく米人ウンタアマン著「マルクス經濟學」の翻

譯者なる山川均氏は、兩原著者の立場からして大に私の説を非なりとし、之に對して雄辯にして且つ勇猛なる批評を加へられた。〔小泉教授のマルクス批評を讀む〕社會主義研究、五月號一五六—一八二頁。山川氏は物覺えのいゝ人で、今から三年許り前、私が中央公論に寄稿した文章の一節で「マルクスの弟子等は今以てボエムバズルクに對して借りがある、彼等は此の借金を返済して居らぬ」と云ふ意味の事を書いたのをよく覚えて居て、今迄にも既に二三度此に就て嫌味を云はれたが、今度の批評の中にも此事を持ち出して來られ、而して私をボエムの爲めに使ひ走りの勞を厭はぬ債權取立人に擬せられたのは、たしかに一趣向であつた。併し山川氏の明言斷言するところに由れば、此の債權取立人の催告に逢つても、山川氏は「格別驚きもしなかつた。況んや格別支拂はうとはしなかつた」さうである。それは此借金が疾くに支拂ひ濟みになつてゐるからであると言ふ。たゞ此の催促されても格別驚かぬ支拂濟みの借金の言譯の爲めに、今回廿七頁(千九十二字詰)に亘る長文を起草されたのは、少々辻褄があつて居らぬやうだが、今そんな事を一々取立て、云ひ出しては切りがないから、凡べて省略して直ちに本題に入る。

自分の説に對して批評を受けた場合に、人は屢々其批評が自説の要點に觸れてゐないことを嘆ずるものであるが、幸にして私の場合には、左程うるさく此嘆聲を繰返す必要はない。山川氏の批評は充分私の論の要點に觸れ、而して其要點は、一誤解がないとは云はぬが——思つたよりも、正當に理解せられて居るのである。それでは私の論の要點は何處に在るか。茲に再び私の論の主旨を明にし、且つ山川氏の批評の價値を定める爲めには、何うしても今一度マルクスの價値論價格論の大様を述べて置く必要がある。そこで再三の重複でまことに恐れ入るが、既掲拙稿中の一節を今また次に抄出することを許して戴き度い。

二

マルクスは始めにA商品とB商品とが一定の比率、例へばMで相交換されるのは、此の異なる二商品の間に共通の或物が同一量だけ含まれて居るからだと言ふ考へから出發して、其の共通の或物は労働であつて、之が即ち價値實質であるとの推究に進み、一商品の價値はそれを生産する爲め「社會的に必要な労働時間」に

由て定められ同じ労働時間の生産物は相互に価値を等しうし等價のものは等價のものと同交換されるとの結論に到達したのである。而して資本主義社會の下に於ては、労働力も亦一の商品であるから、其價值も亦同一の理に由て、労働者自身及び家族の維持に必要な物品の價值に由て定まるのである。然るに労働者が、その生活必要物の再生産に必要な程度以上の労働に服すれば、茲に消費せられた衣食住用品及び消耗せられた生産用具の補償以上に、全く新なる價值が発生する。之が餘剩價值であつて、資本家の支出總資本に對する利潤となるものである。然るに此新價值は一に活労働のみから生ずるもので、既に生産用具に體現されて居る死労働は、たゞその生産上に消耗された、丈けが其儘生産物の價值に移されるに過ぎぬと云ふところから、マルクスは資本の中、賃銀として労働者雇傭の用に支出せらるゝ部分を可變資本部分と名づけて、自餘の不變資本部分と相對せしめて居る。而して新たに生じた餘剩價值額の可變資本部分のみに對する比例が所謂餘剩價值率、その資本全額に對する比例が利潤率である。然るに全資本額中に於て可變部分と不變部分との占める割合は、技術上の關係から、産業の種類に由て一々

第一表

| 資本          | 餘剩價值率 | 餘剩價值 | 利潤率 | 消耗不變資本 | 商品價值 | 費用價格 |
|-------------|-------|------|-----|--------|------|------|
| I 80c+20v   | 100%  | 20   | 20% | 50     | 90   | 70   |
| II 70c+30v  | 100%  | 30   | 30% | 51     | 111  | 80   |
| III 60c+40v | 100%  | 40   | 40% | 51     | 131  | 91   |
| IV 85c+15v  | 100%  | 15   | 15% | 40     | 70   | 55   |
| V 95c+5v    | 100%  | 5    | 5%  | 10     | 20   | 15   |

相違があるべき筈であるが、此の技術上の理由に基づいて決定せらるゝ不變資本部分と可變資本部分との組合せが、所謂資本の有機的組成である。そこで今凡べての産業を通じて餘剩率が同一(例へば百分百)であるとすれば、産業の種類に由てその資本の有機的組成を異にする結果、利潤率は一々産業の種類に由て違がはなければならぬ筈であることは、正に上記第一表に示される通りである。即ち表示の如く、I乃至Vの各々全額百の五資本があつて、其中で不變資本(c)と可變資本(v)との占める割合は一々異なり、而して餘剩價值率は一樣に百分百であるとすれば、利潤率は第四項に示される如く、資本の有機的組成に應じて一々異なり、而して生産せられた商品の價值(三)騰増(十

表 二 第

| 資<br>本      | 餘<br>剩<br>價<br>値 | 消<br>耗<br>不<br>變<br>資<br>本 | 商<br>品<br>價<br>値 | 費<br>用<br>價<br>格 | 商<br>品<br>價<br>格 | 利<br>潤<br>率 | 價<br>値<br>下<br>價<br>格<br>下<br>ノ<br>差 |
|-------------|------------------|----------------------------|------------------|------------------|------------------|-------------|--------------------------------------|
| I 80c+20v   | 20               | 50                         | 90               | 70               | 92               | 22%         | + 2                                  |
| II 70c+30v  | 30               | 51                         | 111              | 81               | 103              | 22%         | - 8                                  |
| III 60c+40v | 40               | 51                         | 131              | 91               | 113              | 22%         | -18                                  |
| IV 85c+15v  | 15               | 40                         | 70               | 55               | 77               | 22%         | + 7                                  |
| V 95c+ 5v   | 5                | 10                         | 20               | 15               | 37               | 22%         | +17                                  |

於て産出された餘剩價值總額が、五個の資本全額に對して均等に配分されるのだ

消耗不變資本＝費用價格。費用價格＋餘剩價  
 値＝商品價格は第六項の數字に示される通り  
 である。而して商品が其價值通りに賣買され  
 るものとすれば、斯うなるのが當然である。然  
 るに——マルクスは謂ふ——今日の經濟社會  
 に於ては、自由競争が行はれて居る爲めに、右述  
 の如く、各商品が其價值通りに賣買されて、各資  
 本百に歸屬する利潤額(即ち利潤率)に異同のあ  
 ることを許さない。資本は利潤率の低い産業  
 から引出されて、その高い方面に注入せられ、彼  
 此供給の増減に由て平均が實現される迄、此の  
 資本の移動出入は止まぬであらう。而して此  
 平均が實現された場合には、凡て五種の産業に

と謂ふ。さうすると前者は一一〇、後者は五〇〇であるから、二二%なる平均利潤  
 率が成立し、各資本が此平均率に應じた利潤を收めんが爲めには、各商品は其價值  
 で賣れずに、各々其費用價格に平均利潤二二を加算した「生産價格」を以て賣られな  
 ければならぬ。此商品の生産價格が必然一部は其價值以上に昇り、一部は其價值  
 以下に下らなければならぬ事は、右記第二表の示す通りである。斯く商品が價值  
 から離れた價格で賣られる事は、決して一時的偶發的の現象ではなくて、資本の有  
 機的組成に異同のあるところで、利潤平均の一事を認める以上は、必然的永續的に  
 起らなければならぬ現象である。否な却て商品の生産價格は、例外的にのみ其價  
 値と一致するもので、發達せる工業上の生産に於ては、價值は生産價格以下にある  
 のが通則であると謂ふ。

これが本論に必要な限りに於けるマルクスの價值論價格論の筋書である。

三

さて二月號所載の拙稿で、私は先づマルクスの説とマルクス以前の勞働價值説

との對照を試みた。それは、元來商品の交換比率は其生産に要する労働量に由て決せられると云ふことは、自明の公理ではないから、之に對する何等かの證明がなくてはならぬが、マルクス以前の労働價值論者は果して如何にして此理を證明したか、而して彼等の採用した證明法は、マルクスの場合にも利用し得べきものであるか、如何かを見る爲めであつた。ところがリカルドオに據ると、貨物間の市場に於ける現實の交換比率は、其の時々の需要供給に由て様々に動搖するものではあるが、併し此市場價格は結局其商品の自然價格、即ち價值に歸着しようとして此引力中心點の周圍に旋廻するものである。或貨物の市場價格が其價值以上に騰貴すれば、其生産者は平均以上の好利潤を收め得るから、他の方面の資本が是に集中せられて其供給が増加し、反對に市場價格が價值以下に降れば、生産者は特別に不利の地位に立つので、資本が引去られて其供給が減少するから、市場價格は、久しきに亘つては、價值以上にも以下にも甚しく外れることはあり得ない。而して此自然價格、即ち價值なるものは、貨物の生産に投下せらるゝ相對労働量に由て決せられるのであるから、此意味に於て、貨物間の交換比率は労働量に由て支配されると

云ふことが出来る、と云ふのである。労働量と比例しない市場價格を成立せしめるやうな需要供給關係は、假令成立しても永續せぬと云ふのである。ロオドベルトスも亦自由競争の行はれるところでは、市價は結局労働費用額に一致しようとする傾向を有すと主張するのであるから、其考へ方は畢竟是れと同一なるものと見て差支ない。ところが此説は資本の有機的組成に異同がないものと假定すれば、承認して少しも差支ないけれども、此假定を撤去すれば、忽ち不都合を生じて来る。リカルドオに従へば、市場價格が價值から離れたときは、利潤率に不同を生じたときで、利潤率が平均を得たときは、即ち價格と價值とが一致したときだと云ふのであるが、資本の有機的組成に異同のあるところで、利潤率が平均を得たとすれば、斯くして成立つた自然價格が決して投下或は必要労働量に比例するものでないことは、上記第二表の示すところによつて明白である。

ところでマルクスの場合には右に述べたリカルドオ、ロオドベルトスと同じ意味に於て必要労働量が商品の交換比率を支配すると云はれぬ事は勿論である。スマイスやリカルドオが謂ふ意味での市場價格は、マルクスの所謂生産價格を中心



として旋廻し、利潤率平均の爲めに結局之に一致しようとする傾を示すものだと云ひ得るが、生産價格其者は必然的に價值の上下に離れたもので、決して之に復歸し歸着しようとするものではない。其處で私は、マルクスの場合には、リカルドオ等の場合のやうに、何かの原因の爲め價格が價值から離れても自由競争(利潤平均)の作用に由て結局兩者が合致しようとするものではなくて、却て自由競争其者の爲めに價格が價值から離反するのであるから、マルクスに於ける生産價格と價值との關係はリカルドオに於ける市場價格と價值との關係ではない。……マルクスの場合にはリカルドオが謂ふのと同じ意味で、價值が價格を支配するとは云へないのである」と書いた。此場合私はたゞリカルドオ等が用ゐた労働價值説證明法がマルクスの場合には利用出来ないことを明かにすればよいのである。

## 四

さてこれに對して山川氏は何う云はれるかと云ふに、「社會主義研究」第百六十五頁から二三頁の間に於て、同君は頻りに卑下して見せたり、威張つて見たり、揉み手

をしたり、反り身になつたり、其態度は甚だ變化の妙を極めて居るが、要するに右の一點に對しては異論はない、異論がないどころではない、そんな極まり切つた事を問題にするのも馬鹿々々しいと云ふ處を見せて、「小泉教授によれば、『マルクスに於ける生産價格と價值との關係は、リカルドオに於ける市場價格と價值との關係ではない』のである。之は慥かに其通りである。……勿論、『マルクスの場合には、リカルドオが謂ふのと同じ意味で、價值が價格を支配するとは云へない』にきまつて居る。また何處にもそんな事を云つて居る者は無いのである」と(一六八頁)云ふのである。勿論これは私の云はうとした事を一層勇敢明白に斷言したのであるから、少しも不服はないのであるが、たゞ些か氣になるのは「何處にもそんな事を云つて居る者は無い」と云ふのに、マルクス自身が或場所では、明かに「そんな事」を言つてゐる事である。マルクスが批評から轉じて、殆ど始めて經濟學上の自説を述べた「賃銀労働と資本」の中では、彼れは商品の市場價格が其生産費、即ち間接直接に其物の爲めに費された労働量に歸着しようとして其周圍を旋廻する。蓋し市場價格が労働費用(即ち後に謂ふ價值)以上に上れば、他の方面から資本が流入して供給

を過剰ならしめ、反對に市場價格が價值以下に降れば資本が流出して他に移ることに依て供給を減少せしめるからであつて、而して此の資本の流出入は資本が一樣に普通利潤(die gewöhnlichen Gewinne)を收めるやうなつた點で止むの理なることを説いてゐる(カウツキイ版本二一—三頁)のみならず、其後十數年を経た一八六五年に書いた「價值價格及び利潤」の中でも、價值と價格との關係を、アダム・スミスに於ける自然價格と市場價格との關係と同一視して「價值は諸商品の價格が絶えず歸着しようとする中心價格」であつて「彼等は絶えずこれに向つて傾きつゝある」と明記してゐるのである。而して此思想は資本論第三卷中にも其跡を留めて「様々の生産部面の商品が其價值で賣られるとの假定は、云ふ迄もなく、價值は價格が其周圍を旋廻する引力中心點であつて、此點に於て價格の騰落が平均せらるゝことを意味するに過ぎぬ(第三卷上、一五七頁)と云ふやうな文句になつてゐるのである。併し利潤率平均、生産價格成立の上は、無論かう云ふ事は云はれない。(併し利潤率平均と云ふ事を度外すれば、猶更かう云ふ事が云はれなくなることは、本書第三篇第三章に説明する通りである)。兎に魚「そんな事」を云つてゐる者があるかないかに

二つ一と見よ

關する事實は此通りである。

併し何れにしても、マルクスの生産價格の説が立てられた曉に於ては、リカルドオが謂つたのと同じ意味で、價值が價格を引付けてゐると云へないことは勿論である。價格は價值に一致しようとはしないで、必然の理由に由て、(例外的場合の外は)價值から離反するのである。併し山川氏に従へば(一六五—七頁前後)此事は毫もマルクシストを當惑させるものではない。彼等に従へば價值が價格を引着けてゐるからこそ、價格は價值から離反するのである。山川氏は此處で問題を經濟生活から天體の運行に移して、一つの譬へを案出される。地球は太陽の周圍を廻轉しては居るが、常にこれから離反して居つて決して相衝突するものではないが、而かも地球と太陽との間には引力の法則が儼然と作用して居る事は疑ひない。價值と生産價格との關係も亦斯の如しと云ふのである。たゞ價值法則が抑も何故に引力の法則に該當するものか、又上記第二表第六項の數字が如何にして同第四項の數字の周圍に旋廻して居ると云はれるか、天界の譬へでなく、經濟生活の事實に引直してもつと詳しい説明を聴きたいのであるが、其説明はしないと山川氏

は云ふ。支拂濟の借金の爲めに、廿七頁の言譯を書く根氣のいゝ山川氏が、此處では忽ち氣短かな江戸兒に變つて、此點については、私の經驗によれば小泉教授の満足を買ふに足るような説明を試みることは逆も不可能である。それは子供に引力の法則を説明しても、呑み込まないのと同じだと思切りよく諦めて居るのである。併しこれは無論説明が出来ないと云ふのではない。説明しても無駄だから、しいと云ふのであつて、其間大に相違のあることは充分私にも解つて居る。

五

併し一旦は諦めても、純粹の江戸兒ではないらしい山川氏は、未だ全然此問題を放棄しては仕舞はない。其處で次に移つて、小泉の「満足を買ふに足るような説明を試みることは逆も不可能なる事を充分知りながら、猶目つ價值法則は假令平均利潤率の爲めに其作用を妨げられても、平均利潤其者は價值法則の支配を受けるものであるから、價值と價格と云ふ親子の仲を割いて居るものが、赤の他人ではなくて、矢張り同じ親の子である」と此警句は山川氏のもの(を説明するの無駄骨を

厭はれないのである。此點は私も二月號所載の論文の末段に稍々詳しく論じた事であるから、再三の重複を避ける爲め、山川氏の説明中、寡聞なる予に取つて稍々目新しく思はれる點丈を茲に抄出して見よう。山川氏に依れば(一六九頁)「思ふにこの種の反マルクス主義者(筆者註、不肖も其一人と見做さる)の『第一の根本的缺陷』は、價值と價格との關係のうち、唯だ寄せ算と引算との外何物をも見ようとせぬこと」ださうである。「彼等によればマルクス説は

$$\begin{aligned} & \text{可變資本} + \text{不變資本} = \text{消費} + \text{利潤} \\ & \text{可變資本} + \text{不變資本} = \text{消費} + \text{平均利潤} = \text{消費} + \text{價格} \end{aligned}$$

である。唯それだけである」と云ふ。「唯だ寄せ算と引き算との外何物をも見ようとせぬこと」が根本的缺陷だと云ふのであるから、山川氏は無論かけ算か割り算かを價值と價格との關係の中に見ようとせられるものに相違なからう。そこで山川氏新案の方程式はどう云ふものかと見るに、それが實に左の如きものであるのは愉快である。

$$\text{費用價格} + \text{剩餘價值} = (\text{平均利潤} - \text{剩餘價值}) = \text{價格}$$

又は 費用價格 + 剩餘價值 - (剩餘價值 - 平均利潤) = 價格  
 斯う書き替へて見ると、幾分か價值と價格との間の有機的の關係、若しくは必然的の關係を暗示するものとなる。此の山川氏の方程式は、勿論前の反マルクス主義者の價格方程式とは同じでない事が明かである。前の方程式には形を現はさない剩餘價值なるものが、山川氏の公式には、而かも二度迄姿を見せて居るのである。そこで二者の相違は何處にあるかと云ふ事をもう少し綿密に調べて見ると、前式の  $費用價格 + 剩餘價值$  なるものは、 $費用價格$  と同一物であるから、山川式の括弧を拂へば、つまり此式は前の式に  $剩餘價值 - 剩餘價值 = 0$  と云ふものを加へたものだ、と云ふ事が分る。而して此の  $剩餘價值 - 剩餘價值$  を加へることに依て、價格と剩餘價值従つて價格と價值との間に有機的の關係があることが明かにされると云ふのである。此方程式に依て私は興味を刺戟せられ、且つ大に悟るところもあつたから、試みに同じ原則に基づき一方程式を立て、山川氏の一察に供しよう。

今 Y を以て山川氏、B を以てブヂン、M を以てマルクスのそれ、 $\sim$  符號となし、而

して山川氏からブヂンを差引くと跡に何物も残らぬものと假定すれば、これは無論假定である。其方程式は

$$Y - B = 0$$

である。併し思ふに此公式の「根本的缺陷」は Y と B との間に唯だ引き算の外何物をも見ようとせぬことである。そこでこれに M を加へると、幾分か M と Y との間の有機的若しくは必然的の關係を暗示するものとなる。即ち

$$Y + (M - B) = 0$$

である。さてこれで M と Y との間に關係のあることは分つたが、結果が依然としてゼロなることは、前と少しも變りはないのである。併し山川氏も新案の公式を示した後に「けれども之すらも、尙ほ價值と價格との間の有機的關係を語り盡したものではない。何故ならば……云々」(一六九頁)と記して、自ら充分これに満足して居られぬことを表明して居られるのであるから、私も右の公式に充分満足はして居られぬこと勿論である。(まだ此點に關聯して云ふべきことが残つて居るが、それは都合上後段に譲る。)

## 六

序に細かい事を指摘すれば、山川氏が一六五頁に「リカルドの労働価値説と平均利潤率乃至は市場価格との間には——小泉教授に従へば——少くとも『矛盾』はない。……ところがマルクスに至ると事情は大に異つて来る。マルクスは間違に徹底して居らぬ！ マルクスには『矛盾』がある！」と驚いて見せられるのが、私がマルクスには矛盾があつて、リカルドオにはそれが無いと信じて居ると云ふ意味ならば、それは山川氏持ち前の癖みか勘違ひか何れかである。私はリカルドオの説明の一半を取つて、それを便宜上リカルドオ流の證明とか、又はリカルドオの場合に於ける価値と市場価格との關係とか云ふ名前で呼んだ事はあるが、リカルドオが矛盾なく労働価値説で一貫し得たなど、書いた事はない。リカルドオも矢張り利潤率の平均と資本の有機的組成の異同との爲めに、其労働価値説を維持することが出来なくなつたと云ふ事は、度々外の機會にも書いたが、本誌二月號の論文にも、第五十二頁から次の頁へ亘つて(本書二〇三頁以下)其事を明記し

て置いた。よし又私の文章は人の精讀を求め資格がないとしても、リカルドオの經濟原論の第一章價值論を途中で止めずに終ひまで讀んだ人には、こんな疑は始めから問題にならぬのである。

同じリカルドオに就て山川氏はまだ奇妙な事を云つて居られる。即ち一六八頁の冒頭に曰く「……リカルドオの場合には、価格を價值に引着けて居る引力は價值の法則そのものではなくて、前に説明したように平均利潤率である。そしてリカルドオの平均利潤率は價值の法則によつて説明せられるものではなくて、却つて價格をして價值から離れしめる需要供給によつてのみ説明せられるものである……」と。私は茲でリカルドオの利潤説の當否を論ずるつもりはない。たゞリカルドオが山川氏の云つてゐるやうな説を吐いて居るか何うかを云へば、リカルドオの平均利潤率は、價值の法則によらずして、需要供給によつてのみ説明されると云ふのは一體何を意味するのか。特殊の産業に於て特別の高率利潤が收められる爲めに、他の方面から資本が集中し來り、従つて其生産物の供給が増して、利潤率の平均を恢復する迄其價格が下落すると云ふ丈けの意味ならば、それで少しも差

支ないけれども、これ丈の事ならばマルクスの場合だつて少しも變りはない。マルクスの場合にも、自由競争に由て利潤率の平均が實現されるのは、資本の流動に由て商品の供給に増減を生ずるからである。此點丈けの事ならば、それと此れとは少しも擇ぶところはないのである。然らばリカルドオの場合に此平均利潤率の高さを定めるもの何であるか。彼れは其利潤論の章、價值論の章、其他「原論」中の到るところ、否、原論以外の小冊子の中にも、私信の中にも到るところに、利潤を決するものは常に賃銀率である、賃銀が騰貴すれば利潤は下落し、賃銀が下落すれば利潤が騰貴すると云つて居る。然らば賃銀を決するものは何であるか。それは労働者生活必需品の價值である。而して此價值は投下労働量又は必要労働量に由て決せられる。實にリカルドオは人口の増加社會の發達に連れて利潤率が下降する傾があるのは、食物の生産が漸く困難となつて（即ち其生産に要する労働量が増加して）、其價值が騰貴し、従つて賃銀が漸く利潤の舊額分を蠶食することの已み難きに由るものとして之を説明したのである。「價值の法則によつて説明せられるものではなくて」など、は何う考へても云はれた義理ではない。一體山川氏

は此解釋を何處のリカルドオに聞いて來られたものか。これも前の公式同様山川氏自身の發明に係るものならば、最早何とも仕方がない。併しまた、まさかとは思ふが——若しブチンやウンターアマンにこんな事が書いてあるのならば、それは明かにブチン等の間違であるから、自今彼等の常備を解き、出入を差止められて然るべきものであらう。

以上色々多岐に亘り、且つ少々餘計な事も書いたが、要するに自由競争、利潤率の平均の爲めに、商品の交換比率が、労働量に由て定められた其價值に一致する傾があり、此意味に於て労働量又は價值は、商品交換比率を左右するものだ、と云ふ證明法が、マルクスの場合に適用し難きものである事は明白であつて、山川氏も勿論これに異議のない事はたしかめられた。これで私の第一段の目的は達せられて居るのである。たゞマルクスの文句に少々氣が、りなのがあるけれども、山川氏はそれに取り合はうとはせられぬから、此一點も安じて可なりである。要するにマルクスの場合には、價值法則先づあつての生産價格であつて、リカルドオが「自然價格論」の章で説いて居るやうに、利潤率の平均に由て成立する價格に由て、價值法則

其者を證明するのでないことは明かである。マルクスの場合には價值法則が先づ豫め證明せられてなくてはならぬ。其處でマルクスは其價值法則を何うして證明するかと云ふ問題になる。

## 七

マルクスは一商品の或分量と別の商品の或分量とが相互交換せられると云ふ目前現實の事實、現實の事實ではないと云ふ反對論があるが、此點には後で論及するから出發し、推究して、等量労働の生産物同志は互に交換せられるとの命題に到達するのである。資本論第一卷に就て見るに、一クオタアの小麦と二ツエントネルの鐵とが交換される事實があるとすれば、彼れは此兩商品が此割合で交換されるのは、此二者の間に同量の労働が含まれて居るからだと論結するのである。彼れは此事實也。

小麦一クオタア＝鐵二ツエントネル

なる方程式で現はし、さて此方程式は何を意味するかとの問を設け、自ら其間に答

へて曰ふ「それはこの一クオタアの小麦と二ツエントネルの鐵と云ふ二つの違つたもの、中に、等量の共通なる或物が存在することを語る。即ち此二者は、二者の何れにもあらざる或る第三のものに等しい。二者の各々はそれが交換價值なる限り、此の第三のものに約元されなくてはならぬ」と。然らばその共通の或ものは何かと云へば、マルクスはそれが商品の幾何學的、物理學的、化學的又は其他の自然的性質ではあり得べき筈がないと云ふ。其處でそのあり得べからざる性質を抽象して仕舞ふと、此の思考上の蒸溜法の結果として、たゞ一つ兩者に共通な性質のみが残る。それは二商品が共に労働の生産物たるの一事である。即ち是等のものは今その生産に人間の労働が費され、人間の労働がそれに蓄積せられて居ると云ふ事のみを示して居る。而して此兩者に共通なる社會的實質の結晶として、是等のものは價值——商品價值である。而して商品の價值は商品中に含有せらるる價值形成物質、即ち労働の分量に由て測られるが、此労働量とは普通の生産條件の下で、その社會に普通の熟練の程度及び普通の労働強度を以てして、一物を生産するに要する労働量、即ち社會的必要労働量の謂である。即ちマルクスに従へば、

事實上一定量の小麦と一定量の鐵とが相交換されるのは、此兩者に同一の(社會的に必要なる)労働量が含まれてゐるからだと言ふのである。

## 八

マルクスの價值法則は右のやうにして立てられたものである。而して私は之に對して拙稿の中で、此推究法は論理的でない、若し此推究法が正しいとすれば、マルクスが生産價格論に於て明かに承認して居るやうに、商品がその價值とは異つた比率で交換されてはならないからであると云ふ意味を述べた。山川氏が引用する通り、私は上述の如き論理的過程に依て證明せられた價值法則は、必ず現實の商品交換比率を支配して、商品は必ず其價值で賣買されなければならぬものだ」と云ひ、又上記マルクスの價值法則證明法が正しいものならば、それは生産價格に於ける商品の現實交換比率にも適用されなければならぬ。而して生産價格が價值から離れて居れば、當初の價值法則其者は破壊されると云つたのである。何故と云へば、マルクスの推究法に従へば、常に相交換さるゝ二商品の間には必ず等量の

労働が含まれて居なければならぬと云ふ事になるからである(之を防ぐには或方法を取らなければならぬ。其方法の事は直ぐ先きで述べる)。ところが現在社會に於て諸商品は、マルクスに従へば、其價值通りには賣買されないので、或は其價值以上、或は其價值以下の生産價格で交換されるのであるから、我々の目前に現はれる現實の交換比率は、價值によらずして、生産價格によるのを常とすべきである。其處で現實に一定比率で交換さるゝ二商品を取り、それから出發してマルクス流に推究して行くと、偶然の場合の外、事實上此二商品の生産に要する労働量は決して同一でないにも拘らず、推究の上では此二者に等量の労働が含まれて居ると云ふ、不當な結論に到達せざるを得ないのである。目前事實上にはx量の小麦とy量の鐵とが交換せられて居るので、例の推究法に由れば、此二者間には等量の労働が含まれて居ると云ふ結論が引出されて來るのであるが、實はx量の小麦はy量の鐵と同量労働の生産物であると云ふやうな事が當然起り得るのである。そこでこれは非論理であると云ふと、山川氏は例の調子で「慥かに非論理である。單に尋常平凡の『非論理』である許りでない。極めて獨創的にして奇抜なる非論理





つて、此場合には、 $x$ 量の小麦と $y$ 量の鐵とが交換せられると云ふことが既に $x$ 量の小麦と $y$ 量の鐵とは同量の或者であることを意味して居るのであると。ところで「唯だ問題は、この『或者』は何であるかと云ふことである。そこでマルクスの分析は、此の或る物が労働の分量であることを論證しようとしたものであるといふ(一七八頁)」。ところが此の「或物」が労働の分量であることを、少しも問題ではなくて、それは論證を俟つまでもなく、始めからの約束で極まつて居るのである。くどいやうだが、マルクスは始めから労働生産物たる商品丈を問題にして、これを方程式に現はして居るのである。若し労働生産物以外のものをも方程式に取り入れるならば、件の或物が労働量であることは、都合よくは論證されないのである。其處でつまり——山川氏に従へば——相交換さるゝ兩商品に等量の労働が含有せられて居るものとすれば(標本的交換、此兩商品には等量の労働が含有されて居ると云ふのがマルクスの論證だと云ふ事になるのである。これは如何にも其通りで、間違のない話ではあるけれども、これでは雨天の日には雨が降る、 $y=B$ はゼロなりとすれば $y=B$ はゼロなりと云ふのと同じことで、普通の世間ではかう云

ふのを *tautology* と稱して居るが、亞米利加の兩先生は果して何と云はれるか。奇抜を愛せず、獨創的ならざる山川氏は、無論これで差支ないと云はれるであらう。而して此處に至つて私は、これを差支なしとする頭腦が、曩きに彼の不思議なるかけ算(或は割り算?)方程式を案出したのと同じの頭腦であることを、痛切嚴肅に思ひ出さざるを得ないのである。平たく俗語に直ほせば、あのかけ算(或は割り算)を考へ出すあたまたに逢つては敵はないと云ふのである。

## 九

かけ算の話が出たから、前に云ひ残した事を簡単に書かう。山川氏新案の價格方程式によれば、價格と價值(即ち労働量)との間の有機的若しくは必然的關係が「幾分か暗示」されると云ふ事であつた。併し此關係は、生産物丈は生産價格で賣られても、費用價格、即ち労働者の生活必需品及び原料機械補助材料等は、依然として其價值通りに賣買されると云ふ、好都合な、併しあり得べからざる事情の下に於ては、成程「幾分か暗示」もされようか知らぬが、費用價格が價值から離れた場合には、價

値と價格との關係は、いくら暗示しても明示しても、的確に捕捉し難く、識認し難きものとなつて仕舞ふことは——残念ながらこれはボエムの智恵を借用して——前論文の末段に詳述して置いた。併し捕捉し難くても識認し難くても、商品の價格又は交換比率と生産に要する労働量とは、全然無關係だとは云はせない。山川氏は云はれるかも知れない(一六九——一七〇頁参照)。無論その通りである。「また何處にもそんな事を云つて居る者はない」やうである。スミス、リカルドオから最近凡そマアシヤル位までの所謂ブルジョワ經濟學の本流をたどつて見ても、何等かの方法に於て労働量が貨物の交換比率に影響することを、全然否認してゐるものは見當らない(試みにミルを見られ度し)。群小論客の事は知らないが、併し價格は利用に基づく(と云ふ「新説」を發見したと稱して、大得意であつたジエヂンスでさへ、或る方法で労働生産力が交換比率に影響することは之を認めて居たのであるから、他は推して知ることが出来るやうと思ふ。それ故全然無關係でない(と云ふ)わけならば、或は進んで労働が重なる要素だと云ふわけならば、マルクスは誰れもが認めて居ることを同じやうに認めたと云ふに過ぎなくなつて仕舞ふのである。

併し世界は廣いから、何處に何う云ふ學者が居て、何う云ふ説を吐いて居ないものとも限らない。山川氏がその獨特の方程式を案出し、またリカルドオの利潤説を發明した特殊の技倆を發揮して、我々の聞きも及ばぬ方面から、例へばベルシヤの經濟學者何某、モンテネグロの經濟學者何某は、労働量と價格との全然無關係なることを主張して居ると云ふ事實を掘出し來つて、之をマルクスの學説と對照されるならば、私はもとより考へ直ほすの勞を吝しむものではない。現にマツクス・ベアの「カアル・マルクス」と云ふ本(第三版を見ると、此本が日本及びベルシヤから澤山の注文を受けたと云ふことが序文の中に書いてある。ベルシヤ人としてなかなか油斷はならぬのである。

十

最後に之はマルクスに限つた事ではないが、凡そ思想界學問界に一人偉大な人物が現れると、必ずこれを本尊として奉ずる亞流なるものが現はれ、更に又この亞流を擔ぐ第二の亞流が出で、又更に之を擔ぐ第三の亞流 etc. etc. が出来るのが常で

ある。ところで、望みの高い、勞を厭はぬ人々は、直ちにこの開祖本尊に目を着けて之を翻譯なり紹介なりするものであるが、茲にまた生來奇特の人間の中には故らに亞流許りを擇んで、その翻譯紹介に骨身を惜しまず働かうと云ふのがよくあるものである。ところが此種の仕事でも、始めて見ると存外面白くて止められぬものと見え、斯う云ふのに限つて、態々本尊を避けて何時までも亞流々々とそればかりを涉つて歩らくやうになる。これを稱して亞流道樂、又は亞流趣味と云つてもいい。即ち學界の綴帳趣味である。念の爲め特に斷つて置くが、これは山川氏のブヂン及びウンタアマンの翻譯を見て、始めて思ひ着いた事では決してない。併し同氏が亞流趣味の最好適例の一であることは、茲に改めて明言してもいいのである。マルクスの著作の中でも、『資本論』は高島素之氏、『共產黨宣言』は堺幸徳兩氏、『賃勞働と資本』、『賃價格及び利潤』は河上博士と、それら既に好譯者を見出して居るが、まだ此外にも大部なものには、『餘剩價值學說論』短いのものでは様々の小冊子が分残つて居るのであるから、山川氏と雖も今後何時宗旨をかへて、此中のどれに手を着けられぬものとも限らないが、少くも今日までの事實に就て見れば、同氏は我

が社會主義學者中最も亞流趣味の濃厚な人で、故らにマルクスの錦繡を避けて、寄せ切れまがい物の類を拾ひ集めるのに、特殊の趣味と技倆とを有する人であつた。(山川氏の予に對する批評文廿有七頁の中、他の色々の人の文句は引用せられて居るのに、マルクス自身の句がたゞの一つも引用せられてないのは、偶々濃厚なる同氏の趣味を露呈するものであらう。何故こんな餘計な事を茲に書くかと云ふと、凡そ思想史上の通則として、亞流は本尊よりも單純偏狹頑固で、融通の利かぬことを常とし、又さうなるのが當り前であるが、今例へば資本論眞物の翻譯に没頭せらるゝ高島氏が、マルクシズムの或部分に對しては存外無遠慮な批評を加へて居られるのに、ブヂンの取次人たる山川氏が、却て堅法華の立場を守り、偶々これに反對するものがあれば、地口で茶かして、態ざとせゝら笑ひをして見せると云ふやうなさもしい態度に出られるのは、みなこれ亞流毒の中毒症狀ではないかと思ふからである。

### 第三章 「資本論」以前に於けるマールクスの の價值論、價格論

生産價格の説に於てマールクスは、利潤率平均の結果、商品は最早其の價值では賣れず、資本家の生産出費費用價格に平均利潤を加算した生産價格で賣られ、商品の時々の市場價格は最早其價值を中心としては旋廻しないで、其生産價格を中心として旋廻するやうになると説いた。此の生産價格の説と彼れの價值法則とがよく相調和し得るものであるか何うかに就ては、別の機會に卑見を述べて置いたが、前二章参照今此學説の理論的構造に對する論評は全く措いて、利潤率平均の爲めに、商品が價值とは一致しない生産價格で賣買されると云ふ此學説は、果して何時頃からマールクスの頭腦中に萌芽し、又何ういふ風にしてそれが發展して行つたかを、彼れの資本論以前の著作物に現れた丈けに就て記して置きたいと思ふ。

マールクスも始めは、利潤率平均の爲めに價格が價值から離れないで、却て是に一致すると云ふ風に考へてゐた。商品の市場價格は需要供給の關係に由て騰貴したり下降したりするが、此昇降運動は常に或點を中心にして行はれ、絶えず此中心に吸引せられてゐる。而して此中心點となるものは價值、即ち一物の生産に費された労働量だといふやうに考へてゐたのである。正統派の經濟學者は、市場價格と自然價格なるものとを對立せしめ、久しきに亘つては二者は相離れることは出来ぬもので、自由競争の行はれる限り、前者は必ず後者に歸着しようとする約束を有つてゐると説いたが、マールクスの觀た、費された労働量に依て定まる價值と市場價格との關係も亦これと同一なるもので、此の兩者をして久しく相離反する事なからしめるものは、普通率以下の利潤を避け、普通率以上の利潤を求めて移動する資本の流出入(延いてそれによつて起る供給の調節)であると解してゐたのである。

右に述べたやうな價值論價格論は、極く簡略ながら彼れの *Lohnarbeit und Kapital*. Separat-Abdruck aus der „Neuen Rheinischen Zeitung“ vom Jahre 1849. Neu herausgegeben von Karl Kautsky 1906 (1919) の中に現れて居る。此小冊子は、標題の如く、賃銀労働と

資本との關係を論ずることが主になつてゐるから、價值論價格論の爲めに費す紙數は甚だ僅少に過ぎないが、それでも賃銀は勞働といふ一商品の價格であるから、賃銀が何に由つて決せらるゝかを知る爲めには、一般に商品の價格が何に由つて決せらるゝかを先づ説明しなくてはならぬのである。一商品の價格は何に由つて決せらるゝか。答へて曰ふ、賣手及び買手の間に於ける競争に由つて決せられる。需要供給の關係に由つて決せられる。ところで此競争には三方面がある。賣手間の競争、買手間の競争及び賣手と買手との間に於ける競争がそれである。賣手間の競争は商品價格を下落せしむる作用をなし、買手間の競争はそれを騰貴せしめ、而して賣手と買手との間の競争の結果は、賣手の陣營に於ける競争と、買手の陣營に於ける競争と、その何れが強いかに依つて決せられる。即ち仲間同志の競争の少ない側が勝利を占めるのである。一商品の供給がそれに對する需要に及ばなければ、賣手の間には全く競争が行はれぬか、或は僅かしか行はれぬかである。此競争が減退するに従つて、買手間の競争は増進し、其結果は商品價格の或は大なる或は小なる騰貴である。反對の場合に當然反對の結果が生ずることは言を待たぬ。

併し此の價格の騰落は、無際限に行はれるものではなくて、必ず商品の生産費を中心として其周圍に旋廻するのである。一商品の價格騰貴の結果は何であるだらうか。多額の資本が繁榮なる産業部門に投ぜられるであらう。而して此の特に有利な産業區域への資本の流入は、それが普通利潤 (die gewöhnlichen Gewinne) を生ずるに至るまで、或は寧ろ、過剰生産の爲め生産物の價格が生産費以下に下降するまでは繼續するであらう。反對に、一商品の價格が其生産費以下に下降すれば、資本は此商品の生産から引き去られるであらう。一産業が最早時勢に適應せぬ場合、即ちその滅亡しななければならぬ場合を除けば、此の資本の逃亡に依つて斯る一商品の生産即ち其供給は、需要に適應し、従つて其價格が再び生産費の高さに引上げらるゝまで、或は寧ろ供給が需要以下に降るまで、即ち其價格が再び其生産費以上に上るまでは減退するであらう。蓋し一商品の時價 (Der courante Preis) は常に其生産費以上若しくは以下に在るものだからである。吾人は今右に需要と供給との動搖が、一商品の價格をして常に再び生産費に歸着せしむることを見た。成程一商品の現實價格は、常に生産費以上若しくは以下にある。併し乍ら騰貴と下落と

は互に相補ふ結果、一定の期間内に於て産業の潮の干満を通算すれば、商品はその生産費に應じて相交換される。即ち其価格は其生産費に依て定められるのである。』  
(pp. 19, 20, 21, 22.)

其處で此の市價動搖の中心をなす生産費なるものは何を以て成るかと云ふに、それは一商品生産の爲めに直接間接に費された労働量(労働時間)に外ならぬといふのである。『生産費に依る價格の決定といふことは、一商品の製作に要する労働時間に依る價格の決定といふことに等しい。何となれば、生産費は第一に原料及び用具、即ち其製作に一定量の労働日の費やされたる、從て労働時間の一定量を示すところの工業生産物から、第二に時間を其尺度とする直接労働から成立つからである。』(p. 23.) 而して一物の生産に費さるゝ直接間接の労働は、後にマルクスの謂ふ價值を形成するものであるから、右に述べたところは、自由競争の行はるゝ限り、商品の價格は其價值に一致しようとして其周圍に旋廻し、利潤率の平均(普通利潤の成立)と共に價值と價格とは一致すると云ふに歸着する。稍々敷衍して云へば、價格は需要供給に由て決せられるが、破格の利潤を追求する資本の流出入は、價值

とは違つた價格を成立せしめるやうな需要供給關係の永續することを許さないと云ふのである。

## 二

『資本論以前の公表せられた著作丈けに就て窺へば、マルクスの此の考へ方は變らなかつたやうに見える。一八六五年の六月廿六日、即ち彼れが『資本論第一卷の原稿清書に着手する僅か半年前に試みた』價值價格及び利潤に關する講演に於ても、彼れは價值と價格との關係をアダム・スミス等の自然價格と市場價格との關係と同じにして説いてゐる。後に資本論第三卷に公表したやうに、利潤率平均の爲め、價值とは必しも一致せぬ生産價格なるものが成立して、實際の市場價格は最早價值ではなくて、此生産價格を中心として旋廻動搖するものだとは説かないで、後に記すやうに、市場價格は價值に歸着しようとして其周圍に旋廻すると云ふやうに説いたのである。著作の表面に現はれたところでは此通りであつた。併しマルクスの頭腦中では、學説は既に變りかけてゐたのである。曩には利潤率の平均

を俟つて、價值と價格とが一致するやうに解してゐたのが、資本の有機的組成に異同のあるところで、利潤率を平均せしめようとすれば、價格は何うしても價值から離れなければならぬと云ふことには、右の講演を試みたときには、マルクスは既に着目してゐたのである。エンゲルスは資本論第三卷の序文中に、マルクスは既に一八六三年から一八六七年に至る間に「資本論第二及び第三卷の腹案を完成した」と記してゐるが、少くも價值から離れる生産價格の説に就ては、更にそれより一年前の一八六二年にマルクスはエンゲルス宛て書簡の中に、後に第三卷第九章(一般利潤率(平均利潤率)の成立及び商品價值の生産價格化)の内容となるべきもの萌芽を可なり詳しく述べてゐるのである。此書簡は價格論に關するマルクスの思想發達の徑路を見る上に於て尊重すべき材料と思はれるから、其の重要な部分を左に譯出する。

即ち同年八月二日附の書簡中に記して曰く、「……君は僕が資本を二つの部分に分けて、その價值がたゞ生産物の價值の中に再現するに過ぎぬ不變資本(原料補助材料機械等)と第二に可變資本、即ち賃銀として支出せられた資本とにするのを

知つてゐるだらう。可變資本には労働者がその代りに給付するよりも少ない體化労働が含まれてゐるのである。例へば一日の賃銀が十時間に等しくて、而して労働者が十二時間働けば、労働者は可變資本を補充して更にそれに其の五分一(二時間)を加へるのである。此の後の餘利を僕は餘利價值(surplus value)と稱してゐるのだ。

「そこで餘利價值率(即ち労働日の長さとして労働者がその賃銀回復の爲めに働く必要労働以上に出でる餘利労働の超過量)とが定まつてゐるもの、例へば五十プロツセントとして見給へ。さうすると此場合、労働日が例へば十二時間ならば、労働者は八時間を自分の爲めに、四時間(8/2)を雇主の爲めに働くだらう。しかも此事が凡ての産業で行はれて、平均労働時間の上に於ける多少の差違は、労働の難易等に對する補償たるに過ぎぬものとして見給へ。

「斯る事情の下に於ては、諸生産業に於ける労働者搾取の程度が均一なるものとすれば、様々なる生産部面に於ける様々なる同額の資本は、非常に違がつた餘利價值額、従つて非常に違つた利潤率を生ずるであらう。利潤は餘利價值の支出全資



本に對する比率に外ならぬからである。此事は資本の有機的構成 (organische Kom-  
Position) 即ちその不變資本と可變資本との分割に由て定まるであらう。  
さて上記の通り、餘剩労働は五十プロセントと想像し給へ。そこで例へば一  
磅が一労働日に等しく(それは此労働日を一週間と考へても何と考へても同じ事  
だ) 労働日は十二時間で、必要(賃銀を取戻す)労働は八時間だとすれば、三十人の労働  
者(又は労働日)の賃銀は二十磅で、彼等の労働の價值は三十磅、一労働者に(毎日又は  
毎週の)對する可變資本は $\frac{1}{3}$ 磅で、労働者が造り出す價值は一磅であるだらう。百  
磅の一資本が異なる諸産業に於て生産する餘剩價值額は、資本の百が不變資本と  
可變資本とに分れる割合如何に由つて非常に違ふであらう。そこで不變資本を  
0、可變資本をVと名付けよう。さうすると、若し例へば木綿工業に於ける兩者の  
組合せがC80, V20だとすれば、生産物の價值は(餘剩價值又は surplus value)が五十ブ  
ロツェントすれば、百十の筈である。餘剩價值額は十で、利潤は十(餘剩價值)の百(費  
された資本の價值總額)に對する割合に等しいのであるから、利潤率は十プロツェ  
ントである。また大規模な裁縫業に於ての組合せは、C50, V50であると假定すれ

ば、生産物は百二十五で、餘剩價值(上記の通り五十プロツェント)の率に於ては二十  
五、利潤率は二十五プロツェントである。更に割合がC70, V30の別の一産業を取  
れば、生産物は百十五で、利潤率は十五プロツェントである。併し、最後に組合せが  
C90, V10の一産業に於ては、生産物は百五で、利潤率は五プロツェントであらう。  
〔此處に吾々は労働搾取の程度が均一なる場合に、異なる諸産業に於ける同額の  
諸資本に對して、非常に違つた餘剩價值額、從つて非常に違つた利潤率を有つこと  
になる。〕

併し上記四資本を總計すると、其結果は次の如きものとなる。

| 1. C80 V20 | 生産物ノ價值 | 110 | 利潤率=10% |
|------------|--------|-----|---------|
| 2. C50 V50 | "      | 125 | " = 25% |
| 3. C70 V30 | "      | 115 | " = 15% |
| 4. C90 V10 | "      | 105 | " = 5%  |
| 資本         | 本=400  |     | 利潤=55%  |

餘剩價值は凡ての場合に於て五十プロツェントである。

これを百に割當てると十三 $\frac{3}{4}$ プロツェントの利潤率になる。

「階級の總資本額四〇〇）を取つて見れば、利潤率は十三%、プロッセントになる。而して資本家等は同胞兄弟である。そこで競争（一産業から他の産業への資本の移轉若しくは資本の引出し）は様々なる諸産業に於ける等額の諸資本をして、其有機的構成の異なるにも拘らず同一の平均利潤を生ずるに至らしめるのである。別の言葉で云へば、百磅X(Xの意味讀解し難し)の資本が或産業で收める平均利潤率は、それが此の特定の投下資本として收めるのではなくて、即ちそれ自らが餘剰價值を生産する其割合に於て收めるのではなくて、資本家階級の總資本の幾分の一としてそれを收めるのである。即ちそれは一の持株で、其配當は、資本家階級の可變賃銀に支出せられたる資本總額が産出する餘剰價值若しくは酬ひられざる勞働總額の中から持株の多少に應じて支拂はれるのである。」

「ところで右の例證に於て、1, 2, 3, 4が同一の平均利潤を擧げる爲めには、彼等は各項皆等しく其商品を百十三 $\frac{1}{2}$ 磅に賣らなければならぬ。1と4とはそれを其價值以上に、2と3とは其價值以下に賣るのである。」

「斯くして調節せられた此價格、即ち資本家階級の平均利潤X(Xの意味不明)はスミ

スが自然價格費用價格等の名を以て呼んだところのものである。これが、諸産業間の競争が(資本の移轉又は資本の引出しに依て)諸産業に於ける價格を歸着せしめるところの平均價格である。即ち競争は諸商品を其價值には歸着せしめないで、費用價格に歸着せしめる。而して此の費用價格は、資本の有機的構成如何に由て、或は其價值以上或は以下或はこれに等しいのである。

「リカルドオは價值と費用價格とを混同して居る。だから彼は、若し絶對的地代(即ち土地の肥瘠の差から獨立して存在する地代)なるものが存在すれば、農産物其他は費用價格(即ち資本家階級の平均利潤)で賣られるから、常に其價值以上に賣られる筈だと信じたのである。それは根本法則を覆へす。其處で彼れは絶對的地代を否認して、たゞ僅かに差額地代のみを承認したのである。」

「併し彼れの商品價值と商品費用價格との同一視は、根本的に謬つて居るもので、それはアダム・スミスから傳統的に繼承せられたのである。下略[Briefwechsel zwischen Engels und Marx, Herausgegeben von A. Bebel und Ed. Bernstein, 1913(1921)Bd. III, S. 77-80]平均利潤と價格との問題は、猶ほ一八六八年四月三十日附の書簡にも論ぜら

## 三

れてあるが、これは資本論第一巻公刊後の事であるから、茲には敢て言及しない。

右に引用するところと、後に資本論第三巻中に述べてあるところとを比較するに、例へば後に生産価格と稱するやうになつたものが、茲では未だ費用価格を以て呼ばれてゐるといふやうな用語上の差別と、思想の熟未熟と、説明の精疎に餘程の相違がある事とを姑らく看過すれば、此學説が發展して行けば當然後の生産価格の説となるものであるとは一目して明かである。即ち此時マルクスは現社會に於ては、商品は其價值から離れた生産価格(右の書簡では費用價格)を規準として賣買せられ、時々市場價格はこれを中心として動搖する道理なることを既に認めてゐたのである。それにも拘らず、彼れが右記の書簡を書いた三年後に試みた講演では、マルクスは、「價值價格利潤の關係に就ては、賃銀勞働と資本」時代の思想を殆ど其儘に繼承して、價值が價格の歸向中心をなすやうに説いてゐる。書簡中に述べてゐるのは正反對の事を書いてゐるのである。何故マルクスは既に懷抱

して居る學説と餘りに明かに抵觸する嫌のあることを、而かも餘りに明かに抵觸する形ちで公言して憚らなかつたか。此の「何故」と云ふ問に對しては、私自身は解答を與へることが出来ない。堅く臆測を慎めば、たゞ了解に苦しむといふ外はないのである。たゞ「價值價格及び利潤」に記載せられて居る學説の要點(本稿に取つての)を記して、之と右記の書簡、又は「賃銀勞働と資本」に現れてゐる學説とを比較する丈けのことならば、甚だ容易く出来るのである。(Value, Price and Profit. by Karl Marx. Addressed to Workingmen. Edited by his Daughter, Eleanor Aveling. New York National Executive Committee Socialist Labor Party 1919. に依りて引用す)

此講演の草稿によれば、マルクスは謂ふ、需要供給なるものは商品若しくは勞働の價值を究局的に決定するものではない。それはたゞ市場價格の一時的動搖を左右するに過ぎぬ。需要供給は、何故一商品の市場價格が其價值以上に昇り、或は其價值以下に降るか、と云ふことを説明はするが、價值其者は決して之を説明することが出来ない。需要と供給とが相平均相合致すれば、其作用は相殺せられて消滅して仕舞ふ。而して供給と需要とが互に相平均し、從て其作用が停止する瞬間

に於て、一商品の市場價格は其眞價值、即ち其市場價格の動搖の中心たる標準價格と一致するのである(Kp. 284)。然らば此の眞價值又は眞價值とは何ぞ。又それは何に由て決せられるか。茲でマルクスが眞價值の本質を論究する方法は、彼れが資本論中で用ゐる方法と變るところはない。さうして彼れは「一商品はそれが社會的労働の結晶なるの故を以て眞價值を有する。其眞價值額、又はその相對的眞價值は、それに含有せらるゝ彼の社會的物質の量の大小、即ち其生産に必要な相對的労働量に依て定まる。故に商品の相對眞價值は、それに投下せられ體現せられ固定せられた労働の相對量若しくは相對額に由て決せられる。同一労働時間内に生産せられ得る諸商品量同志は、其眞價值が相等しい。即ち一商品の眞價值の別の商品の眞價值に於けるは、其一方に固定せられた労働量の他の一方に固定せられた労働量に於ける關係に等し」(pp. 31-2)といふ結論に到達するのである。但し茲に一商品に投下せられたる若しくは結晶せる労働といふのは、「一定の社會狀態の下、一定社會的平均生産條件の下に於て、労働の一定社會的平均強度と平均熟練とを以てして、生産を行ふ場合に要する労働量の意味である」といふ(p. 35)。

さて斯くの如くにして論究せられた一商品の眞價值と其價格とは、互に何う云ふ關係に立つてゐるか。マルクスに従へば、それ自體として見れば、眞價值は眞價值の貨幣的表現に外ならぬものであつて、アダム・スミスが自然價格と稱し、佛蘭西・フイジ・オクラアツが必要價格、prix nécessaireと稱するものは、即ち是れである。然らば此の自然價格と時々々の市場價格との關係は何うかと云へば、後者は需要供給に依つて動搖するが、其動搖は前者を中心として、これを周ぐつて行はれると云ふのである。原文を引用すれば、それに曰く、「然らば眞價值と市場價格若しくは自然價格と市場價格との關係は如何。諸君はみな個々の生産者に取つての生産條件は如何に違がつても、市場價格は同じ種類の凡ての商品に對して同一なることを承知して居られる。市場價格は市場に或種の貨物の或數量を供給する爲めに平均生産條件の下に於て必要な社會的労働の平均量のみを表現するに過ぎない。而してそれは一定種類の商品の全量に適用せられるのである。茲までのところでは、一商品の市場價格は其眞價值と一致する。他方に於て眞價值若しくは自然價格の上に昇つたり、下に降つたりする市場價格の動搖は、供給と需要との動搖に由て定ま

るものである。市場価格の價值からの離反は不斷に行はれるが併しアダム・スミスの云ふ通り、『自然價格は諸商品の價格が絶えず歸着しようとする中心價格である。様々の出來事が時としては價格を可なり此以上の高さに支へることもあるであらうし、又時としては之を此以下にも降らしめることがあるであらう。然し價格が此の安定持續の中心に落着くことを妨げる故障は何であつても、彼等は絶えず之に向つて傾きつゝある』のである』と (pp. 37, 38)。又別の處でも (p. 66) 彼れは他の凡ての商品に於けると同じく、勞働に於ても亦其市場價格は結局其價值に適應する、従つて凡ての騰落に拘らず、勞働者は平均上其勞働の價值を收得するに過ぎぬと云つて居るのである。

## 四

それでは市場價格は何故自然價格に一致しようとするか。此處ではマルクスは何とも其理法を説明してはゐない。従つて利潤率平均の爲めに此二者が相近づき、利潤率の平均を得た瞬間に二者が合致するのだとは説いてゐない。併し若

し彼れが此二者の一致することを信ずる理由が、アダム・スミスの説いてゐる理法とは全く趣を異にするものならば、茲で態々アダム・スミスを引用するのは、求めて誤解を招いてゐるやうなものである。さう云ふ事をしようとは思はれない。それではアダム・スミスは何故市場價格は自然價格と一致しようとするものだと説いたかと云へば、それは生産に投ぜらるゝ勞働、土地及び資本が、何れも低い報酬を避け、高い報酬を求めて流動するからだと云ふのである。反面から云ふと、賃銀率、地代率、利潤率の平均を得たときは、即ち市場價格と自然價格との一致したときだと云ふことになる。姑らく問題を資本丈けに限ると、若しマルクスがスミスの自然價格對市場價格の理法に同意してゐたものとすれば、彼れは此時も依然として舊の如く、利潤率の平均と共に市場價格が價值に一致するもの、價值とは離れた價格を成立せしめるやうな需要供給關係は、自由競争の一事あるが爲めに永續することの出來ないものと考へてゐるのである。

これはマルクスがスミスを是認したものととしての論であるが、若しマルクスがスミス又は之に類似の論法を承認しなかつたとしたならば、何うであらうか。こ

れに對する答へは極めて簡單である。自由競争と云ふことを前提としなければ、抑も市場価格は價值に一致しようとするものだと言ふことが全く出来なくなる。マルクスの上記引用句が全く理由の付かぬ斷定になり了るのである。例へば需要供給の關係に由て、或貨物の價格が甚しく騰貴して、其生産者(企業者)は破格の利潤を収めることが出来ても、他の産業方面から競争者が來り集まると云ふことがなければ、市場価格は價值に引き寄せられることはなくて、何時までも兩者の間に廣い間隔が保たるべき筈であるし、又反對に一物の市場價格が需要供給の關係で著しく下落して、其生産者の收得する利潤は普通率以下に降つても、此人がより高い利潤を求めて、他に其資本を移すといふことをせぬ以上は、何時までも市場價格は價值まで回復することがなかるべき筈である。そこで市場價格が價值を中心として旋廻すると云ふことを云ふ爲めには、何うしても利潤率平均の一事を持つて來なければ説明が付かぬのである。

そこで市場價格は利潤率の平均を俟つて價值と一致するものだと言はうか。これは上記一八六二年の書簡中に詳述するところと餘りに明かに相容れないの

である。上記書簡中の所説は、同じく上記の通り、資本論第一卷公刊の直ぐ後にも再びマルクスに依てエンゲルス宛ての書簡中に説かれてゐる許りでなく、後に發展して資本論第三卷の最要部分を形成するに至つたものであるから、無論一時の思ひ付きで、マルクスが價值價格及び利潤に關する講演を試みたときには、忘れられてゐたのだと云ふやうな性質のものではあるべき筈がない。此書簡中に述べてあることは、當初の考へ方を覆へず彼れの學説の重要な新發展である。而して後の業績から遡つて考へて見れば、彼れは此の學説の新發展を *elaborate* する爲めに、實に非常な苦心を嘗めて居る。それ程重要な學説を立て、置きながら、それより後に、而かも同じ問題を論ずるに當つて、たゞ之を忘れてゐたとは受取り難いのである。然らば忘れてはゐなかつたとすると、之を何う解釋すべきであらうか。マルクスが自分の新しい學説の未熟を自覺して、之を公表することを躊躇したと云ふやうな事もあり得るであらう。また市價は競争の爲めに價值には歸着しないので、却て價值から離れることを認めるやうになつてゐても、斯る複雑な學説が聽衆の理解力以上なることを慮つて、賃銀と資本以來の、今では承認して居らぬ舊説を

姑らく反覆して置いたのだと云ふことも、それは如何にもマルクスには似合はしからぬ事ながら、併し全くあり得ぬ事ではない。併し此の何れの想像が當つてゐるにしても、マルクスが既に上記書簡中に詳述せられたやうな學說の萌芽を抱き、而して爾來此學說の精練に苦心してゐたものとすれば、其以後の述作に於ては、此新學說と餘り明白に抵觸するやうな事は、之を言ふことを躊躇しなければならぬ筈のやうに思はれる。彼れが其書簡中に述べたやうな理論を發展せしめる考へがあつたのならば、無論あつたに違ひない。其の後價值價格及び利潤を論ずるに當つて、彼と此との調和を考へて、用語、説明の方法等の上にも多少の用心があつて然るべきものと思はれるのである。然るに此點に於てマルクスは全然無頓着であつた。彼れの「價值價格及び利潤」を読んだ者は、これより以前に既に彼れに一八六二年の書簡のあるのを聞いて驚かざるを得ぬであらう。市場價格は自由競争(利潤平均)の爲めに價值に歸着すると云ふのと、自由競争(利潤平均)の爲めに價值から離れると云ふ理論とは、正面から相衝突してゐるが、此衝突が言葉の上に明瞭に現れて來るのを、マルクスは少しも顧慮しないで、恬然として、價值はスミスの所謂自

然價格に同じ、價值はスミスの自然價格に同じからずと正反對の事を云つてゐるのである。即ち上にも一度引用したやうに、書簡の中ではマルクスは「斯くして調節せられた此價格、即ち $\frac{C}{V} = \frac{C}{V} + \frac{C}{V}$ 」(註)は、スミスが自然價格費用價格等の名を以て呼んだところのものである。それが諸産業間の競争が資本の移轉又は資本の引出しに依つて諸産業に於ける價格を歸着せしめるところの平均價格である。即ち競争は諸商品を其價值には歸着せしめないで、費用價格(後に所謂生産價格)に歸着せしめる」と云ひ、資本論第三卷では更に同じ理論を詳説しながら、「價值價格及び利潤」の中では、市場價格に對する關係に於ては、價值と自然價格とを同じに取扱つて市場價格は價值に歸着しようとするといつてゐるのである。

此事を指摘するのは言葉咎めをする爲めではない。たゞ若しマルクスが其の六五年の小冊子「價值價格及び利潤」中に説くところと、當時既に其頭腦中に發展しつゝあつた學說とを相調和せしめることを考へて居たならば、不必要にこれ程明白に相容れぬ言葉を用ゐることを避けたであらうと謂ふのである。二者の調和

と云ふことを考へてゐたとすれば、餘りに用意が足りな過ぎる。これでは求めて誤解を招いてゐるとしか思はれぬと謂ふのである。既記の如くエンゲルスが既に一八六三年から一八六七年に至る間に「資本論第二及び第三卷の腹案は完成せられた」と記してゐるのは、固より疑ふべき理由がない。併し右に引照するところに徴して、少くも一八六五年の頃には、マルクスは未だその利潤率の平均に由つて市場価格は價值に一致する、即ち市場価格は需要供給の關係で決定はせられるが、價值と離れた市場価格を成立せしめるやうな需要供給關係と云ふものは、自由競争の行はれる限り、永續し得るものでないと云ふ第一思想と、自由競争、利潤率平均と云ふことあるが爲めに、市場価格は價值から離れた偶然一致する別の旋廻中心を有するに至ると云ふ第二思想との調和に就て未だ充分考へてゐなかつたものと推斷することは、甚しい速了ではなからう。此頃のマルクスの頭腦中には、此の第一思想と第二思想とが時々交錯混流してゐたやうに思はれるのである。

## 五

これは本題の範圍外に逸するが、此交錯混流は資本論第三卷の處々にも猶ほ其跡を示してゐるやうに見受けられる。例へば第二篇第十章中で市場價值は市場價格の旋廻中心點をなすと云ふやうに説いてゐるのがその一つである。之は固より利潤率平均の曉に就ては云はれないことである。併し利潤率平均と云ふことを度外すれば、猶ほ更新うは云はれないのである。市場價值とは、マルクスに従へば、一生産部面に産出せらるゝ商品の平均價值であると云ふ。併し一商品の市場価格は、何の原因に因つて此市場價值を中心にして回轉するか。需要供給の關係で、市場價值とは全く離れた高市場價格、又は低市場價格が成立した場合に、何が此價格を引下げ、若しくは引上げて、之をして市場價值の周圍に回轉せしめるか。特に高い市場價格が成立した場合には、利潤率が普通以上に昇るので、他の生産部面から資本が流入して來て其供給量を増し、反對に市場價格が市場價值以下に離れた場合には、資本が逃れて流出する事に由て供給量が減退し、斯くして再び市場



價格を市場價值に近づけると云ふならば説明は付くが、此の資本の流出入、即ち利潤率の平均運動と云ふ事を度外しては、市場價格が市場價值を中心として回轉すべき理由がないのである。即ち利潤率平均の曉には、市場價格は價值から離れた別の中心を求めて其周圍に旋廻するし、また利潤率平均と云ふことがなければ、市場價格は價值の周圍には廻轉しないのである。

又略ほ同じ立場からして評し得るものに、マルクスの生産用具の未だ生産者自身の手へ属した低度の經濟社會に於ては價值法則は現實に行はれた、即ち生産物の交換は其價值通り、若しくは略ほ其價值通りに行はれたと云ふ説がある。予の所見を以てすれば、此場合に問題を決するものは、斯る社會に於て、自由競争が行はれて各生産者(労働者)は充分打算的に合理的に行動したものと想像する事を許すか、或は之を許さぬかである。若し之を許すとすれば、生産者に取つて利潤率の差異は、マルクスの云ふやうに「何うでも好い事」*jein gleichgültiger Umstand*ではない。生産者は必ず利潤率の低い生産からその高い生産に移つて供給の増減を來たし、従つて價值とは違つた商品交換比率を成立せしむべき筈であるし、又此想像を許さ

ぬとすれば、商品が價值に應じて賣買せられると云ふ保障もなくなる道理である。即ち同じ労働量の費されてあるものでも、或商品に對しては大に需要があつて、他の商品に對しては甚だ需要が少ないとすれば、一方は價值の比例以上、一方は比例以下に賣れると云ふ事が起つて來なければならぬ。此狀態の永續する事を許さぬのは、たゞ自由競争生産者が生産物の價值以上に高價なるところに集まる(よる供給の調節があるに由るものであるが、此假定が許されぬとすれば、此調節も行はれぬ筈であるし、又此假定を許せば、今前に述べたやうな結果に陥るのである。凡べて此等の點に注意する上に於て、マルクスの初期の價值論價格論を參考して、其思想發達の徑路を窺ふことは決して無用の閑事業ではないのである。

(三田學會雜誌第十六卷第十一號發表)

## 第四章 マルクスのブルドン嘲評

### ——「哲學の貧困」——

「ブルドン氏は一種獨特の誤解を受ける不幸に遭つて居る。佛蘭西では、彼れは優れた獨逸哲學者だと思はれて居る爲めに、惡經濟學者たるの權利を有ち、之に反して獨逸では、彼れは最も有力なる佛蘭西經濟學者の一人として通用して居る爲めに、惡哲學者たることを許されて居る。吾輩は獨逸人にして且つ經濟學者たる二重の資格に於て、此の二重の誤謬に對して抗議を提出するの必要を認める」と稱して、公にせられたマルクスの著「哲學の貧困」(La Misère de la Philosophie. Réponse a la Philosophie de la misère de M. Proudhon, Paris, 1847) は、個人主義と社會主義との中間を縫ふ謂は、小工業社會主義とも謂ふべきブルドンの主張に對する最も痛切な批評であると同時に、此書に由て吾々は、マルクスのリカルドオを基礎とする經濟學研究の既に可なり歩を進め、又その唯物史觀と通稱せらるゝ歴史及び社會の考

察法が既に完成に近づいて居た事を窺ふことが出来る。此點に於て此小冊一篇は、マルクスの思想發達の道程上に於ける最も重要な里標の一であると云つて好いのである。

一八四三年十一月マルクスがキヨルンから居を巴里に移した時、身を植字工に起したブルドンは、そのブザンソン學士院の募に應じて著した「財産論」(Qu'est ce que la propriété. Recherches sur le principe du droit et du gouvernement, 1840) に由て既に知名の人になつて居た。ブルドンの全著作を通じての主張を一言にして盡すことは、専門研究者も困難とするところであるが、彼れの全思想及び努力の指標となるものが正義の觀念であつたことは、議論を俟たぬであらう。然らば正義は、經濟生活上及び政治生活上に於て、如何にして實現せられるかと云ふに、彼れに従へば、それは經濟生活上に於ては、不勞所得の廢止せられたとき、政治上に於ては anarchie 即ち聯立主義の原則の實現せられたときに實現せられるのである。結婚及び家族生活、其他一般に現經濟組織の個人主義的原則は之を維持した、私有財産から同胞搾取の權力を奪ふこと、換言すれば私有財産の力に由て盜を犯すこ

とを不可能ならしめること、これがブルドンの主旨であつたが、此の主張は既に上記「財産論」に由て之を窺ふ事が出来る。「財産とは何ぞ」。「財産は盗なり」と云ふのが彼れの答へである。彼れの説くところに従へば、財の交換上に於て、等價と等價とが授受されないで、資本家は労働雇傭に際し、その所有財産の力に由て、賃銀として與へるところよりも更に多くを労働者から收得する。即ち所有者は蒔かずして刈り、生産せずして消費し、労働せずして享樂する。即ち財産は盗を可能ならしめると云ふのである。さればとてブルドンは、既に此の時から共産主義には賛成して居ない。それは宛も今日弱者が强者の爲めに搾取せられるやうに、共産主義的社會に於ては、強者が弱者に搾取されるからだと云ふのである。

六年後にブルドンの最も有名な「經濟的矛盾。別題貧困の哲學」(Système des contradictions économiques ou philosophie de la misère, 1846)が著はされた。此書の中の最重要な第二章に於て、彼れは使用價值と交換價值との二律背反なるものを説いて居る。價值には使用價值と交換價值との二方面があるが、此二者は需要供給の支配の下

に於ては、常に相矛盾するものである。使用價值あるものが増加すれば、その交換價值は下落する。「使用價值の増加の第一の結果、避く可からざる結果は、其價值下落である。一商品が豊富となればなる程、それは交換上に於て失ひ、賣買上に於て價值が下落する。自家の食用に供する麥二十袋を收穫した農夫は、その十袋を收穫した場合よりも自ら二倍丈け富裕なるものと判断し、同様に五十オウンの糸を紡いだものは、その二十五オウンを紡いだときよりも、二倍富裕なるものと判断するであらう。彼等の一家に就て云へば、二者の判断は共に正しい。けれども、その對外關係に於て見れば、これは全然謬まつて居る。若し全國の穀物收穫高が二倍すれば、二十袋の麥は前の十袋以下の價值に賣れ、五十オウンの糸は二十五オウン以下の價值に賣れるであらう。斯くの如くにして、利用の生産が増加するに従つて、價值は減少し、生産者は絶えず自ら富ましつゝ、貧窮に到達すると云ふ結果があり得るのである。而して此矛盾は恐慌、獨占、甚しき貧富の懸隔等の結果を生ずるのである(Contradictions économiques. Nouvelle édition Paris, Flammarion, Tome premier, pp. 59-69)。然るに價值は經濟的殿堂の礎石であるから、他の一切の經濟的諸制度も、亦價

値に存すると同様の矛盾を露呈せざるを得ぬ。ブルドンは分業、機械、自由競争等の諸經濟現象を順次に論じて、是に何れも利弊の両面あること、併しながら價値に存する矛盾の解決せられざる限り、その利をのみ取つて弊を廢することは出来ぬと云ふことを説明しようとして試みた。

併し矛盾解決の實際的方法は上記の書中には提案せられてゐない。彼れは社會問題の根本的解決方法を Programme de l'association progressive, solution du problème du proletariat と題する書中に説く計畫を持つて居たが、二月革命の爲めにその遂行を妨げられ、計畫の一部を「社會問題の解決及び交換銀行」と題する小冊子に依て發表した。社會的弊害の禍根をブルドンは現行の生産方法に求めずして、貨幣と利子とに求めて居る。此の二つのものが交換及び貸借上に作用して、貧富の對立懸隔なる結果を生ぜしめる。從て此の二者の撤廢せられた曉に於てのみ、正當なる交易は行はれ、勞働に基づく眞價値が制定(constituer)せられ得ると云ふのである。極貧及び恐慌なる現象も、ブルドンはまた之を現行貨幣制度に歸して居る。而し

て此の貨幣と利子と云ふ二弊害を、彼れはその始めには交換銀行 banque d'échange 後に至つて庶民銀行 Banque du peuple と命名した一種の銀行の設立に依り、交換及び信用取引の原則を全然新にすることに依て除かうと考へたのである。此庶民銀行は「有ゆる進歩の原則並に生産物の良質と廉價との保障として、交易の自由及び聲價の競争」の現状を維持した、流通のみを變更しようとする。即ち庶民銀行は、その生産物を銀行の交換券に對して賣らんと欲する各生産者と取引を開く。例へば製靴師は靴を提供して、靴の價格に相當する交換券を收受し、その交換券に依て同じく銀行から同價格の他の物を買ふことが出来るのである。生産物の價格は利潤を除外した、投ぜられた勞働時間と出費とのみに由て之を計算し、銀行の評價人があつて之を監査する。ブルドンの希望では、若し庶民銀行が漸次に其取引範圍を擴張して、結局凡ての生産者と消費者とを包容するに至れば、貨幣は全く無用となり、一切の取引は紙券に由つて行はれるに至るであらうと謂ふのであつた。同時に彼れは庶民銀行をして無利息貸借を實行せしめようとして考へたのであつた。而して此案に従へば、銀行の屬員は相互の勤務に由て相結合せられるので

あるから之を稱して相互主義 *Mutualisme* と云ふのである。此提案を彼れは机上論たるに止めないで、實際に試みようとし、一八四九年二月十一日、巴里のフォブウル・サントニに此案に基づく一銀行を開設し、賛成者の数は一萬二千人、應募株式は三萬六千法に上つたのであるが、偶々ブルドン其人が刑辟に觸れた爲めに、銀行は全く何等の取引を行はずして、二ヶ月の後に閉鎖せられたのである。

その巴里滞在中(一八四三年十一月——一八四五年三月)マルクスは親しくブルドンと交際し、屢々夜を徹して説を戦はして居る間に、二者の傾向の相違は漸く明かになつたが、一八四六年五月十七日附を以てブルドンがブルユツセル滞在中のマルクスに與へた書簡を見れば、兩者間の溝渠は既に越え難きものとなつて居る。此書中に於てブルドンは、經濟學上、殆ど絶對的な排獨斷主義を取る旨を告白し、マルクスに向つては、正教神學を倒した後に、直ちに新教神學を立てようとしたマルチン・ウルテルの撞着に陥ること勿れ、吾人をして新しき紛亂に依て新しき課役を人類に負はしむること勿れ、吾人をして賢明にして先見ある模範を世界に供せ

しめよ、吾人をして自ら一新宗教——縦令論理と理性の宗教たりとも——の使徒を以て擬することなからしめよ」と忠告し、又革命に就ては、所有者のバルトロミウの夜(虐殺)に依て、所有權に新しき力を與へるよりも、小火を以て除々に之を焚くとを擇ぶと謂ひ、……佛蘭西勞働者階級の志も亦茲に存するやうに思はれる。我がプロレタリアルは學問に對して大渴望を感じて居るから、血の外に飲むべきものを與へ得ぬものは、甚だ冷かな歡迎を受けるであらう」と書いて居る。而して「小火を以て所有權を焚く」方法に就ては、既に印刷半ば成れる著述の中に之を詳説することを約束して居る。これが前記の「經濟的矛盾」であつた。ブルドンはマルクスに向つて「貴下の嚴刻なる批評を待つ」と云つて居るが、マルクスの之に對する批評は苛刻を極めたものであつて、公平なる讀者は惡意の字面にも行間にも溢れて居ることを認めざるを得ぬであらう。二人の交際は遂に是に依て斷たれたのである。

マルクスのブルドンに對する批評の要旨は略ぼ左記の一節に盡されて居る

(Das Elend der Philosophie. Deutsch von E. Bernstein und K. Kautsky 8. Aufl. 1920 S.109, 110,

130) 曰く、

「各經濟關係は常に善き一面と悪しき一面とを持つ。これがブルドン君自ら己れの面を撰たぬ唯一の點である。善き方面は、彼れは經濟學者の揚ぐるところに依て之を認め、悪しき方面は、社會主義者のその不當を鳴らすところに依て之を見るのである。彼れは經濟學者からは、永久的關係の必然と云ふことを借用し來り、社會主義者からは、貧困の中に(舊社會を顛へすべき革命的破壊の一面は認めずして)貧困其者を認める錯覺を學び來る。彼れはこの兩者と妥協しながら、自ら科學の權威に據つて立たうとするのである。科學は彼れに取つては、一の狹隘なる科學的公式に外ならぬものとせられて居る。彼れは要するに公式を追求するのみに過ぎぬ。是に依てブルドン氏は、自ら以爲らくよく經濟學と並に共產主義とを批評することを得たりと。何ぞ知らん、彼れは遙かに兩者の下風に立つのである。經濟學者の下に立つと謂ふのは、彼れが自ら魔術的公式を手中に持つ哲學者として、純經濟的細目に立ち入ることを免ぜられたものと信じて居るからである。社會主義者の下に立つと謂ふのは、よし思辯上になりともブルジョワの眼界以上に

超越する勇氣も洞察力をも持つて居らぬからである。……彼れは學者として、ブルジョワとプロレタリアと以上に飛翔せんと欲して居るが、實は絶えず資本と労働と、經濟學と共產主義との間にあちこち彷徨して居る小ブルジョワに過ぎぬのである。」要するにブルドン氏は小ブルジョワの理想以上に超越しないのである。而して此理想を實現する爲めに、彼れには吾々を導いて中世の手工業職人か、精々手工業親方に復歸せしめること以上の妙案は思ひ浮ばないのである」と。  
これはブルドンに對する總評とも云ふべきものであるが、更に其細目に互つて窺へば、マルクス自身の思想發達の經過道程は、明かに此に由つて窺ふ事が出来る。「哲學の貧困」は僅かに「一科學的發見及び經濟學の形而上學」の二章から成立つて居つて、マルクスは主として第一章でブルドンの「惡經濟學者たることを證明し、第二章でその「惡哲學者たることを證明しようとして居る。マルクスは萊因新聞主筆時代に經濟學の素養の缺乏を感じ、居る巴里に移して其研究を始めた」と自ら記して居るが、巴里に移住した一八四三年の暮から三年餘の間に、彼れの經濟學研究が如何に廣さと深さとを加へたかは、「哲學の貧困」の一卷が具さに之を示して居る。

その引用するところを以て推せば、マルクスの涉獵は既にアダム・スミス、リカルド  
 オの外 Lauderdale, Sismondi, Storch, Atkinson, J.S. Mill, Sadler, Cooper, Boisguilbert, Quesnay,  
 Say, Lemonkey から所謂「リカルドオ社會主義者」なる Hopkins (ヘンゲルス後) Hodgskin  
 と匡す) William Thompson, T.R. Edmonds, F. Bray に及んで居る。就中彼れが研究する  
 こと最も精緻を極めたものはリカルドオであつて、彼れのブルドンの經濟學說に  
 對する批評は、殆ど一々リカルドオからの引用に依て慥かめられて居る。此時代  
 のマルクスは、リカルドオの影響を受けたと云ふよりは、寧ろブルドンとリカルド  
 オとを對照し、前者の說の後者の說に合はざる箇處を數へて、之をブルドンが惡經  
 濟學者たるの理由として居ると云つても好い位である。マルクスの經濟學が先  
 づリカルドオに依て基礎を堅めたものであることを、最も明瞭に示すものは「哲學  
 の貧困」一巻である。

マルクスが所謂ブルドン氏の經濟學上に於ける發見の全部を成すものは、制定  
 價值又は綜合價值(der konstituirte oder der synthetische Werth)である。然らば制定價值  
 とは何か。謂へらく既に有用性あるものとすれば、價值の泉源は労働である。勞

働の尺度は時間である。生産物の相對價值は、その製作に投ぜられなければならぬ  
 労働時間に依て定められる。價格とは貨幣に云ひ現された一生産物の相對價  
 値である。而して最後に一生産物の制定價值とは、それに含まるゝ労働時間に依  
 て制定せられた價值に外ならぬものである」と。マルクスは第一に此の所謂ブル  
 ドンの發見は、新發明でも何でもなくて、彼れに先だつ事久しく、既にリカルドオが  
 唱へ出した學說を曲用曲解したものに外ならぬと云ふのである。曰く「……ブル  
 ドン氏は、リカルドオが現在のブルジョワ社會の理論として學問的に證明したと  
 ころのものを『革命的將來學說』として立て、又リカルドオ及び其一派が、彼れよ  
 りも久しき以前に二律背反の一方、即ち交換價值の科學的公式として立てたところ  
 のものを使用價值交換價值の背反の解決として承認したのである。」と (Eklend. S.  
 17)。そこでブルドンの所說と比較する爲め、リカルドオが價值論中の重要章句を  
 詳細に引用した後に、マルクスは記して云ふ、リカルドオは吾々に示すに價值を定  
 めるブルジョワ的生產の實際の運行を以てする。ブルドン氏は此の實際的運行  
 から離れて、新過程を案出し、所謂新公式に従つて世界を改造しようとして苦しん

で居るが、その新公式なるものは、畢竟リカルドオに依て巧みに説明せられた現實的運行の理論的表現に外ならぬのである。リカルドオは如何にして價值が制定せらるゝかを示す爲めに、其出發點を現存社會に取つたが、ブルドン氏は其制定價值を出發點となし、此價值に由て一新社會を構成しようとした。ブルドン氏に取ては、制定價值は循環的に運動して、既に此尺度に基づいて構成せられた世界に對して、それが新に構成者とならなければならぬのである。労働時間に由ての價值決定は、リカルドオに取ては交換價值の法則であるが、ブルドン氏に取ては使用價值と交換價值との綜合である。リカルドオの價值理論は、現在經濟生活の科學的説明であるが、ブルドン氏の價值學説は、リカルドオの理論の空想的解釋ウツトシヤに外ならぬ。リカルドオはその公式を有ゆる經濟的事件からして推論することに依て、その眞なることを確證し、斯くの如くにして一切の現象を——例へば地代や資本の蓄積や賃銀利潤との關係の如き、一見それと矛盾するかの觀ある諸現象をも——説明する。而して正にこれあるの故に、彼れの學説は一個の學問的體系となるのである。このリカルドオの公式を全然任意の假説に依て近頃新たに發見したブ

ルドン氏は、己むを得ず、二三の經濟的事實を尋ね求め、之を牽強附會して彼れの新創造的思想實現の核子、實例、應用として示さうとして居るのであると(p. 216)。此時代のマルクスは、またリカルドオの價值法則を労働未だ労働力と云はずの價值にも應用して、リカルドオと同じく、所謂賃銀鐵則に到達するのである。即ち曰く「一商品の價值が其製作に要する労働量で定まるものならば、その必然の結論として、労働の價值、即ち賃銀も亦同様にその製作に必要な労働量に依て定まるべきである。従て賃銀、即ち労働の相對價值若しくは價格は、労働者がその生活維持に要する一切のものを作る爲めに必要な労働時間に依て定められる」と。而してリカルドオの「帽子の製造費が減少すれば、假令需要は二倍三倍又は四倍しても、其價格は究局その新しい自然價格まで下落する。生活に必要な食物衣服の自然價格低減の爲めに人間の生活費が減少すれば、労働者に對する需要が著しく増進しても、猶且讀者は賃銀の下落を見るであらう」と云ふ一句を引いて、成程此言葉は刻薄を極めて居る。帽子の製造費と人間の生活費とを同列に置くのは、人と帽子とを同一視するものではあるが、然し刻薄は事實その者に存するのであつて、此事實



を忌憚なく指摘するリカルドオの罪ではないと云つて、彼れを辯護して居る。「要するに(マルクス曰ふ)労働は労働自らが商品である場合には、労働なる商品の製作に必要な労働時間に依て測られる。然らば労働なる商品の製作には何が要せらるゝかと云へば、それは正に間断なき労働の維持、即ち労働者をしてその生命を支へ、且つ其種族を蕃殖する事を得しめる爲め、缺く可からざる物を製作するに必要なる労働時間である。労働の自然価格は賃銀最少額に外ならぬ。若し賃銀の市場価格がその自然価格以上に上れば、それは正にブルドン氏が原理として立てた價值法則と、需要供給の關係の變動とが對抗平均すると云ふ事から生ずるのである。而かも是にも拘らず、賃銀最低額は依然賃銀の市價が之に歸着せんとする中心點たる事を失はぬ」(p. 23-5)。

價值法則を労働の價值に適用するの結果が右の如きものであるならば、此法則は決して労働者前途の好望を證明するものではなくて、却て其反對でなくてはならぬ。故にマルクスは謂ふ「労働時間を以て測れる價值は、決してブルドン氏が主張するやうに、プロレタリア解放の『革命的學說』ではなくて、必然労働者の近世

的隷屬の公式である」(p. 62)。

リカルドオはアダム・スミスが一貨物に依て支配せられ、若しくは購買せらるゝ労働量を取て價值の尺度とすべしと論じたのに對して、價值の尺度は一物に費され、若しくは體現せられた労働量に之を求むべきことを主張し、労働の生産物が悉く報酬として労働者に與へらるゝ場合には、價值を測るに費されたる労働を以てしても支配せらるゝ労働を以てしても擇ぶところはないけれども、實際上労働者は労働産物の全部を收得しては居らぬのであるから、採用するところの尺度の何れなるかに由つて、其結果は同じでない。然るに労働は金銀其他の貨物と同じく、其自體の價值に變動あることを免れぬものであるから、一貨物の支配する労働量、即ち反面から見れば、労働の一定量と交換せらるゝ貨物量の大小は、取て價值の尺度となすべからざるものである。「貨物の現在又は過去の相對價值を決するものは、労働が生産すべき貨物の比較量、即ち費されたる労働量であつて、労働者がその労働と交換して受くる貨物の比較量、即ち支配せらるゝ労働量ではない」と論じて



つて居るが、マルクスはブルドンをスミスよりも更に甚しき過を犯すものと評して居る。即ち曰く「アダム・スミスは價値の尺度として、或時は一商品の製作に必要な労働時間を取り、或時は労働の價値を取つて居る。リカルドオは此の兩測定法の相違を明證することに由て、此誤謬を摘發した。ブルドン氏はアダム・スミスが單に併用するに止めた二物を混同することに依て、更にスミスの過ちを凌駕するものである。労働者が生産物の分配に與かるべき正しき比例を見出さんが爲め、換言すれば労働の相對價値を決定せんが爲め、ブルドン氏は諸商品の相對價値に對する尺度を求めぬ。然るに諸商品の相對價値に對する尺度を決定せんが爲めには、彼れは労働の一定量に對する等價物として、労働に依つて造られた生産物量を吾々に示すより以上の智慧を出す事が出来ないのである。此事は人をして、全社會は自己の生産物を賃銀として收得する労働者のみより成るかとの感を抱かしめる。第二段に於て、彼れは諸多の労働者の労働日の事實上等價なるを主張する。約言すれば、彼れは労働者の報酬均等に到達せんが爲め、商品相對價値の尺度を求め、而して出で、商品の相對價値を求めんが爲め、賃銀の均一を既成の事實

として承認して居るのである。如何に驚嘆すべき辯證法なるよ(p. 29-30)。ブルドンの價値論は成程上述の如く誤謬に満ちたものであつたとしても、労働價値法則を應用して、社會全員を等量の労働と労働とを相交換する獨立労働者たらしむることに依て社會を改造しようとしたのは、ブルドンの新着眼ではなかつたらうかと云ふに、既に可なり英吉利社會主義文書を涉獵して居たマルクスは、ブルドン以前に彼れと同主旨の提案を試みた者が決して一二人に止まらぬ事實を擧げて、此點に於ても亦ブルドンの貢獻を否認して居る。即ち謂ふ「英吉利に於ける經濟學の發達に少しく通じて居るものには、此國の殆ど凡ての社會主義者がリカルドオの學說の平等主義的應用を試みた事は、決して未知の事實ではない。我々はブルドン氏の爲めにホブキンス(ホジスキンの誤り)の經濟學(一八二二年)キリヤム・トムソンの「人間の幸福に最有利なる富の分配原理の研究」(一八二四年)エドモングの「實際的・道德的並に政治的經濟」(一八二八年)其他猶ほ四頁の其他其他を引用することが出来やう(S. 115)。而して其中の一人なるブレエの「労働の侵害と労働の救済」の重要章句を八頁に互つて引用して居る。

マルクスの忠實なるリカルドオ祖述は、またその賃銀の騰落と物價騰落との關係に關する説に現れて居る。既に別の機會にも論じたやうに、三田學會雜誌、第六卷第四號所載拙稿参照リカルドオが其價值論の章中、殊に其「經濟學原理」第一版の價值論の章に於て、當年學界の通説に反對して、賃銀の騰貴が價值の騰貴を來たさぬ事を證明するのみに特に力を用ゐて居る事は、研究者の注目するところである。而して彼れの到達した結論は、若し二貨物の生産に用ゐらるゝ資本が、其耐久性を等しうする場合には、二者の交換比率は一に二者の生産に投ぜらるゝ労働量に由て決せらるゝもので、賃銀率の昇降は全く是に影響を與へないし、又資本の耐久性に異同のある場合には、比較的固定資本の重きを占めるか、或は同じ固定資本にしても、其耐久性大なるか、或は資本の回轉に時を要するものにあつては、生産物の比價は賃銀騰貴の爲めに常に騰貴せぬ許りでなく、却て下落すると云ふのであつた。今マルクスのブルドンに對して主張するところも、全然是と軌を一にして居る。ブルドンは賃銀の騰貴が一般物價の騰貴を來たすものと認めて、賃銀の引上を結果とすべき同盟罷工は、到底一般的なる價格騰貴に歸着せざるを得ない。これは

二の二倍が四であるのと同様に確實の事である」と云ふ。之に對してマルクスは謂ふ「凡ての産業が固定資本(労働者の使用する道具)に比例して同数の労働者を雇備するならば賃銀の一般的騰貴は利潤の一般的下落を來たし、而して商品の市場價格は何等の變動を受けぬであらうと。然らば固定資本に對する労働の比例に異同のある場合には何うかと云ふに、此場合に於ては、比較的多くの固定資本と、少なき労働者との使用せらるゝ一切の産業部門は、早晚其商品の價格を引下けるの己むなきに到るであらう。然らざる場合には、即ちその商品の價格が下落せぬときは、彼等の利潤は平均率以上に昇るであらう。機械は賃銀收得者ではない。それ故賃銀の一般騰貴は、他に比して労働者よりも多くの機械を使用する産業に影響を與へることが尠ないのである。然るに競争は常に利潤を平均せしめる傾向があるから、平均率以上に上る利潤は、僅かに一時的にのみ存在し得る。それ故若干の動搖を除外すれば、賃銀の一般的騰貴は、ブルドン氏の云ふやうに、一般的物價騰貴を來たさずして、却て價格的部分的の下落、即ち特に機械の援助を待て製作せらるゝ諸商品の市價の下落を致すであらう」と云ふ(頁 155)。これは全然リカルドオ

の複寫であると云つても差支ない。

「哲學の貧困」第二章は、既述の通り、主としてブルドンの哲學的素養の未熟淺薄を嘲けることを目的とするものであるが、併し吾々に取て最も興味があるのは、マルクスのブルドンに對する批評の當否如何よりも、後に唯物史觀の名を以て呼ばるゝマルクス自身の歴史哲學的立脚地が漸く築かれたらうとして居る事の、其批評の間に窺はれる事である。後に彼れが「經濟學批評」の序文中に約言するところに従へば、物的生産力の一定の發達段階は、それに適應する一定の生産關係、從て經濟組織を造り、生産力の發達はまた生産關係、所有關係の變化を促がすと云ふのであるが、此思想は「哲學の貧困」中に、既に下の如き言葉を以て説かれて居るのである。

「經濟學者ブルドン氏は、人間が羅紗、麻布、絹布をば一定の生産關係の下に造り上げる事を立派に了解せられた。ところで氏の了解して居ないことは、是等一定の社會的關係も亦た羅紗や麻布等と同様に、人間の生産物であると云ふ事である。社會的諸關係は生産力と密接に結付いて居つて、新しい生産力の取得に依て、人間は其生産方法を變更し、生産方法、即ち生計の資を得る方法の變更に依て、人はその全

社會的關係を變更する。手磨臼は封建諸侯を頂く社會を生じ、蒸汽磨粉機は工業資本家の社會を生ずる。」然るにマルクスに従へば、是等の變動は思想觀念の變化の爲めに起るのでなくて、却て思想觀念の變化が生産方法變化の爲めに生ずるのである。故に曰く、然し乍ら、社會的諸關係を物的生産方法に適應せしめる同じ人間は、またその社會的關係に適應して、原理、觀念、範疇を造る。それ故此等の觀念、範疇は、之に刻印する諸關係と同じく、永久的のものではない。それは歴史的、可變的、一時的產物である。吾々は生産力の生長、社會的諸關係の破壊、觀念の形成の絶えざる運動中に棲息するので、動かざるものはたゞ運動の抽象、其者がある許りである(註(5), 91)。

「共產黨宣言」中に説かれた階級闘争説、階級支配隆替の説も亦既に充分明かに此書の中に窺はれる。即ち曰く、封建制度も亦そのプロレタリアを有して居つた。——ブルジョワジイの萌芽を其中に含む體僕がそれであつた。封建的生産も亦二つの敵對要素を有して居つた。これを人は同じく封建制度の善き一面と惡しき一面の名を以て呼んで、常に結局善き一面に打克つものは惡しき一面なること

を顧みない。運動を起し歴史を作り、闘争を促がすものは常に悪しき一面である。——ブルジョワジイが支配者となつたときに、人は封建制度の善き方面をも悪しき方面をも問はなかつた。ブルジョワジイに依て封建制度の下に於て發達した生産力は彼等の手に歸した。生産力に適應して居つた凡ての舊經濟形態、私法的諸關係、舊社會の公的表現であつた政治的狀態は、何れも皆破壊せられたのである。——それ故封建的生產の何物なるかを正解せんが爲めには、人は先づ之を對抗に基づく生産方法として見なければならぬ。如何に富が此對抗の内部に於て生産せられ、如何に生産力が階級の闘争と同時に發達し、如何に是等諸階級の一が、その解放の物的條件の成熟するに至る迄絶えず成長するかを示さなくてはならぬ。生産方法が、生産力をして其内部に於て發達せしむる諸關係が、決して永久の法則ではなくて、人間及び其生産力の一定の發達狀態に適應するものなること、人間の生産力上に起つた變動は、必然的に其生産關係の變動を齎らすことは、未だ是れ丈けでは充分了解せられないか。ところで第一に肝要の事は、文明の果實、即ち獲得せる生産力を失はぬ事であるから、生産力が其内部で造出された傳來の形態を破

壊することが必要となる。此瞬間から革命的階級は保守主義者となるのである。

然らばブルジョワジイとプロレタリアとの闘争は、如何なる徑路を経て發展して行くかと云ふに、それは偶發的、部分的、一時的衝突から、漸次に統一組織ある全階級の闘争となり、同時にブルジョワ的生産方法は、プロレタリアを數に於て増加せしめ、利害共同の自覺を痛切ならしめ、團結組織を強固ならしめ、其闘争の結果として、社會組織の根本的革新が行はれるのであるが、歴史上に於ける既往の階級闘争が、常に古き階級的支配に代ふるに、新しき階級支配を以てするの結果に終つたのとは異つて、プロレタリア對ブルジョワジイの闘争は、全然階級的衝突の根絶せられた新社會の出現を以て終ると謂ふのである。曰くブルジョワジイは一個のプロレタリアを以て始まる。而して此プロレタリアは、其自身更に封建制度下に於けるプロレタリアの殘片たるものに外ならぬのである。ブルジョワジイは其出現の始めには、多少陰蔽せられて、僅かに潛伏的狀態に於てのみ存したその對抗的性質を、其歴史的發達の道程上に於て必然的に發展せしめる。ブルジョワジイが

自ら發達するに連れ、其胎内には一個の新なるプロレタリア、即ち近世的プロレタリアが生長する。プロレタリアの階級とブルジョワ階級との間には闘争が發展する。而して此闘争はその兩當事者に依て感知せられ、判断せられ、理解せられ、容認せられ、而して最後に公然宣言せらるゝに先だつて、姑らく先づ部分的、一時的衝突として、破壊行動として現はれる。他方に於て近世ブルジョワジイの屬員は、それが他の階級に對して一階級をなす限りに於ては、皆其利害を一にするけれども、一度ブルジョワ自身相互に相對するや否や、其利害は相衝突する。此利害相反は、彼等のブルジョワ的生活の經濟的條件より生ずるものである。それ故ブルジョワジイが行動の外圍たる生産關係は、單一單純なる性質を有するものでなくて、相剋的性質を有するものなること、富が生産せらるゝ、同じ關係内に於て同時に貧困が造出さるゝこと、生産力の發達が行はるゝ、同じ關係内に於て、同時に貧すること、此等の關係は、ブルジョワ階級の或る屬員の富を絶えず破壊し、益々プロレタリアの増大を致すと云ふ條件の下に於てのみ、ブルジョワ階級の富を造ること、が、日一日と明白になつて行く(頁 106—7)。

一方大工業は互に知らぬ多數の人を一地域に集中せしめる。競争は彼等の利害をして相反せしむるが、賃銀率の維持と云ふ、雇主に對しての共同の利害は、共同の抵抗心に於て彼等を相結合せしめる——之が團結である。されば團結は常に資本家に對して一般的競争をなし得んが爲めに、労働者相互間の競争を廢止すると云ふ二つの目的を持つて居る。然るに抵抗の最初の目的は、僅かに賃銀維持の一事を出でなくても、資本家が資本家の側で、抑壓の爲めに相提携するに従つて、始めの孤立的團結は集團を形成し、常に連合せる資本に對峙して、結社を維持すること、が、賃銀の維持其事よりも彼等に取て必要事となる。英吉利經濟學者は、彼等の目から見れば、賃銀維持の爲めに設立せられたに外ならぬ結社の爲めに、労働者が其賃銀の大部分を投ずるのを見て驚くのはこれが爲めである。此闘争——此の純然たる一個の市民戰——に於て、凡ての要素が來るべき戰鬪の爲めに相結合し、發達する。一度此點に達すれば、團結は政治的性質を帯びることになる(頁 105)。

經濟的關係は先づ人民の大眾を化して、労働者となるに至らしめ、資本の支配は彼等の爲めに共同の境遇、共同の利害を造り出した。斯くして此大眾は、資本に對

しては既に一の階級であるけれども、それ自體に於ては未だ一階級となつて居らぬ。上にその一二の局面を叙述した闘争に於て、此大衆は集合し、それ自體として階級を組織し、彼等が擁護する利害は階級利害となる。然るに階級の階級に對する闘争は必然一個の政治的闘争である。

抑も被抑壓階級の存在は階級對抗に基づく各社會の生存要件である。それ故被抑壓階級の解放は、必然一新社會の創造を意味する。然るに一被抑壓階級が解放せられ得んが爲めには、既有の生産力と現行社會制度とが最早併存することが出来ぬ状態に達してゐなければならぬ。有ゆる生産用具中最大の生産力は、革命的勞働階級其者である。革命的要素の階級として組織せらるゝ事は、舊社會の胎内に於て發展し得る限りの生産力の既に存在することを前提とする。然らば此事は舊社會の倒壞の跡に新なる階級的支配の生ずることを意味するか。否。勞働階級の解放條件は、有ゆる階級其者の撤廢であること、宛かも第三階級の解放條件がブルジョワ的制度の確立、即ち有ゆる特權的身分 (estate) の撤廢であつたのと同じである。勞働階級は其發達に連れ、舊ブルジョワ社會に代ふるに階級と階

級衝突とを除外する共同聯合を以てし、本來の政治的權力なるものは最早存在しなくなるであらう。何となれば政治的權力なるものは、ブルジョワ社會内に於ける階級衝突の表現に外ならぬからである (p. 168)。

章の末尾に近づくに従つて、マルクスは階級闘争の觀察者ではなくなつて、プロレタリアの戰士たり、その當局者たるの態度口吻を益々明かに露呈する。即ち彼等はプロレタリアとブルジョワジイとの闘争は、必然其最高頂に達すれば、全革命を意味する闘争たらざるを得ないことを述べた後、社會運動は政治運動を排除すと云つてはならぬ。同時に社會運動たらざる政治運動と云ふものがある事はない。社會の進化は、階級なく階級衝突なき状態に於てのみ政治的革命たることを己めるであらう。其時の至る迄は、社會の一般的改造が行はれんとする前夜に於て、社會科學の最終の言葉は、常にジョルジュ・サントの所謂

「Le combat ou la mort; la lutte sanguinaire ou le néant.

C'est ainsi que la question est invinciblement posée.”

でなければならぬ」と云ふことを以て全篇を結んで居るのである (p. 168—9)



マルクスの「哲學の貧困」を著す目的が、佛蘭西労働者の間に於けるブルドンの勢力を失墜せしめることにあつたならば、マルクスの論法の犀利と用語の辛辣とを以てしても、此目的は充分達せられたとは云ふ事が出来まい。ブルドンは此時以後猶久しく、殆どマルクスの生涯を通じて、拉典諸國社會主義思想界に於ける彼の最強敵であつたからである。併し此事は恐らく此書の價值を左右するものではなからう。筆者の此書に對する興味は、マルクシズム成長の道程上に於ける最も重要な里標の一として之を觀る事にある。而して此書を取つて後の「資本論」又は「餘剩價值學說論」殊にそのリカルドオの卷と比較するものは、マルクスの經濟學說が此時以後猶ほ重要な幾多の變遷を閲した事を學ぶと同時に、之を取つて「共産黨宣言」又は有名な「經濟學批評の序」に比較するものは、用語の精粗其他の細目を除けば、唯物史觀は此時既に完成に近い状態に達して居たことを見出すであらう。「哲學の貧困」は經濟學の上から見れば、マルクスの最初の收穫で、唯物史觀の上から見れば、最終到達點の一つ若しくは二つ手前の里標である。

## 第四篇 雜錄 三章

ロオドベルトスの生涯及び學説大要

獨逸社會主義を云ふものは、マルクスの外にロオドベルトス及びラッサアルの二人を擧げるのが常である。併し實際上の影響を別として、思想上の獨創に於てラッサアルが決して他の二人に比肩すべきものでないことは既に定論がある。彼れの著作の中で最も優秀なるもの、一は「労働者綱領」であるが、これが「共産黨宣言」の改作 *Umkehrung* であることは、ベルンシュタインも既に云つて居るし、また他の一の「公開答狀」は、賃銀鐵則と生産組合の主張とを中心として居るが、賃銀鐵則が正統派經濟學からの借用であることは差支ないとしても、生産力の進歩にも拘らず、賃銀は上進せず、従つて全國民所得の中で、労働者が受ける配當の割合は益々減少すると云ふ理論は、彼より先きにロオドベルトスが一層精緻なるものを唱へて居る。國庫の補助を受けて組織する生産組合の主張も、一八四八年前後の佛蘭西社會思想、殊にルイ・ブランの計畫を聞知して居るものには、少しも新奇とするには足

らぬ。更に稍々大部なる「パスチャ・シユルツエデリツチ君別題資本と労働」を読むものは、マルクス及びロオドベルトスから借用したと思はれる思想と章句とに到處で逢着するであらう。マルクスが資本論序文の中に、ラツサアルが己れの説を用語の末に至る迄借用しながら、其出處を明示しなかつたのを不快とする語氣を漏らして居るのは既に人の知つて居る事である。(一八六四年六月三日附エンゲルス宛書簡の中に、マルクスは己れの講演筆記「賃銀労働と資本」を讀返して見て、「パスチャ・シユルツエ君」の種本を其處に發見した事、さうとは云はずに此舊作を註として全文資本論中に再掲したら、ラツサアルは困るであらうと云ふ意味のことを云つて居る)。

さて残るマルクス、ロオドベルトスの二人を取て見れば、系統の規模、後世に對する影響の大小の點に於て、後者は前者と比較にはならぬにもせよ、一八三七年(一八三九年?)ロオドベルトスが *Augsburger Allgemeine Zeitung* に寄稿した「労働階級の要求」と題する論文を以て、獨逸に於ける社會思想發達史は一新生面を開き、其時迄一部分はフリーエエ的思想に支配せられ、一部分は政治上急進主義の後塵を拜して居

つた獨逸の社會理論は、茲に初めて、内容に於ても方法に於ても獨特の面目を呈するに至つた(「チイツェル」と云はれて居る位であるから、彼の學説が紹介論評に値するものであることは論を俟たない。加之マルクスの餘剩價值説は、己れの説の剽窃であると云ふロオドベルトスの權利主張は、證據不充分的嫌があると思ふが、彼の賃子論はマルクスに影響を與へたと與へなかつたとに拘らず、甚だ特色ある労働搾取論として傾聴に値するものである事は、學者の争はぬ處であらう)。

ロオドベルトスは、一八六三年ラツサアルが全獨逸労働者同盟の運動を創めるとき、頻りに援助を求め、同盟のプログラムに修正を加へる事をも辭せぬと云ふ迄に讓歩して、其出處を促がしたにも拘らず、彼は遂にヤゲツツオウの莊園を出て、實際界の動亂中に投ずる事を肯んじなかつた。これにはラツサアルと意見の相容れぬ點があつたと云ふ理由もあるが、其外に彼が田園の閑靜を愛して、都會の喧騒を嫌つたと云ふ事が與かつて力のあつたものらしい。彼は終に書齋裡の國家社會主義者として終始することに甘じたのである。但し此人も全然實際社會に於て力量を試みた経験がないのではない。一八四八年の動搖期には、普魯西の中央

政界に出で、一度は國務大臣の椅子に就いたこともあるが、それは此人の生涯の極めて短かい挿話に過ぎないので、ロオドベルトスの名は將來に於ては、恐らく國家社會主義の理論家としての外は記憶せられることがないであらう。彼れの名は委しく云へば、Johann Karl Rodbertus で、一八〇五年普魯西北部の一小市グライフスワルドに生れ、父は法律顧問官 Justizrat で羅馬法の教授を兼ねて居た。子はギョツチンゲンと伯林の兩大學で法律を修め、司法官の職に就いたが、法律學の無味乾燥に倦きて國外に旅行し、歸國後は新たに(一八三四年)ボンメルンのヤゲツツォウに求め得た騎士領に居て、それを自ら經營しつゝ、一方社會科學、史學、語學の研究に心を傾けた。併し同時に、漸く地方同族の間に名を知られて、郡縣の政治に参加した後、一八四七年推されてボンメルン州會の議員及び州參事會員 Generallandschaftsrat と云ふものになり、州會議員たるの資格に於て、一八四八年三月暴動の後に召集せられた第二聯合州會 der zweite vereinigte Landtag に連なつた。而して此聯合州會に代つて召集せられた普魯西國民議會に於ては、彼は既に左翼中央黨の領袖であつた。カムプハウゼン内閣が辭職して、六月廿五日アウエルスワルド・ハンセマン内閣が

組織せらるゝや、ロオドベルトスは入つて宗務大臣の椅子を占めた。然るに新首相は、越えて七月四日、早くも宗務大臣の辭職を報告して議會を驚かした。議員としてのロオドベルトスは、獨逸統一とフランクフルト帝國議會の主權承認とに最も熱心であつたが、其辭職も主權在民主義に就て閣僚と意見を異にした爲めであつた。國民議會が解散せられ、新憲法が欽定せられた後、最初の選舉にロオドベルトスは再び候補に立つて、三の選舉區(トリエルの選舉區から第一院に、伯林の二選舉區から第二院に)から選出せられたが、四月廿六日第一院が停會し、第二院が解散せられるに及んで、彼れは所屬黨の爲めに選舉不参加を主張した。ロオドベルトスの公生涯は之を以て終る。それ以後其死(一八七五年)に至る迄の生涯は、全然社會問題の研究に捧けられたと云つて好い。彼れがラツサアルの出慮の懇請に應じなかつたことは前に述べたが、その前に、一八六二年進歩黨から立候補を勧められたけれども、固く辭して受けなかつたのである。

社會問題に關するロオドベルトスの著作では、上記論文「勞働階級の要求」が最初のもので、後に人に與へた書簡中に著者自ら「同じ思想、否な同じ用語と表現とを、」

：一般に、私が經濟學上の著作に於て個々一つ宛論じた全系統]を、貴下は既に此中に發見されるであらうと云つて居る。これは前記の如く Augsburger Allgemeine Zeitung に投稿せられたのであるが、新聞社はこれを採用しなかつたので、手稿は再び著者の手に還送せられ、一八八五年に至つて、遺稿整理の任に當つた Wagner と Kozak との手で始めて公刊された (Zur Beleuchtung der sozialen Frage, Teil II. Nebst einem älteren Aufsatz ueber die Forderungen der arbeitenden Klassen, 1839. Unter Mitwirkung von Kozak herausgegeben und eingeleitet von A. Wagner, Berlin 1885)。此處女作では、歴史哲學的思想が主位を占めて居つたが、一八四二年の著「國家經濟的状態の認識の爲めに」(Zur Erkennnis unserer staatswirtschaftlichen Zustände) になると、内容は經濟理論的で、其目的は現時の國家經濟的缺陷の認識と救済とに貢獻することになつた。而してロオドベルトスの全系統中最も重要な地位を占める分配理論は、既に此時に大成して、それ以後變易する事がなかつた。そのキルヒマンに與へた三通の公開狀 (Soziale Briefe an von Kirchmann, 1850-51) 及び遺稿資本論 (Das Kapital. Herausgegeben von Kozak, 1884) に説くところ、何れもこれと同じである。この外彼れの著作で、屢々引用せられる

ものは、地主現在の金融困難の説明と救済との爲めに] (Zur Erklärung und Abhilfe der heutigen Kreditnot des Grundbesitzes, 1871) 標準労働日] (Der Normalarbeitstag 1867-59) [ライプチヒ獨逸労働者同盟委員會に與ふる公開狀] (Offener Brief an das Komitee des deutschen Arbeitervereins zu Leipzig, 1863) 等である。

ロオドベルトスに従ふと、社會労働の全産物は、地主資本家労働者なる三階級の所得を形成するが、労働生産力が増加すると、地主資本家の受ける分前は増加するが、労働者の分前は變らない。即ち労働者所得の全社會所得に對する割合は、労働生産力の増進と共に減少し、反之地主資本家の收める割合は増加し、右ゆる文化の進歩、就中技術發明の結果は、少數有産者の利益にのみ歸する。此事實は第一、これに依て、益々多數の人間が文明の恩澤から除外せられるのであるから、文化に反するものであるし、第二に本來經濟價値の創造者たる労働者から、其産物を奪ふのであるから、また併せて不當でもある。

これ丈の事は既に處女作中に主張せられて居るが、後の著述に於て、彼れは労働價値説から出發して一層精細に其主張を論證する。

ロオドベルトスは、先づ「凡べての經濟財には勞働が費やされる、而して勞働のみが費やされる *Kosten Arbeit und Kosten nur Arbeit*」と云ふ命題から出發する。勞働の費やされた財のみが經濟財である。自餘一切の財は、人間に取て假令如何に有用必要なものであつても、自然財であつて、經濟財ではない。また茲に勞働と云ふのは、生産上必要な物質的作業を意味する。但しそれは一財の生産に直接投ぜられた勞働のみを意味するのではなくて、生産に用ゐる生産要具の生産に投ぜられた、間接勞働をも其中に含むのである。然るに經濟財には勞働以外何物も費やされてないとするれば、各財の費用は勞働時間を以て云ひ現はされるであらう。而して財の價值が、若しも常に勞働費用額に等しきものならば、勞働はまた最好の價值の尺度たるであらう。即ち財と財とが相互交換せらるゝ分量が、常に兩財に投ぜらるゝ勞働量に由て定まるもの、換言すれば A 量の勞働の產物は、常に A 量勞働の產物と交換せらるゝものと假定すれば、勞働は單に貨物の價值の尺度として用ゐるべきのみならず、それは自體に於て價格の變動なき丈、貴金屬よりも一層よく貨幣たるに適するであらう。

次に國民所得は如何に諸階級の間に分配せらるゝかと云ふに、ロオドベルトスに従へば、一國民所得は、一定期間内に產出せられたる直接財若しくは享樂財(間接財或は生産財に對して謂ふ)を以て成るものであるが、此國民所得は、所得の生産者たる勞働者と、生産者に非ざる財産所得者とに分配される。即ち賃銀と賃子とである。ロオドベルトスの所謂賃子とは、或は不勞所得、財産所得と譯すべきもので、自ら勞働するとなし、財産の力に依て收得する一切の所得を總稱する。地代利潤利子皆是に屬するのである。然らば如何なる原因に由て、所得生産の爲には一指を動かす勞をも取らぬ人々が、所得を收めることが出来るかと云ふに、是には二の前提條件の備はることを要する。第一は勞働が、少くも勞働者の生活維持並に勞働繼續に必要な以上、に餘剰を產出し得ると云ふ經濟的事實、第二は土地並に資本が私有せられ、その所有權の力に依て、勞働產物が勞働者に屬せずして、他人の手に歸すると云ふ法律的事實である。此二事實は、分業の行はれる處では必ず存するものと彼れは見て居る。而して此二條件が備はるところでは、勞働產物の中勞働者の生活維持必要額を超過する餘剰は、全部又は一部分勞働者から奪はれて、

他人の手に歸するのである。此強制を最も露骨に行つたのは奴隸制度であつたが、労働者が「自由」人格と認められた今日に於ても、地主及び資本家は、饑餓の筈に依つて同様の強制を労働者に加へて居る。畢竟地代及び資本利潤の收得は、他人の労働産物の奪取に基づくものである。

地主と資本家との別が未だ生じないで、原料の生産も其加工も、凡べて同一人の支配下で行はれた時代には、労働者所得と賃子との分割丈けがあつて、地代と資本利潤との分岐は起らず、賃子は一括してこの資本家兼地主の手に收得せられたのである。然るに地主と資本家とが岐れると、賃子は地代と利潤との二部分に分れ、地主はその農業資本に對する利潤以上に、特別な地代と云ふ餘剩所得を收める。何となれば、工業に於ては原料購入を要するに反して、農業に於ては、其必要がないから、價値が労働費用額に由て定まる限り、同額の賃子を擧げる爲めに投下せらるゝ資本額は、農業に於ては工業に於けるよりも、原料價値を不要とする丈け少くて済む。此差額が即ち地主が特に地主として收得する地代であつて、或は自作農の餘剩收益、或は貸地料、或は地價の形に於て地主の利益となる。ロオドベルトスは

此理論を以て、最後に耕やされたる土地、若しくは最後に土地に投せられたる資本は地代を生ぜずと謂ふリカルドオの地代説を駁撃するのである。(本書第二篇第三章)

生産力の増進に伴ふ労働者收得分の、全國民所得に對する割合の減少は、また極貧 Pauperismus と恐慌との原因である。極貧は人口の増加よりも大なる速度を以て増加し、同時に一方國富は人口よりも速かに増加する。而して此災厄は正に労働階級の頭上にのみ落ちる。茲に労働階級と云ふのは、機械的労働に依て生活する本來の労働者と、多少の資本は所有しても、大體に於て其肉體労働に依て生計を支へる小資本家とを併せ含むのである。恐慌は主要産物の販路停止、一切物價の下落、無數の破産、生産の制限及び休止、労働者の失職等の續發交代を其症狀となる。窮貧と恐慌とは社會が自由を購ふ爲めに支拂つた犠牲である。國民中の六分の五はその所得の不足の爲めに、常に文明進歩の恩澤から除外せられて居る許りではなく、時々極端なる窮迫に襲はれ、而して絶えず此危険に脅かされて居る。而かも此被害者は即ち國富の創造者に外ならぬのである。今日に於ては正に生産力増

進の結果たる過剰その者から缺乏が生れる。社會組織の矛盾は、貧者をして正に富者が富の増加の爲め、恐慌に由つて苦しむるときに餓えしめる。労働階級の貧乏の爲め、益々發達する生産は彼等の所得に販路を見出すことが出来ない。過剰生産物を労働者の手に與ふれば、嘗に彼等の境遇を改善し得る許りでなく、生産物の價值を高め、從て生産の繼續が可能となるのに、労働者所得の不充分なる爲め、それが出来ないで、生産物の價值は下落し、從來の程度に於て生産を續行することが不可能となる。一方恐慌は、労働者階級が何とかして窮乏の状態を脱し、有産階級の驥尾に附して、文明進歩の恩澤に浴することを決して許さない。抑も斯う云ふ現象が起るのは、經濟組織の何處かに缺陷が在るからでなくてはならぬ。

此弊害は何うすれば根絶することが出来るか。貧窮恐慌並に之に伴ふ一切の弊害を不可能ならしめる爲め、ロオドベルトスは如何なる經濟組織を提議するかと云ふに、彼れの究極の理想は、土地及び資本の社會有であつて、其資本論中の「土地並に資本私有なき國家經濟」と題する一章に於て、斯る状態が實現せられた曉、生産消費並に分配が如何に行はるべきかを詳細に論じて居る（本書第二篇第三章）併し

彼れは此理想の實現を近き將來に豫期しなかつた。或機會に於てはこれに五百年を要すべしと記して居るのである。然らば其日の到來する迄、現在の法制の下に於ては、如何なる改良策を講ずべきかと云ふに、ロオドベルトスの一切の提案は公權に依る賃銀の調節、賃銀制度の改造に歸着する。彼れは既にその處女作の中に、現在社會の弊害を述べた後、三ヶ條の要求を提出し併せて是に應ずる方法の大體を略記して居る。曰く、(一)社會全生産物の中、労働者階級に歸屬する配當分は之を高めねばならぬ。(二)労働者は他の階級と同様に、文明進歩の果實に與からねばならぬ。賃銀は社會的労働生産力増進せる場合には、此増進に比例して上進しなければならぬ。(三)労働階級は景氣の動搖から免れねばならぬ（その解放以來労働者は自己の計算に於て生活しなければならぬ、併しそれと同時に不景氣に際して自己の計算に於て生活せずに居なければならぬ）。此要求に應ずる爲には(一)労働に應じて一切貨物の價值を法定し、生産力の變動と共に時々これを變更し、(二)この價值決定に適合する労働貨幣を造り、これを以て賃銀支拂の用に充て、(三)此貨幣を實物と引換ふる爲め、貨物貯藏所を設けなければならぬ。國民經濟的労働の生産



物は凡べて之を國定貨物貯藏所に納入する。納入せられた貨物量は一定の労働時間量を代表するもので、之に相當する労働貨幣額が交附せられ、一定時間労働の給付せられた事を證明する。而して彼れは、同じく貨物貯藏所に就て、其の支出する労働貨幣額に相當する丈の價值ある他の貨物を持去るのである。ロオドベルトスの此考へは、他の機會にも言明されて居るが、これが始めて明確詳細に *borate* されたのは、彼の「標準労働日」なる論文を待つての事であつた。それに依ると、國家は一の時間標準労働日 (*normaler Zeitarbeitsstag*) と勤務標準労働日 (*normaler Werk-arbeitsstag*) なるものとを定める。即ち先づ各業に於て、經營の種類如何に従つて六、八、十若くは十二時間と云ふ標準時間労働日を定め、更に此標準時間内に於ける標準勤務量、即ち普通の労働者が、普通の熟練と普通の勤勉とを以て爲し得る勤務、又は仕事の量を決定しなければならぬ。而して各業に於ける労働者の報酬は、此標準勤務量に依て定められる。即ち標準時間労働一日分の賃銀を受ける爲には、労働者はこの標準勤務量丈の仕事をしなくてはならないのである。若しも標準時間内に標準勤務量の半分丈の仕事をしか爲なければ、半分の報酬を受け、一倍半

の仕事をするれば、一倍半丈の報酬を受ける。各業に於ける標準勤務に對する賃銀率は國家監督の下に雇主と労働者との間に協定せられ、此協定は定期的に更新せられ、而して労働生産力増進の程度に應じて、賃銀率も亦引上げられるのである。標準勤務労働日は、また標準労働として各業生産物の價值を決定する。即ち一業に於ける標準勤務量を含有する生産物と、他の業に於ける標準勤務量を含有する生産物とは、同じ價值を有たなければならぬのである。各業に於ける賃銀も亦標準労働に従て支拂はなければならぬ。但し労働者は標準労働の給付全量丈の労働貨幣を受けることは出来ぬので、國家の費用、及び需要の調査、又は生産要具の監理等、物的労働以外の勤務に服する役員の爲めに、其一部分は差引かれるのである。最後に國家は、標準労働の尺度に従つて支拂はれた賃銀が、實際は賃銀財(享樂財)と引換へられるやうに配慮しなければならぬ。而して之が爲めには、國家は(一)賃銀貨幣の發行權を獨占し、(二)雇主に貸付けを行ふに此貨幣を以てし、(三)此貨幣の償還は標準労働に従て評價せられたる生産物にて行はる。(四)此の生産物にて償還せらるべき貸附の爲めに貨物貯藏所を設け、(五)最後に此等生産物に對して、労働者

の賃銀券を規定價值に應じて收受しなければならぬ。これがロオドベルトスの提案の概要である。

ロオドベルトスの特色の一は、其國家觀社會觀にある。社會主義は屢々個人主義の擴充だと云はれるが、ロオドベルトスの社會主義に至ては、全然非個人主義的の立場から主張せられたものである。ドイツェルは彼れを「有機的國家觀の社會主義者」と評して居るが、彼れの見るところに従へば、社會改革は享樂の平等に對する個人の自然權を論據として要求せられるのでなくて、現在の不平等の制度は必然的に社會並に文明の破壊に導くから、そこでそれが必要となるのである。勞働階級の特殊利害の爲めでなく、全體の利害の爲めにロオドベルトスは法律國家の干涉を要求する。社會問題は單に一個の「勞働者問題」ではなくて、近世文明の死活問題である、而して此文明を保護し發展せしめる事が、彼れの社會主義の根本精神である。個人の利害、個人の幸福が主眼でなくて、社會と其進歩とがロオドベルトスの發足點になつて居る。彼れは所得の不平等、社會の分岐を根本に於ては是認して居る。たゞそれが現在の「營利自由」の制度内に於けるが如く、社會と其進歩

とを危うくしてはならぬと云ふのである。彼れは近世の似而非自由の廢止を主張するのと同じ社會主義的根本思想、部分の撞着を容さざる社會全體の利益から、古代の奴隸制度を是認して居る。生産力が未だ凡ての階級により、多くを與へる爲めに不充分的なる場合には、勞働階級の生活は、斷じて之れを必要なる程度に制限しなければならぬ。蓋し教養は相當の資産を必要とするが、國民中の何處かに精神の花が咲くことは、全く何處にも咲かぬよりは優るから、或階級に生活必要以上のものが與へられ、それに依て、此をして少くも歴史の功績を挙げしめることは、文明その者の利益である。斯る經濟狀態には……たゞ規律制裁の社會制度のみが適合する。人が手白をしか知らぬ時代に於ては、奴隸制度は存在しなければならぬ。これなくしては古代はその使命を果すことが出来なかつたであらう。然るに今日では生産技術の大發達に由て、人間の勞働、及び人間の運命は無限に容易安樂にする事が出来るのである。凡ての階級の所得は、生理上生活に必要な程度以上に高め得る筈である。それが行はれないのは、個人主義に機能的缺陷がある爲めである。故に今日社會を發達せしむる爲めには、古代に於て不自由の制度が

必要であつたと同様に、此の自由制度の弊害から社會を保護する事が必要である。これがロオドベルトスの立場である。故に實際方策の上では、彼れと佛蘭西社會主義者殊にブルドオンとの間に、幾多の類似點あるにも拘らず、その社會哲學上の出發點に於ては、彼此全く相容れなかつた。彼れは寧ろプラトオ、プイヒテの後裔であつて、決してルソオを嗣ぐものではない。

一言ロオドベルトスの分配學說を批評すれば、これは労働價值説から出發して、最も徹底的に演繹せられた理論であるが、又労働價值説に伴ふ困難を最も明瞭に證據立て、居る一標本と云つて好い。彼れは財の價值は投下労働量に由て定まるとの前提から出發して、土地に投ぜられた資本は必ず普通利潤以上の利益を擧げる。此餘剩收益が即ち地代だと云ふ、一見不思議に感ぜらるゝ説を唱へた。其理由は前にも述べた通り、農業は原料を要せぬと云ふ特典があるからだと云ふのである。即ち前提に依つて同量の労働は、同額の價值を生むものとすれば、農業に投ぜられた資本は、原料購入の必要がない丈、工業に於ける同額の資本よりも、多量の労働を雇傭し得る、従て、より多くの價值を産出し得る。そのより多くの價值

が地代だと云ふのである。これに對して直ぐに起る疑問は、然らば何故に資本は工業を去つて、それよりも有利なる農業に移らぬかと云ふことである。而して此の資本の流出入は、資本が工業を去つて新たに農業に投ぜられても、最早工業に於て擧げ得る普通利潤(又は平均利潤)以上の收益を擧げる事が出来ぬと云ふ點に到達して始めて已むべき筈である。但し此點に到達したときには、既に供給の變動に由て、生産物の價值は其労働費用には比例せずして、或物(即ち原料に費用のかゝる生産物)は其労働費用以上の價值を有し、或物(即ち農産物の如く原料を全く要せざるか、要すること少きもの)は労働費用以下の價值を得るに至るべきである。既にロオドベルトスは、紡績業、織物業、裁縫業と云ふやうに、原料が漸次高價になつて行く諸階段の産業に就ては、利潤平均の爲めに、各段階の生産物の價值が、労働投入量に一致せざることを承認して居るが、それを一步進めて農業と工業との關係に及ぼせば、矢張り労働價值説と共に、農業に於ては資本は必ず普通利潤以上の餘利、即ち地代を生ずと云ふ彼れの主張は破れる譯である。勿論ロオドベルトスは、労働價值説の前提の下に於てのみ其地代論を主張するので、リカルドオが労働價值

説から出發しながら、最後に土地に投ぜられたる資本は地代を生ぜずとの結論に達したのは一貫しない、リカルドオの結論から云へば其前提を棄てなければならぬし、リカルドオの前提を保持すれば、自分と同じ結論に到達するより外はないと謂ふのである。併しそのリカルドオの前提なるものを承認してないものは、またロオドベルトスの結論をも承認する義務はない。今日の通論から見ればロオドベルトスの説は前提結論共に承認することが困難であると云つて好からう(本書第二篇第一第二兩章)。

恐慌の原因を労働階級所得分の漸減に求めた事も亦た承認し難く思はれる。各企業家が利潤を目的として生産を行ふ所謂産業界の無政府状態が繼續する限りは、遠算から生ずる需要供給の不適合は、之を避ける事が出来ぬであらう。従て個別的生産の行はれることを其儘にして、國家の賃銀調節に依て恐慌を根絶しようとするロオドベルトスの提案は、問題の核心に觸れぬ嫌がある。労働貨幣の考案に至つては、彼れの處女作の書かれる以前既に一八一〇年ロバートオエンが略ほ同主旨のものを唱へ、且つ一八三二年にはそれを實驗して失敗して居る。ロオ

ドベルトスは「標準労働日」の中で、此種の實驗が既に試みられた事實は全く知らずに居た事を断つて居るが、縱令ロオドベルトスの提案が實行せられたとしても、それがよくオエンの轍を履まざる事を得たか何うかは甚だ疑はしい。オエンの「労働交換銀行」は、一八三二年倫敦に開設せられたのであるが、其仕組を云へば、生産者はその賣らうと思ふ生産物を此處に持参し、消費者は此處からその欲するものを持去る。而して其價格は、評價者があつて之を決定し、それに相當する證明券を生産者に交附し、生産者は券面の價值に相當する丈の他の貨物を銀行から買ふ事が出来るのである。例を舉げて云ふと、革師があつて一足の靴を造るのに、二志の原料と十時間の労働とを費やしたとする。彼は此靴を銀行に持参して其費用額を告知すると、十時間の労働に對し一時間券十枚と、二志の原料に對して一時間券四枚(六片を一時間に換算す)と合計十四枚が交附せられる。但し價格評定人が件の靴の品質が十時間労働に相當しないと認定すれば、價格を差引くのである。さて受取つた一時間券十四枚で革師は欲するものを買ふ。斯うして生産者と消費者とは、貨幣と商人との仲介によらずして交換を行ふやうにすることが出来る。

者は同じ過ちに陥つて居るからである。(『解放』大正十一年一月號發表)

オエンは考へたのである。此交換銀行の試みは、始めは大成功であるかの如く見えたが、間もなく困難が續發した。その困難の最大なるものは、銀行に生産物を納入して時間券を交附せられても、それで買ふべきものが銀行にない。有用物は品切れになつてゐて、無用物若しくは流行遅れの貨物許りが残つて居ると云ふ事實である。同時に生産者は消費者の要求を考へないで、成るべく多額の時間券を得ることのみを念頭に置くやうになつた。それには成るべく原料を要しないで、労働の多くかゝるものを造るのが利益であるから、例へば裁縫師は一定の切地で二着のズボンを作るよりも、四着の胴衣を造ることを望むやうになつた。此困難に應ずる爲め、銀行は漸く普通の貨幣を使用するの已むなきに至つた。即ち銀行の貯藏所には殊に原料が缺乏したので、原料を吸収する方法として、原料に加工する労働に對しては労働券を交附するけれども、原料その者に對しては現金を支拂ふと云ふやうな事を始めたのである。而して一八三四年五月に至つて、銀行は閉鎖同様の状態に陥つた。ロオドベルトスの労働貨幣の提案も、若し實行せられたなら、オエンと同じ經驗を繰返したのでなからうかと豫期される。根本理論的に兩

## マルクス傳の一資料

此文章は始めマルクスの『自叙傳』と云ふ標題を附けるつもりでゐたが、それでは明かに誇大に失するので、改めて右の通りにしたのである。明かに誇大には失する。併しまた全くの嘘ではない。左に掲げるところはマルクスが四十二の時(一八六〇年)其辯護士 Weber に訴訟用の参考資料として、自己の閱歴及び性格を説明する爲め、記して與へた覺書の翻譯である。此訴訟は Nationalzeitung の主筆に對して提起せられたもので、事件は端を Carl Vogt のマルクス誹毀に發してゐる。マルクスは Vogt の誹毀に對して、法律上では、此に基づいて失敬な社説を掲げた Nationalzeitung を訴へ、文筆の上では Herr Vogt (1860) を著はして之に制裁を加へようとしたのである。

Vogt 事件の顛末を記すと、此人のマルクス誹毀は、マルクス自身は殆ど與かり知らぬと云つて好いが、マルクス門下の側では幾分之を挑發した嫌がたしかにあつ

たのである。Vogt は自然科学者、唯物論者であつたが、政治運動に携はることを好んでフランクフルト國民議會では左黨領袖の一人であり、五人の Reichsregenten が選舉せられた時には、選に當つて其一人となり、ギイセン大學教授の位置は、政治運動の爲め已むを得ず棄て、一八五二年來ジュネヱヴに住んで居たが、伊太利戰爭に際して、獨逸民主々義者の取るべき態度に關するプログラムを定め、フライリヒラアト其他在倫敦の獨逸亡命客に之を示し、且つ此の方針に基づいて、新に起された瑞西の一週刊紙に對して寄稿を求めて來た(一八五九年四月一日)。マルクスが Vogt の行動に不感服であつたことは、そのエンゲルス宛の書簡に由ても窺ふことが出来るけれども、併し公けには彼れに對して何等の攻撃を加へなかつたが、マルクスの友人で、特に親密ではなかつたが、革命時代以來彼れと交通してゐたものに Karl Blind と云ふ人物があつて、これがマルクスに Vogt の秘密なるものを告げた。Vogt は獨逸を賣らんとするもので、奈翁三世の補助金を得て運動して居る。或る南獨逸の操觚者に三萬グルデンを賄しようとした。倫敦に於ても贈賄を試みようとした。伊太利戰爭は既に一八五八年の夏、ジュネヱヴでジエロオム・ナボレオ

ン公と Eszter 並に一味の者との會見に於て討議せられ、將來の匈牙利王としては露西亞のコンスタンチン大公が指定せられてゐる云々といふのである。マルクスは此話を、自分もその特別寄稿家となつた Das Volk の主筆の Biscamp に聞かせたところが、後者はマルクスに計らずに、之を種にして Vogt に對する嘲弄的な文章を其紙上に掲げ、其一部を彼れに送附した。これ丈けならばまだ好かつたのであるが、更にリイブクネヒトは、Das Volk の印刷所に於て Vogt 攻撃の匿名冊子で、上記の秘密暴露の記事を含むもの、校正刷を發見し、且つ植字工某の證言するところに依れば、その原稿は Blind から廻附せられ、且つ Blind 自筆のものであつたと云ひ、校正も亦彼れの手跡に依て行はれて居つたと云ふのに安心して、兩三日の後其印刷一部を、その通信員をして居たアウグスブルグの Die Allgemeine Zeitung に送り、且つ附け加へて、此冊子の著者は最も信頼すべき人物で、書中の記事には悉く證據があると云ひ送つた。ところが Die Allgemeine Zeitung で此冊子を紙上に掲載すると、Vogt は該新聞に對して誹毀の訴訟を提起したので、新聞社はリイブクネヒトに約束の舉證を求め、リイブクネヒトは同じくそれを Blind に求めると、後者は之を拒絶し、冊子

の内容の如き事實をマルクスに告げた事實は已むを得ず之を承認したが、冊子の著者は自分ではないと云ひ張つてきかなかつた(Blindの虚言者なる事は後に明かにせられた)。リイブクネヒトは甚だ拙劣な立場に陥つたのである。不思議にも獨逸の裁判所は、これでも有罪の判決を下さないうで、結局 Vogt の敗訴には歸したが、之が爲め Vogt は、不當の攻撃を受け、不當の攻撃を受けたにも拘らず、法律は彼れを保護しなかつたと云ふ事實を世に示す形ちとなつて、其立場は非常に有利になつたのである。

然るに Vogt はこれ丈けに満足することをしないで、予の Die allgemeine Zeitung 告訴事件と題する印刷物を公にした。これより先き das Volk に Vogt 嘲弄の記事が掲げられた時にも、彼れは Bieler Handelskourier に一文を寄せて、マルクスを戴く一派の亡命客は、元と「悪黨」Schweifelhande と稱せられた連中であつて、此連中は獨逸労働者の間に陰謀を企て、居るが、其陰謀は大陸の秘密警察には悉く知れてゐて、必ず労働者を不幸に陥らしめるものであるから、労働者は宜しく彼等に對して警戒しなければならぬと云ふ意味の事を書いたが、今其「告訴事件」を公にするに及んで、前

日の誹謗を更に詳にして繰返し、殊にマルクスを以て、もと革命運動に加擔した事のある人々に對して、其の謂は、舊惡を種に金錢を強請する脅嚇取財團の團長たるものとした。此刊行物は可なりセンセーションを惹起したが、前記の通り *Nationalzeitung* は、此材料からして造り出した二篇の長文論説を紙上に掲載し、*Vogt* 自身も此論説の方が先づマルクス一家の目に觸れた(一八六〇年一月末)。勿論マルクス自身も之に對して冷然たる事を得なかつたであらうが、殊にマルクスの妻は之が爲めに打撃を受けた。そこで彼れは未だ *Vogt* の小冊子を見ない前に *Nationalzeitung* に法律上の制裁を加へる必要を認め、*Fischel* の周旋で之を前記の辯護士 *司法議官* *Weber* に托したのであつた。不幸にして訴訟は *Vogt* の *Allgemeine Zeitung* に對する場合と同じく失敗に終つた。最初に之を提起した市裁判所では、誹毀的文言は *Nationalzeitung* 自身の用ゐたものではなくて、他人の文言の引用に外ならぬから事實不十分なりとの理由を以て却下せられ、更に高等法院は脅嚇取財團、貨幣偽造團の首領を以て呼ぶことは、マルクスに對する侮辱にはならぬと云ふ、奇怪な意見であつて、何れもマルクスの敗訴に終つたのである。*Vogt* に對する文

筆上の制裁にして、一種の文の傑作と目せらるゝ、*Herr Vogt* は猶ほ多くの準備を要したので、十一月に入つて漸く脱稿した。(F. Mehring, Karl Marx, 287—303) 斯ういふ次第でマルクスは *Weber* に訴訟を依頼して、必要なる様々の材料を供給した。*Ielweil*, *Flocon*, *Ernest Jones*, *David Urquhart*, *Cyelas*, *Jottrand* 等のマルクスに與へた信書も其一部をなすもので、是等の中の或者は後に *Herr Vogt* 中に轉載せられてゐる。左に掲げるのは、マルクスが三月三日の日附で *Weber* に與へた書簡の「追申」としてある中から、マルクス自身己れの人物を辯護士に説明して居る部分を抜いたのである。此書簡を發見したのは、*Engels* 詳傳の編述に由て知られてゐる *Zustav Mayer* で、此人は近頃ラッサアル遺稿の出版に従事して居るが、其遺稿の間に *Weber* の書類が混入して居り、此等書類の中に *Nationalzeitung* 訴訟事件の關係文書が見出されたのである。(Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung 第十卷第一册六三—六頁)

マルクスが金錢に就て潔癖を持つてゐたことは、既に知られてゐるが、此訴訟などは、事件の性質が性質なので、特に金錢の出入を明かにして置く必要があつたの



であらう。彼れが何某から云々の申出があつたけれども辭して受けなかつたと云ひ、講義又は寄稿を行つた事を云ふ場合に、無報酬でしたと云ふ事を特に記して居るところにその配慮を認めることが出来る。

マルクスの本文左の如し、

『小生は小生自身一辯護士(久しくFischerの辯護士會長たり、又其性格の純潔と、法律上の才能とに由て聞こえたる同市の司法ユスチツアラト官故 Heinrich Marx)の子なるを以て、誠實なる辯護士に取りて、其訴訟依頼人の性格を明かにすることが、如何に重要なるかを承知致居候……』

千八百四十二年(當時廿四歳)小生は舊萊因新聞の主筆と相成候。此新聞紙は始め單檢閱、次で二重檢閱の下に置かれ、終に高壓的に千八百四十三年の春、普魯西政府の發刊を停止する處となりしものに有之候。當時小生と事を共にしたる人々の一人は、三月革命後普魯西に於て宰相たりしCamphausen氏に有之候。舊萊因新聞は全然普魯西に於ける檢閱制度の威力を破壊したるものに有之候(萊因新聞の發行停止後普魯西政府は小生が父の友なる秘密再閱議官(Geheimer Revisionsrat)Esserを

通じて小生に申出Offertenをなさしめ候。蓋しEsserは小生が其處にて今の妻を娶れるKreuznachの鑛泉場に、小生と共に滞在し居りたるものに有之候。此通告を得たる後小生は普魯西を去りて巴里に赴き候。此一事は内密に申述候事にて、固より公表すべきものには御座なく候]

巴里にては Friedrich Engels, Georg Herwegh, Heinrich Heine 及び Arnold Ruge と共に [獨逸佛蘭西年報] Die Deutsch = Französischen Jahrbücher を發行致候 (Herwegh 及び Ruge とは後に絶交致候)。千八百四十四年の暮小生は巴里駐劄普魯西公使館の促がすに基づき、(Guizot に依て退去を命ぜられ、此地を去りてブルユツセルに赴き候。小生が巴里滞在中、佛蘭西急進主義者間にありて如何なる地位を占めたりしかは、同封 (h)なる千八百四十八年三月一日附けにて、假政府の名に於て小生の佛蘭西歸來を求め、且つ Guizot の退去命令を取消し居る Flocon の書面に由て最もよく承知下さるべく候。

[内密。千八百四十四年夏、獨逸佛蘭西年報の書肆 (Julius Fröbel) 破産の後、學士 Claessen より Camphausen 並に自餘の萊因新聞株主の名に於て書狀一通並に金壹千タアレ

ル)を受取り申候。書狀中には小生の功績を誇張賞揚致居り、其爲め茲には封入致さず候。

ブルユツセルに居住せしは、千八百四十五年の始めより千八百四十八年三月始めまでに有之、此の時再び退去を命ぜられ、Floconの書狀に基づきて佛蘭西に歸來致候。ブルユツセルに於ては、巴里及びブルユツセル急進主義諸新聞に無報酬寄稿をなしたる外、Friedrich Engelsと共に、Kritik der kritischen Kritik(哲學論)(千八百四十五年フランクフルト・アム・マイン市 Rütten 出版)を著はし、Misere de la Philosophie(經濟論)(千八百四十七年ブルユツセル Vogler 及び巴里 Franck 出版) Discours sur le libre échange(ブルユツセル千八百四十七年)及び幾多の小冊子を著はし候。二卷より成る最近獨逸哲學及び社會主義に關する書は出版に至らず、Zur Kritik der politischen Oekonomie(千八百五十九年柏林 Duncker 出版)の序文を御覽可彼下候。ブルユツセル滞在期間を通じ、小生はブルユツセル市獨逸人労働者教育協會 Deutscher brüsseler Arbeit-terbildungsverein に於て「經濟學」に關する無報酬講義を試み候。此講義を集めたる印刷物は、二月革命の爲め印刷中絶致候。ブルユツセルに於ける(色彩甚だ異なる)急

進主義者間にありての小生の位置は、公けの國際協會 Sociétés internationale の爲めに、小生は獨逸人を代表して委員會に列し、Lewel(今八十歳の老翁にして、自千八百三十年至三十一年波蘭革命の老戰士たり、且つ造詣深き歴史研究者たる)は波蘭人を代表し、Imbert(後に巴里 Tuilerie の知事たりし)は佛蘭西人を代表し、而してブルユツセルの辯護士にして、先きに憲法議會の議員たり、又白耳義急進黨の領袖たる Jottand は白耳義人を代表して、何れも同時に會の主宰者たりし一事に依て示され候。Jottand(今は老人なる)の小生に與へたる二通の書狀(同封 $k_1$ 及び $k_2$ )並に Lewel の書狀(同封 $l$ )よりして、ブルユツセル滞在中に於ける小生の是等諸氏に對する關係は御承知相成べく候。Jottand の書狀(同封 $k_2$ )は、或公會の席上に於て、同氏と小生と爭論し、小生が國際協會よりの退會届を同氏に提出したる後に書かれたるものに有之、第二の書狀は小生が Klein に於て新萊因新聞を起こせしとき同氏の寄せたるものに有之候。巴里には再び千八百四十八年三月より五月末まで滞在致候。〔内密。Flocon は小生と Engels とに對し、新萊因新聞設立の爲め資金の提供を申出で候。吾々のそれを拒絶致候は、吾々は獨逸人として、親密なる佛蘭西政府よりなり

とも補助金を受くることを欲せざりしに由るものに有之候]

千八百四十八年五月より千八百四十九年五月末まで Köln に於て新萊茵新聞を發行致候。同封(1)によりて小生の萊茵エストフアリア・デモクラシー三會頭の一  
人を選ばれたることを御承知下され度く候。

〔内密。Köln に來着するや、小生は Camphausen の一友人より伯林に赴き同氏を訪問せんことを勧められ候へども、此暗示を顧みずして措き候〕

巴里滞在、千八百四十九年六月より同八月迄。Bonaparte 大統領政府の下に退去を命ぜらる。

千八百四十九年末より現在、即ち千八百六十年まで倫敦に居住致候。千八百五十年漢堡より Revue der Neuen Rheinischen Zeitung を發行し、Der 18. Brumaire des Louis Bonaparte (紐育千八百五十一年) Diplomatic Revelations of the 18th Century (倫敦千八百五十六年) Kritik der politischen Oekonomie 第一冊、千八百五十九年伯林 Duncker 版等を著はし、千八百五十一年以來今日に至るまで New York Tribune の寄書家たり、また獨逸勞働者協會の會員たりし間は、自千八百四十九年至千八百五十年九月(報酬

を受けずして幾度か試み候。同封〔秘密〕によりて小生が如何にして David Urquhart と相會するに至りしかを御承知被下度候。爾來今日に至るまで、小生は此人の發行せる Free Press に寄稿致居候。小生は此人とその對外政策(露西亞及びボナバルチスムに對する反對上の説を同じうするものにて、内政上に於ては然らず。内政上に於ては此人に反對なる憲章黨と一致するものに有之、此派の新聞殊に (Peoples Paper) の爲めには、六年間無報酬にて寄稿し來り候。同封 g を御覽下さるべく候。小生の千八百五十三年 New York Tribune 紙上に掲げて、Palmerstone を攻撃せる論説は、英蘭及び蘇格蘭に於て再三小冊子として一萬五千乃至二萬部複製せられ候。Urquhart 派の俱樂部はもと外交問題にのみ携はるものなるが、此中の一俱樂部の書記が、千八百五十六年シエフィールド俱樂部の依頼によりて小生に寄せしものなる同封 n によりて、小生が内政上の意見の相違にも拘らず、Urquhart 一派と如何なる關係に立てりしかを御承知下さるべく候。

同封 m 中の書簡は、辯護士(パリストル)にして世に知られたる憲章黨の首領たり、また詩人としても認められたる Ernest Jones より來れるものに有之候。

同封 o, n, m の翻譯は同封 p 中に有之候。

倫敦に於ける或る獨逸人方面より小生に對して云ひ觸らされたる風説に關しては同封 g Ritter vom edelmütigen Bewusstsein 中に轉載せられたる友人 Zellen (元と普魯西の中尉にして士官學校の教官たり、目下 Boston 在住) の書簡(第十四頁最も特色あるものに有之候)。

小生は、十年間絶えず攻撃を受けしにも拘らず、未だ曾て一言も自己の傳記を以て獨逸の公衆を惱ましたることなし。たゞ我が辯護士に對しては、今回の如き場合に於ては、之を缺くべからずと考へ候。

伊太利戰爭に就ては、猶ほ小生の此に對する見解の、我友 Fr. Engels が千八百五十九年伯林 Fr. Duncker より出せる著名の小冊子 Po und Rhein 中に言明せるところと全然一致するものなることを記し置かざるべからず候。此書の原稿は、その伯林に向て發送せらるゝに先たち、Engels より小生に送附せられしものに有之候。小生等は小生等が千八百四十八年新萊因新聞に於て、有ゆる獨逸の新聞雜誌中最も斷乎として言明主張せるが如く、自由獨立の伊太利を欲すること、匈牙利に對し、波

蘭に對すると正に同様に有之候へども、小生等は Bonaparte が露西亞と默契して伊太利の自由、若くは何れか他の民族問題を、獨逸を滅ぼす口實となす事を欲せざるものに有之候」

「改造第四卷第九號發表」

エンゲルスのロオドベルトス批評

エンゲルスはロオドベルトス自身及び其學徒が、ロオドベルトスを以て餘剩價值説の眞發見者なりとし、マルクスの學説は剽竊に出でたるものと公言するのを黙視することが出来なかつた。資本論第二卷の序文及び「哲學の貧困」新版（一八八四年）の序文に於て彼れば此批評の誣妄を明にしよつて居る。其要點を概括すれば、マルクスは其餘剩價值論を立つるに方つて、ロオドベルトスに斯の如き説あるを全く知らざりしこと、ロオドベルトスの餘剩價值説は年代の上より見れば毫も新説を以て目すべからざること、及びマルクスの學説とロオドベルトスの學説との間には、學説其者として、該學説の全體系上に於ける位置に就ても重要な相違あることが是れである。今左に掲げるところは「哲學の貧困」序文の極めて自由な抄譯である。マルクス自身のロオドベルトス批評（餘剩價值學説論第二卷第一冊）は別の機會に之を紹介する豫定である。

近世社會主義は、如何なる流派のものたるを問はず、苟もそのブルジョワ經濟學

から出發する限り、殆ど皆リカルドオの價值學説に結付いてゐる。リカルドオが一八一七年、其「原理」の卷首に掲げた二つの命題、即ち（一）各商品の價值は、その生産に要せられたる労働量に依てのみ決せらる、（二）全社會的労働の生産物は地主（地代資本家）利潤及び労働者賃銀なる三階級の間に分配せらるるといふ命題は、既に一八二一年以來英吉利に於て社會主義的結論を引き來る爲めに利用せられてゐる許りでなく、其中にはマルクスの「資本論」が出る迄は之を凌駕するものがなかつた程の犀利透徹なる議論もあつたのであるが、併し其事に就て論ずるのは別の機會に譲る。さういふ譯であるから、ロオドベルトスが「一八四二年其『Zur Erkenntnis』」で上記の二命題から自分で社會主義的結論を演釋し來つても、それは當時獨逸人としてはたしかに著しい一進歩ではあるが、併し精々獨逸に取つての新發見たるに止まるものである。此種のリカルドオ學説の應用が決して新しいものでないことは、同じやうな妄想に陥るつてゐたブルドンに對して、マルクスが其「哲學の貧困」の中でホジスキンの經濟學、トムソンの分配論、エドモンズの實踐的道德的及び政治的經濟、ブレエの労働の不當侵害と労働の救済等の書目を舉げて之を示してゐる。

當時マルクスは足未だ大英博物館圖書館の床を踏まず、巴里とブルユツセルの圖書館と、我輩の藏書及び手抄の外には僅かに一八四五年に自分と一緒に試みた六週間の英吉利旅行中、マンチエスタアで買ひ集めることの出来た書籍を通閲してゐるに過ぎないから、右書目中に挙げられてゐる諸書は、四十年代の當時には、決して今日のやうに手に入れ難いものではなかつたのである。それにも拘らず、是等の諸書がロオドベルトスに知られてゐなかつたとすれば、それは正しく彼れの普魯西的眼界狹隘の罪である。併し彼れの愛する普魯西國內に於ても、彼れは悠々としてはゐられなかつた筈である。一八五九年にマルクスの『經濟學批評第一冊』が伯林で出た。其中の第四十頁には、リカルドオに對する經濟學者の反對論の第二條として

「生産物の交換價值が、それに含まるゝ労働時間に等しきものならば、二労働日の交換價值は其生産物に等しい。換言すれば、賃銀は労働の生産物に等しくなければならぬ。ところが事實は正反對である」と記し、之に對する脚註に「此の經濟學者の側からリカルドオに提出せられた反對論は、後に社會主義者の側で之を取上げ

た。公式は理論上正しいものとして、實際が理論と撞着するの廉を以て咎められ、ブルジョワ社會は實際に其理論の原則を貫徹すべきことを求められたのである。此方法に於て少くも英吉利社會主義者は、リカルドオの交換價值の公式を經濟學に對して向ける武器としたのである」と記して居る。同じ註の中にマルクスの『哲學の貧困』が擧げてある。此書は當時猶ほ到處の書肆に就て買ふことが出来たのである。

さういふ譯であるから、ロオドベルトスは、その一八四二年の發見が果して眞に新發見であつたか何うかを確かめる機會が充分あつたのである。ところがそれをせず、彼れは彼の發見を比類なきものと信じ、マルクスも亦其結論をロオドベルトス自身と同様に、單獨にリカルドオから演繹し得た筈だと云ふことに會て思ひ及ばないのである。そんな筈はない。マルクスは彼れを「盗んだ」のだ。此結論が少なくも猶ほロオドベルトスに於て見るが如き粗雜なる形式に於ては、彼等二人よりも遙かに以前に、既に英吉利に於て發表せられてゐるといふ事を確かめ得る爲め、有ゆる機會を彼れに提供した、その同じマルクスが彼れを盗んだのだ！

リカルドオの學說の最も簡単な應用は、上記の如きものであるが、此は多くの場合に於て、遙かにリカルドオ以上に出づる餘剩價値の起源と本質とに關する洞察に導いた。ロオドベルトスの場合も其一例である。併し彼れが其先人の未だ言つて居らぬ全く新しい事は、何處にも言つて居らぬといふ點は之を措いても、彼れの記述は、其先人の記述と同様に、労働、資本、價値等の諸概念を、其内容を吟味することなく、經濟學者から傳へられた皮相的な形の儘で採用してゐるといふ疵病を持つてゐる。これが爲め彼れは、曾に自ら其將來の發展の途を全く杜絶した許りでなく、直ちにユウトピヤに通ずる途を開いたのである。

上記のリカルドオ學說の利用、即ち社會的生産物の總量は唯一の眞生産者たる労働者に屬すべきものなりとの結論は、直ちに共產主義に導くものである。然るに此應用は、上記マルクスの文句にも暗示せられてゐるやうに、經濟學上形式上謬つて居る。これは單に經濟に對する道義の適用に外ならぬからである。ブルジョワ經濟學の法則に従へば、生産物の大部分はそれを造つた労働者には屬さない。そこでそれは不當である、當さに然るべからざることであると云へば、それは差當

り經濟とは全く關係のない事である。吾々は此の經濟的事實が吾々の道念と接觸するといふに過ぎぬ。さればマルクスは未だ曾て其の共產主義的要求の根據を此には求めないで、吾人の目前に於て日々益々完了に近づきつゝ、ある資本的生産方法の必然的崩壊に之を求めたのである。彼れは一個の單純なる事實として、餘剩價値は支拂はれざる労働を以て成ると言つたに過ぎぬのである。

リカルドオの價値決定法は、特に善良なる市民の正義感情に訴へる一面を有つてゐる。商品價値の尺度は労働なることが一度認識されば、善良なる市民の感情は、この正義の根本則を名義上には承認しながら、事實上では常に恬然顧みざるの觀ある世の中の不當不義の爲めに傷けられざるを得ない。大生産と機械との競争の爲めに、日々其労働の價値が失はれて行く小市民小生産者は、特に生産物の完全に其労働價値に應じて相交換せらるゝ社會に憧憬せざるを得ない。換言すれば、商品生産の特殊の法則のみが完全に行はれて、而かも抑も其法則の行はれ得べき諸條件、即ち商品生産及び更に資本的生産の自餘諸法則の缺けてゐる一社會に憧憬せざるを得ないのである。

此の小市民のユウトビヤに對しては、マルクスが既にブルドン及びジョン・グレエ駁論中に残すところなく批評を加へてゐるから、我輩は此處には特にロオドベルトスの特色の存する點に對して數言を加へるに止めて置けばいゝのである。前述の通りロオドベルトスは、傳來の經濟學上の諸定義を、經濟學者に依て傳へられたる儘の形で採用して、全く之を吟味しようとは試みてゐない。彼に取つては價值は「一物の自餘の諸物に對する分量上の相當(Verhältnis)であつて、此相當は尺度として考へられたるものである。此の穩かに云つて、甚だ不的確なる定義は吾々に精々價值は凡そ如何なる外觀を呈するかの觀念を與へはするが、價值の何たるかは全く之を示さない。然しロオドベルトスが吾々に價值に就て告げ得るところは、之を以て盡きてゐるから、彼れが價值以外に存する價值の尺度を求めめるのは當然である。即ち彼れはアドルフ・グネル氏をして感嘆せしめたその抽象的思考力を以て、三十頁に亘つて使用價值と交換價值を減茶減茶に混亂せしめた揚句、眞の價值尺度なるものはなくて、吾人は尺度代用物を以て満足しなければならぬものであるといふ結論に到達する。斯の如き代用尺度には勞働を以て之に充て

ることが出来るけれども、それは事實上既に行はれてゐるのもよし、之を保障するやうな仕組を設けるのでも好いが、兎に角同量勞働の生産物同志が相交換せられる場合に限るのである。されば第一章は擧げて商品には勞働の費されある事、勞働の外何物も費されあらざる事、又その何故に然るかを説明する爲めに充てられてゐるにも拘らず、價值と勞働との間には何等客觀的關係はないのである。

勞働も亦彼れは經濟學者の場合に於けると同じ形の儘之を承認して居る。否なそれすらもして居らぬといふのは、勞働の強度の差が兩三語を以て指示せられてゐる外には、勞働は極く一般的に費用をなすもの、價值を測定するものとして引用せられて、それが標準的なる社會的平均條件の下に於て投下せられてゐるか否かは顧みられて居らぬからである。生産者が一日にして造られ得る生産物の製作に十日を費してゐるか否か、最良の道具を用ゐて居るか、最悪の道具を用ゐて居るか、その勞働時間を社會的に必要な貨物に對して、社會的に必要な數量に於て投じてゐるか、或は全く不要の貨物を作るか、それとも需要ある貨物を需要以上又は需要以下に作るか。凡て是等の點に干しては全く論ぜらるゝところがない。勞



働は労働である。同じ労働の生産物は同じ労働の生産物と交換されなければならぬのである。平生はその時宜に適すると否とを問はず、直ぐに國民的見地に立つて、一般的社會的望樓の高みから個々生産者の状態を概観しようとするロオドベルトスが、此場合には特に努めて之を避けてゐる。而して其譯けは、彼が其書の第一行から直ちに労働貨幣のユウトビヤに直進するからで、而して苟も労働の價值形成力の吟味は如何なるものも皆此航路の障害となるからである。此處では彼れの本能はその抽象的思考力よりも力強いのである。

然らば商品をして例外なく、其労働價值に應じて相交換せられしめる方法はと云へば、ロオドベルトスの場合にはそれは甚だ簡單である。同じ派に屬する自餘のユウトビストは、グレエからブルドンに至る迄皆な少くも經濟的問題は經濟的方法で、商品交換當事者其人の行爲に依て、解決しようとして苦心してゐるが、ロオドベルトスは善良なる普魯西人として直ちに之を國家に訴へる。國家の命令が改革を命ずるのである。

斯やうにして價值(少くも一部分生産物の價值)を制定した上で、國家は其労働貨

幣を發行し、工業資本家にそれで貸附をすると、資本家はそれで労働者に賃銀を支拂ひ、労働者は收得した労働紙幣で生産物を買ひ、斯くして紙幣は其の最初の出發點に還流するといふのである。此事が如何に美事に行はれるかはロオドベルトス自身の言葉に聽かなければならぬ。

ロオドベルトスは謂ふ、

第二の條件に就て云ふと、券面に證明せられてゐる價值が實際に交易上に存在するやうにする爲めの仕組は斯う云ふ風にする。即ち實際に一生産物を交附した者のみが其生産物を造る爲めに費やした労働量の精確に記入してある紙券を受取るやうにする。二日の労働の生産物を交附した者は「二日」と記入してある紙券を受取るのである。證明券の發行に當つて、此規則を嚴守することに依て必然此の第二の條件も満たされなければならぬのである。蓋し吾々の前提に従へば財の實際の價值は常に其製作に費された労働量と一致し、而して此労働量は普通の時間單位を其尺度とするものであるから、苟も二日の労働の投ぜられてある一生産物を交附した者が、二日の證明券を受取るならば、彼れは正に己れが給付した

丈けの——それ以上でも以下でもない——價值を收得する譯であるし、又實際に一生産物を交易に提供した者のみが、斯る證明券を受領するのであるから、券面に記入せられた丈けの價值が社會の需要満足の爲めに存在することも亦確實である。此規則を嚴守すれば、現存の價值額と證明せられたる價值額とは正確に一致する。然るに證明せられた價值額は正に指定せられた價值額と同一であるから、後者は必然現存價值と一致し、一切の要求は満たされ決濟は正しく行はれざるを得ないのであると。

ロオドベルトスは今迄何時も其新發見に於て立ち遅れの不幸に遭つて來たが、今度こそは少くも一種の獨創の功績を挙げ得たのである。彼れと同じやうに勞働貨幣のユウトピヤを説く競争者の中にも、それを此のやうな單純幼稚な、云はゞボメラニヤ的形式を以て説く事を敢てした者は外に誰れもないのである。元來今日の資本的社會に於ては、工業資本家は皆自己の判斷に従つて其の欲する物を欲する方法、欲する數量に於て生産する。社會の需要は彼れに取つては未知量である。それにも拘らず、結局何うにか需要が満たされて、大體に於て生産が需要あ

る物に向けられると云ふのは、何うしてかと云へば、それは競争に依て行はれるのである。即ち種類若しくは數量の上で、時の社會的需要に超過して生産せられた商品は、失價して勞働價值以下に下るといふことに依て、間接に生産者をして、無用若しくは必要以上なる商品の生産せられた事を感じせしめるのである。そこでこれから二つの結論が生ずる。

第一は商品價格が絶えず商品價值から離反するといふことは、商品價值を實現せしむる爲めの必要缺く可からざる條件であるといふことである。競争並に之と共に商品價格の動搖と云ふことに依てのみ、商品生産の價值法則は貫徹される。社會的必要勞働時間に依ての價值決定が現實の事實となるのである。尤も其場合に價值に表現形態たる價格は價值とは稍と異が、つた外觀を呈することにはなるが、これは獨り價值に限つたことではなくて、大多數の社會的事物の免れ難き運命である。そこで今ロオドベルトスのやうに、互に交換を行ふ商品生産者の社會に於て、勞働時間に由る價值決定を、競争を廢することに依て實現しようとするのは、例に由つて例の如き經濟法則の無視を證明するものに外ならぬ。勞働時間に

由る價值決定の實現といふことは競争の價格壓迫といふことより外に之を行ふ方法はないのである。

第二に競争は相互間に競争を行ふ商品生産者の社會に於て價值法則を實現せしむるところの競争は、また一に其事に依て社會的生産の秩序と組織とを可能ならしめるのである。生産物の失價若しくは増價に依てのみ、商品生産者は社會が何を幾許要求し、若しくは要求せざるかを覺らすにはゐられなくされるのである。然るにロオドベルトス等の主張するユウトビヤは正に此の唯一の調節装置を撤廢しようとする。これを撤廢して、何うして各生産物が必要量だけ生産せられ、又必要量以上には生産せられないといふ保障が與へられるか。吾々が穀物と肉との缺乏に苦しんでゐる一方に、砂糖と馬齡薯酒とが有り餘つて困つたり、洋袴の數が不足してゐるのに、洋袴釦が幾百萬となく生産せられたりすることが何うして起らぬと保障されるかと問へば、ロオドベルトスは意氣揚々として、其の結構な計算書を吾々に示す。それによれば過剰なる砂糖の各封度、賣れぬ薯酒の各瓶、不用なる洋袴釦の一件に對して正確なる證明書が交附されるのである。即ち嚴密に

「正確な計算、それに従へば、有ゆる要求が満たされて、而して決濟が正しく行はれる」計算、それを吾々に示すのである。それを信じない者はたゞボメラニヤの政府主金庫年金局計算官で、此計算を檢査して間違なしと認め、間違のないXに申し出ればいゝのである。

次にロオドベルトスが、無邪氣にも其ユウトビヤに依て工業上及び商業上の恐慌を防過しようとする、其の無邪氣さ加減を見て貰ひ度い。抑も商品生産が世界市場的範圍で行はれるやうになると、自己の計算に基づいて生産を行ふ個々の生産者と、その生産物を賣出す市場との均衡は、世界市場の暴風雨、即ち恐慌に依て回復されるのであるから、競争といふことが價格の騰落に依て、個々生産者に世界市場の情況を指示することがなくなれば、個々の生産者は全く目を塞がれたも同様になるのである。生産者をして復た再び市場の情況を知らしめぬやうにすること。これが實にドクトル・アイゼンバルト(山師醫者)をして羨望措くこと能はざらしむべきロオドベルトスの恐慌病に對する治療法なのである。

さて、最後に吾々はロオドベルトスが他の無數の勞働貨幣交換經濟の主張者と

は違つた眞に新しいことを云つてゐる一點に到達した。と云ふのは、最初の人々はグレエからブルドンに至るまで皆資本に依る賃銀労働搾取を撤廢する目的の爲めに此交換制度を要求して居る。各生産者をして其生産物の労働價值額を收得せしめようと云ふのである。ところがロオドベルトスは決してさうでない。賃銀労働と其搾取は依然として繼續するのである。

第一に労働者は如何なる社會に於ても其生産物の全價值を收得して消費し得るものではない。常に生産せられた基金の中から、經濟上不生産的ではあるが併し必要な幾多の職分を行ふ者を養ふ費用が支辨せられなければならないと云ふ。併しそれは今日の分業が存續する限りのみ正しい。國民全員が生産的労働に服する義務ある社會では、此事は最早なるのである。但し社會的豫備基金及び蓄積基金の必要は依然として存し、從て成程労働者たる全國民は、其生産物總量を所有享受するであらうが各個人が其全労働收益を收得すると云ふことはないのである。經濟上不生産的な職分を行ふ者を労働生産物の中から養ふといふことは他の労働貨幣ユトピストも之を看過しはしなかつたが、たゞ彼等は労働者

をして普通の民主的方法で此目的の爲めに自ら己れに義務を課せしめたのに、ロオドベルトスは全問題の決定を官僚政治の裁量に委し、上から労働者の己れを生産物に對する得分を定めて、之を恩惠的に收得せしめたのである。

第二にロオドベルトスは地代及び利潤をも削減せず、其儘に存続せしめようとする。蓋し地主及び工業資本家も、經濟的には不生産的でも、社會的には有用若しくは必要な或職分を行ふものであつて、謂はゞそれに對する俸給として地代及び利潤を收めるものであるからと云ふ。一體今日の彼等はその行ふ而かも充分悪しく行ふ僅かの職分に對して餘りに多くを收得して居るのであるが、ロオドベルトスは少くも、今後猶ほ五百年間は特權階級のあることを必要とし、現在の餘剩價值率も依然として存続すべきもので、たゞ今日以上に増進してはならぬと云ふ。此の餘剩價值率をロオドベルトスは二〇〇%と認めて居る。即ち一日十二時間労働の場合に、労働者は十二時間の證明券を得ないで、僅かに四時間の證明券を交附せられ、而して自餘の八時間内に生産せられた價值は、地主と資本家との間に分配せられるのである。即ちロオドベルトス式の労働證明は正面から嘘を吐いて

るるのである。これで労働者が甘じてゐるだらうと思ふのはボメラニヤの地主でなければ想像の出来ぬ事であるが、彼れは労働者が十二時間働きながら實は四時間しか働かなかつたのだと云はれて音なく承知してさへ居れば、その代りには今後永久労働者の彼自身の生産物に對する配當分が三分一以下には下らぬことを保證しようとするのである。かうなつては最早これに一言を費やす値打ちもない。即ち労働貨幣のユウトビヤに於て、ロオドベルトスが新しいことを述べてゐるところでは、新しきものは見戲に類するもので、彼れ以前及び彼れ以後の幾多の同意見者の業作の遙かに下風に立つものである。

ロオドベルトスの *Zur Erkenntnis* が出た頃の時代を取つては、それは慥かに重要な一著作であつた。彼れのリカルドオの價値理論の或方向への擴充は前途の見込みの多い發途であつた。此擴充が新しかつたのは、彼自身と獨逸とに取つてのみであつたとしても、猶ほそれは大體に於て彼れの優秀なる英吉利の先人の業作と比肩し得るものであつた。たゞ併し、それは一個の發途たるに過ぎなかつた。理論に取つての眞の所得を收めようとするには、これから進んで猶ほ根本的批評

的な研究を續けなければならぬのであつたが、ロオドベルトスは始めからリカルドオの擴充をユウトビヤの方向に於て行つたから、進歩の途は彼自ら之を遮斷したのである。而して之れに依て彼れは没成心といふ批評の第一要義を失つて仕舞つたのである。彼れは豫め定められたる目的に向つて突進した。彼れは傾向的經濟學者となつた。一度彼のユウトビヤに捉へられたので、彼れは自ら學問上に於ける進歩を全く不可能のものにしたのである。一八四二年から其死に至る迄彼れは一つの處に圈を描いて廻轉し、其第一作で既に言明したか、或は暗示したところの思想を常に繰返しては、誤解せられたと感じ、剽窃されるものもないのに、剽窃されたと感じ、而して最後には、根本に於て彼れは既に久しく發見せられてあつた事を、再び發見したに過ぎぬと云ふことを認めることを肯んじないのである。

(三田學會雜誌第十六卷第十、十一號發表)

大正十二年二月八日印刷  
大正十二年二月十日發行

價值論と社會主義

定價金參圓

版權所有

著者 小泉 信三

發行者 山本 美

印刷者 東 勇 治

東京市芝區愛宕下町一丁目一番地

東京市小石川區久堅町百〇八番地

東京市芝區愛宕下町一ノ一

改造社  
振替東京八四〇二

發行所

電話芝(一六三八番)  
四三〇三番

株式會社 博文館印刷所印刷

|                |                |                |                             |                |                |                              |                |                             |                             |                             |
|----------------|----------------|----------------|-----------------------------|----------------|----------------|------------------------------|----------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| 片山 潜著          | 室伏 高信著         | 饒平 名智太郎編       | 饒平 名智太郎 <small>木員信著</small> | 山 川 均著         | 中澤 臨川著         | パルトランド <small>ラッセル</small> 著 | 堀江 歸一著         | 福田 徳三 <small>法學博士</small> 著 | 福田 徳三 <small>法學博士</small> 著 | 福田 徳三 <small>法學博士</small> 著 |
| 自傳             | 靈の王國           | ガンヂ審判の日        | ガンヂと眞理の把持                   | レーニンとトロツキ      | 電子説から見た世界      | 愛國心の功過                       | 國際經濟と國民經濟      | ボルシエヰキズム研究                  | 社會政策と階級鬭爭                   | 社會運動と勞銀制度                   |
| 上四六判<br>製送料十五錢 | 上四六判<br>製送料十五錢 | 上四六判<br>製送料十五錢 | 上四六判<br>製送料十九錢              | 上四六判<br>製送料十五錢 | 上四六判<br>製送料十五錢 | 上四六判<br>製送料十五錢               | 上四六判<br>製送料十七錢 | 上四六判<br>製送料十七錢              | 上四六判<br>製送料十九錢              | 上四六判<br>製送料廿一錢              |

512  
65



終